鹿児島県史料

旧記雑録前編　二

題字

鹿児島県知事

鎌田要人

例　言

一　本書は、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本（伊地知季安・季通自筆原本）「前編舊記雜錄」を底本とし、巻二十六から巻四十八までを収めて、「鹿児島県史料旧記雑録前編二」として刊行するものである。本書に収載した文書の年代は、延文二年から天文二十三年までの百九十八年間である。

一　底本に欠脱した一部の文書・記事を、鹿児島県立図書館所蔵本から採録増補した。

一　収載された文書について、原文書や影写本がある場合にはそれにより修正したが、いちいちそのか所は示さなかった。

一　文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。重出する文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文を省略した。

一　文書・記事の内容が数種にわたる場合には、小番号を付した。

一　巻末に文書・記事目録をかかげたが、正文・案文・写などの区別はしなかった。

一　刊行にあたって、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ　文書の所在などを示す原注は一字下げて首部におき、この原注や文書中の異筆・補筆は、「　」（墨書）、『　』（朱書）で囲んだ。

ロ　合点は、頭または右肩に「╲」（墨）、「⋮」（朱）で示した。

ハ　文書の年月日・差出・宛所の位置などは、底本の体裁にあわせてある程度の統一をした。

ニ　書状の封じ目は、底本にあわせて「〳〵」や「ゟ」を併用した。

ホ　花押は（花押）とし、適宜に人名を傍注した。

ヘ　端裏書・付紙などは、「　」で囲み、右肩にその旨を注記した。

ト　文書・記事には、適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一　原文の磨滅虫損は、字数を推して□又は▯を以て示し、解読困難な字は、▩又は▩▩にして（ヨメズ）と注を付した。

一　原文の抹消は、その文字の左側に「ミ」を加えて、右側に書き改めた文字を記した。

一　頭注や行間の書きこみは、底本の体裁にあわせたが、頭注の長い場合はその位置を示し、関連か所の文末にまとめた。

一　人名・地名には適宜に傍注を付したが、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　原文中の返り点や送り仮名などは原則として省略し、仮名文書に付されていた底本の原注は、一部を残して省略した。

一　欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一　漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意をそこなわないものは、一部当用漢字新字体を使用した。

一　異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、一部底本の用字に従い、併用したものもある。

一　変体仮名などは、現行の平仮名に改めた。

一　当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

陳（陣）　蜜（密）　諏方（訪）　麑（鹿兒）　訴詔（訟）　飛彈（驒）　太輔（大）　狼籍（藉）

旧記雑録前編二　目次

例言……一
目次……四
巻二六　延文　二（一三五七）年――康安　元（一三六一）年（貞久公・師久公・氏久公）……一
巻二七　貞治　元（一三六二）年――應安　五（一三七二）年（貞久公・師久公・氏久公）……二五
巻二八　應安　六（一三七三）年――永和　元（一三七五）年（氏久公・伊久公）……六五
巻二九　永和　二（一三七六）年――永徳　三（一三八三）年（氏久公・伊久公）……九三
巻三〇　至徳　元（一三八四）年――應永　元（一三九四）年（元久公・伊久公・氏久公）……一二五
巻三一　應永　二（一三九五）年――同　六（一三九九）年（元久公・伊久公）……一五六
巻三二　應永　七（一四〇〇）年――同　一七（一四一〇）年（元久公・伊久公・久豊公）……一八八
巻三三　應永一八（一四一一）年――同　一九（一四一二）年（元久公・久豊公）……二四二
巻三四　應永二〇（一四一三）年――同　二七（一四二〇）年（久豊公・忠國公）……二七二
巻三五　應永二八（一四二一）年――同　三五（一四二八）年（久豊公・忠國公）……三一四
巻三六　正長　二（一四二九）年――永享　九（一四三七）年（忠國公・立久公）……三四五
巻三七　永享一〇（一四三八）年――文安　元（一四四四）年（忠國公）……三七九

巻三八　文安　二（一四四五）年――應仁　二（一四六八）年（忠國公・立久公）……四一一
巻三九　文明　元（一四六九）年――同　一五（一四八三）年（忠國公・立久公・忠昌公）……四六五
巻四〇　文明一六（一四八四）年――同　一八（一四八六）年（忠昌公）……五〇四
巻四一　長享　元（一四八七）年――文亀　四（一五〇四）年（忠昌公・忠治公）……五四二
巻四二　永正　元（一五〇四）年――同　一八（一五二一）年（忠昌公・忠治公・忠隆公・勝久公）……五八七
巻四三　大永　二（一五二二）年――同　七（一五二七）年（勝久公・忠良公・貴久公）……六三五
巻四四　享禄　元（一五二八）年――天文　四（一五三五）年（忠良公・勝久公・貴久公）……六八八
巻四五　天文　五（一五三六）年――同　一〇（一五四一）年（忠良公・勝久公・貴久公）……七四二
巻四六　天文一一（一五四二）年――同　一五（一五四六）年（忠良公・貴久公）……七九八
巻四七　天文一六（一五四七）年――同　一七（一五四八）年（忠良公・貴久公）……八三九
巻四八　天文一八（一五四九）年――同　二三（一五五四）年（忠良公・貴久公・義久公・義弘公）……八七四
文書・記事目録……九三三

（表紙）

貞久公
師久公　自延文二年
氏久公　至康安元年

前編　舊記雜錄　巻廿六

（原寸縦二四・三センチ　横一六・七センチ）

1　『入來院氏文書』

（端裏書）「馬渡瀬寄進狀　正文　乙酉歳也」

今日衣鉢御布施之事

清色北方馬渡瀬竹下記名四郎作壹段、手作貳段、壽昌寺方丈令進候、聊違乱妨不可有申仁候、仍爲後證狀如件、

延文二年正月廿日

『渋谷家五代』美濃守重勝（花押）

2　「正文在文庫」

（端裏）「口　宣案」

上卿（正親町忠季）右衛門督

延文二年正月廿八日　宣旨

左衛門少尉藤原師久

宜叙從五位下、

藏人頭左中辨藤原（日野）時光奉

3　「正文在文庫」

（端裏）「口　宣案」

上卿　右衛門督

延文二年正月廿八日　宣旨

從五位下藤原師久

宜如元爲檢非違使、

藏人頭左中辨藤原時光奉

「此二通、師久公御譜中ニアリ」

4　「氏久公御譜中」

爰有畠山治部大輔國長者、屬　宮方、來而逼于我之領内、爲寇者頻也、且亦信濃源氏之流、有榆井遠江守賴仲者、蜂起于日州、又有肝付八郎兼重者、共三輩交爭而犯我之薩隅日之地、故賴仲與兼重挑戰於坂上、則國長爲得其時、

而蜂起於薩州、逼于師久・氏久、已及合戰、加之、或耽私慾、或起述懷、爲遁時難、所背守護命令之地頭・御家人等、迄于谷山南方（阿多・川邊・知覽・頴娃・指宿・給黎等之諸所）帖佐・加治木・山北（東郷・入來院・祁答院・高城）、屬彼之旗下、是以屯國長之陣於野本・原羅、（両陣鹿児島郡之内）、故氏久既出野伏於兩陣、日日合戰、更無止時、當此之時、國長軍中、有稱多田七郎者、笠驗袖驗盡花美、一人前來曰、島津殿軍中山田彌九郎殿聞其名者有素、未遂親覩、冀只今欲見參、彌九郎未待其一言之終、帶四尺餘之太刀、持手楯、已欲發於陣中、傍輩等問其故、則曰、招吾於敵軍中、所以好見參之強敵、何可不打上太刀於吾乎、然則、吾亦指出手楯、當打其下、而後引組決勝負云云、忽兩輩進出于田間、敵御方之軍士共扣後陣、兩人已及合戰、七郎揚大長刀於高上、將勝於決一戰、彌九郎指出手楯、切其端於渠而前寄、自袖頭至草摺切落、七郎亦彌九郎之自冑眞甲至吹返切拂、而互前欲與討、見其氣象、則敵御方所扣後陣之軍衆、同時到于戰場、引退左右、宛似有前約以如斯、已到于半途之際、彌九郎曰、今之可至戰場、問曰、何故、答曰、當敵笠驗所切落不足疑、取之以爲合戰之驗、再往于戰場、得其笠驗、貫太刀高指上曰、今日之勝負以是爲證、發鬨聲、敵亦和之、少焉從國長之軍中、高聲甸曰、只今之働、強剛花美、異國本朝無可比類者、而況於御方軍兵乎、尓來島津殿與畠山殿野元合戰、無物欲比、迄于後世謳歌敢不止云云、山田彌九郎者、古昔源平合戰之際、於越前州篠原、與長井齋藤別當實盛、於同所遂戰死武藏三郎左衞門尉有國之後裔也、有國之子孫屬于當家元祖忠久公在于當國、故賜薩摩州日置郡内山田村領知、以居于此、由是號山田云云、

肝付八郎兼重居住于日州三俣院高城、故一節稱三俣殿云云、又山東・穆佐・高城亦有居住時也、兼重舍弟有五郎九郎者、居住于大姶良内城、城麓之濱田・横山・完目・大姶良四ヶ村之長共、向意於氏久矣、五郎九郎聞之、卽攻落横山城、濱田某者遂戰死、完目某者遁而出城外、則已及日暮、完目氏竹林間路隱居而窺待於敵退、爰大將五郎九郎散憤脱冑、緩然而歸去、完目窺得之、爲所以願之寇敵、恣切落于馬下、完目者忍入于茂林之中、遁虎口全一身、致忠節於氏久者也、

榆井賴仲者、居住于志布志、故肝付五郎九郎已聞於死亡之告、爲得其時、而發軍勢於志布志、攻落於大姶良城、依之肝付亦爲賴仲之押領矣、肝付有號大釋寺之梵宇、賴

仲移之於志布志、改先號大慈寺云云、
榆井頼仲誇于武威、専于私慾恣行虚政、於茲畠山治部大輔廻于籌策、逼于頼仲、攻落於志布志松尾城、頼仲遁出城門、欲去無路、不得已而入于大慈寺寶池庵、而後自殺畢、頼仲未自殺之際、忽書位牌及辭世之偈頌和歌、以遺後世如左、

位牌表

辭世　大事因縁五十七年
開山檀那仲公大用大禪定門

偈頌　遊戯自在劍樹刀山

裏

こし方も又ゆくすゑもこの事の（年カ）
此月のけふたゝ今にあり

延文二年丁酉二月五日　　大用在判

5　『櫻島上山氏文書』

ゆつりあたへ候上山のたうちの事、さつまのくにかこしまのうちにしたの（西田）むら（村）うしろさこのいやしき、たハ六反廿、その三ヶ所、さかい、ひんかしみなミハおうちをさかう、にしハかわをさかう、きたハなつかけやまし郎か（夏蔭山四郎）さかを（坂）かきりにて候、うへやまのゑもん五郎殿ニゆつり（上山）候、又なんときもひいのかわのあまかくたり候ハ、（計）ハこ（こ）かうにて候、そのほとハ、はからい候へく候、たのいら（他ノ違）乱んおなさらんしやう件、（如脱カ）

正平十二年（みのとし）（ミつのとの）二月十一日

ちくせんのくにはかたのひいのかわのこけ（後家）判

ゆつり狀

上山ゑもん五郎とのへ

右者、私先祖譲狀書写可進旨、任御望貳通書写進覧仕候、（『壱通ハ正平七二月十日ノ場ニ入ル』）
以上、

天文元年丙辰十月廿八日　　櫻嶋住大神　上山大右衛門惟榮判

上山寺恵心和尚様

6　『臺明寺文書』

凶徒退治事、急速可遂其功也、此時分殊以可被抽祈禱精誠之狀如件、

延文二年三月廿九日　　治部大輔（花押）

臺明寺衆徒御中

7　「正文在西俣氏」

大隅國野心之輩、爲退治、可被發向也、仍如件、

正平十二年四月十五日　　氏久(花押)

西俣兵衞尉殿

8

「氏久公御譜中」

「在田代縫殿清長」

大隅國串良院弁分上条・同立小野村并鹿屋院内高限村弁分事、爲兵粮析所〻宛行也、任先例、令知行之、可被抽軍功之狀如件、

正平十二年四月廿日(『丁酉』)　　左衞門尉(氏久)

田代次郎殿(以久カ)

「次目裏判」(花押)(元久)

9

「仝上」

「仝上」

大隅國串良院半分地頭職事、爲兵粮析所〻宛行也、任先例、令知行之、可被致軍功之狀如件、

正平十二年四月廿日　　左衞門尉(氏久)

田代七郎入道殿(道清)

「次目裏判」(花押)(元久)

10

『比志島氏文書』

一見了(花押)『三条泰季判也』

薩摩國滿家院比志嶋太郎範平申軍忠事

右、御大將隅州御發向之間、最前馳參、去年十月廿五日岩屋城御退治以來、属于御手、致日夜合戰忠節候之上、去正月廿一日合戰、中間平六被疵、右股、同廿五日合戰、舍弟彦次郎範家被疵、右足、去三月廿日夜濱陣御合戰、致先懸自身被疵、左手、同方腰、中間平六左股被疵候畢、同時合戰輩、伊集院帖佐太郎左衞門尉、久木崎五郎兵衞尉見知畢、然者預御注進、浴恩賞、弥爲抽弓箭面目、恐〻言上如件、

正平十二年卯月　日

11

『比志島氏文書』

薩摩國滿家院比志嶋太郎範平申軍忠事

右、去年十月廿五日岩屋城御退治以來、属于御手、致日夜合戰忠節、去正月廿一日中間平六被疵、右股、同廿五日舍弟彦次郎被疵、左足、去月廿日夜濱陣御合戰、致先懸自身被疵、左手同方腰、中間平六左股被疵候畢、此段度〻御注進勘文明白上者、預御一見狀、爲備後證亀鏡、恐〻言上如件、

正平十二年卯月　日
承了(氏久)(花押)

12 『仝』

隅州退治事、來廿五日治定候了、爲御用意申候、其内入見參、諸事可申承候、恐々謹言、

卯月十四日　氏久(花押)

比志嶋殿

(折返奥端上書)

比志嶋殿　氏久

13 『比志島氏文書』

大隅國肝付郡内木志良村地頭弁分并羽見村地頭職事、爲兵粮析所々宛行也、令分配一族等、任先例、知行之、弥可被抽軍功之狀如件、

正平十二年四月廿八日　左衛門尉(氏久)(花押)

比志嶋太郎(範平)殿

「此文、在氏久公御譜中」

14 「氏久公御譜中」

「正文在清水衆野田主馬」

一見了(三条泰季)(花押)

□(薩)摩國伊集院野田刑部左衛門尉□申軍忠事

□六年十月廿五日岩屋城御退治□(以)來、度々御合戰抽忠節、去三月□(廿)日夜濱陣御合戰、舍弟宮内右衛門尉兼弘被疵、左腑切疵、嶋津三郎左衛門尉氏久同所合戰之間、令見知旱、然者早給御一見狀、爲備後證、恐々言上如件、

正平十二年五月　日

15 『写在旧記』

大隅國祢寢又五郎建部清増軍忠事

右、去延文元年十月廿五日、薩州凶徒大將三条侍從泰季并嶋津三郎左衛門尉氏久以下、率數多軍勢、寄來加治木城、取向陳於所々之間、即時馳向致合戰之刻、同延文二正月廿七日、榆井四郎頼仲打入日州救二郷胡麻崎、構城塀楯籠之間、不廻時尅馳向、致散々合戰、若黨大夫房被疵、右足、同晦日、攻破彼城、頼仲・頼重以下、親類若黨等數十人討取之訖、仍自最前迄于今、所々合戰抽忠節之条、御見知之間、不及巨細、然早預御證判、爲備後代、粗恐々言上如件、

延文貳年五月　日

承了（『直顕』花押）

16

『写在旧記』

大隅國祢寢孫四郎重種軍忠事

右、去延文元年十月廿五日、薩州凶徒大將三条侍從泰季并嶋津三郎左衞門尉氏久、率數多軍勢、寄來當國加治木城、取向陳於所々之間、馳向致合戰之刻、同延文二正月廿七日、凶徒榆井四郎賴仲打入日州救二郷胡麻崎、構城塀之間、馳廻（マヽ）時向（マヽ）致散々合戰、攻破彼城、賴仲・同舎弟又四郎賴重以下、親類若黨等數十人討取之訖、仍所々合戰抽忠節之上者、預御一見之狀、爲備後代、粗恐々言上如件、

延文貳年五月　日

承了（『直顕』花押）

17

『入來臣武光氏文書』

薩摩國日置庄古恒跡田地貳拾町地頭職事、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

延文二年五月十九日　　右京大夫（一色直氏）（花押）

武光三郎殿

18

「市來崎氏文書」

薩摩國日置内恒吉名田地陸町・同所若松田地陸町地頭職事、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

延文二年五月十九日　　右京大夫（一色直氏）（花押）

市來彦七郎殿

19

『寶滿寺文書古写』

奉寄進　寶滿寺

日向國南郷下里永吉名内水田伍段□

右、爲佛法興隆、天下安平、子孫□兆民快樂、所奉寄附之狀如件、

延文二年潤七月一日　　左衞門尉平重□

20

『入來院氏臣永利氏文書』

薩摩國薩摩郡内勸童・永利兩名地頭職、道鑒雖爲重代所領、永利又太郎友秀仁限永代所避渡也、若於道鑒跡、此所仁於致違乱輩者、不可爲子孫儀、勸童・永利兩名地頭

職事、落居之上者、日次公事止之畢、仍狀如件、

正平十三年八月十二日　　師久在判トアリ

道鑒在判トアリ

（花押）「此判ハ日次ノ字ノ裏ニアリ、正裏ヨリ師久ノ方ニヨル」

21

『肝属河内守兼氏譜中』

正平十二年丁酉、北朝延文二年、初畠山直顯取志布志城、城主榆井頼仲蓋奔大崎、據胡麻崎城、遺墟今在大崎郷假宿村、至是正月二十七日、直顯及禰寢清種等圍胡麻崎、晦日陷之、二月、直顯又攻松尾城、遺墟在地頭舘西二町許志布志村、大敗其師、頼仲力屈、五日、自殺於寶池菴、一説、晦日、清種等殺頼仲於胡麻崎、據聖榮自記及頼仲神主陰文等、則以此日死明矣、蓋晦日詐死至此爾、○四月二十日、公賜田代次郎立小野村在串良院、高隈村在鹿屋院、之辨分、賜田代七郎入道串良院半分地頭職、○二十八日、賜比志島太郎範平木志良村地頭辨分及羽見村地頭職、蓋辨分本皆我辨濟使職田、而其寄島津莊者、則道鑑公嘗以幕府命食其租入、傳至　齡岳公、方今爲　南帝分畀功士、令給兵粮、故蓋聽　命、是歳、秋兼卒、兼里立嗣、乃八月十三日、以内浦小串村爲玄源兼重法名、龍岳秋兼法名、二神主之祭田、襯諸龍護庵、授書誓之、

22

『仝』

奉寄進

大慈寺開山塔頭龍護庵

肝付郡内浦下方小串村田地之事

四至堺目任先例、

右之志者、　玄源禪門・同龍岳禪門爲追善、所奉寄進也、永代爲此子孫者、不可有違乱之狀如件、

正平十二年八月十三日　　伴兼里（花押）

大慈寺龍護庵

23

『藤野氏文書』

しまつのはんくハん□されぬ候もんその事

右、もんそのちうもんをハ、弥阿弥陀仏御もとにまいらせをき候、このもんそ御さたに入候間、貞阿申給候、ようすき候てハ、もとのことく進をき候へく候、よて後ために狀如件、

延文二年九月四日　　『酒勾次郎左衛門貞資入道貞阿』沙弥貞阿（花押）

「此文書、師久公御譜中ニ在リ、正文有之トアリ」

24

『正文在宮内社司澤氏』

正八幡宮所奉寄進之大隅國岩河村參分貳事、於下地者、令知行之、到土貢者、爲御供析足之間、可被進濟御供所之狀如件、

正平十二年九月廿日　　左衛門尉(氏久)有判

吉田若狭守殿

25の1

「牛屎文書」

覺

延文二年丁酉九月、畠山治部太夫直顯籠城日州六笠、依是菊地肥後守武光可責之由有其聞得、其比又嶋津左衛門尉師久令發向加治木、仍而祁答院之郡司澁谷之一族、僞而号令加勢、直顯相催一族等、九月晦日、打入加治木城、既与師久及合戰、依是師久請合力於左近將監高元、給其貴札云、

25の2

「包紙上書」

正平十二　　嶋津とのより

牛屎左近將監殿　　師久

爲加治木發向打立候剋、澁谷一族等、以直顯合力之方便、相語當所郡司・同一族、去月晦日辰剋、澁谷勢打入彼等之城候之際、合戰最中候、仍御合力候者、悦存候、委細之旨東郷ニ令申候訖、定可被聞召候哉、每事期後信候、恐々謹言、

十月五　　師久(花押)

牛屎左近將監殿

26

「正文在土持孫兵衛家」

日向國新納院嶋津近江守時久地頭職之事、爲兵粮料所宛行也、弥可致忠節狀如件、

延文二年丁酉十二月十三日　　刑部少輔(一色範親)御在判

土持冠者殿

27

『肝付河内守兼氏傳』

十三年戊戌、北朝延文三年、畠山直顯據六笠城、其子重隆居三俣城、菊池武光及公連和、共振兵威、直顯不應、於是十一月(一説延文四年事)武光帥師、攻三俣城陷之、直顯父子遁匿、

28

『入來院氏文書』

馳參御方、可致軍忠之由、被聞食之狀如件、

正平十三年三月六日　　修理權太夫(花押)

澁谷九郎(重興)左衛門尉館

29 「安養院文書」

立願　鹿児嶋諏方大明神

右、遂本意者、郡内田地壹所、小笠懸百番、神馬一疋、

可令進宮之狀如件、

正平十三年『戊戌』卯月四日　　氏久（花押）

「此文書、氏久公御譜中ニ在リ」

30 「都之城家蔵」

譲与　舎弟資忠分、大隅國本庄内財部院事、

右處者、限永代所譲与也、有限御公事者、守惣領師久支配、（任脱カ）先例、可令勤仕之狀如件、

延文三年（四カ）卯月五日　　道鑑

（本文書ハ次号文書ト同一ナルベシ）

31 「北郷家蔵」

譲与　舎弟資忠分

大隅國本庄内財部院事

右所者、限永代所譲与也、於有限御公事者、守惣領師久支配、（任脱カ）先例、可令勤仕之狀如件、

延文三年卯月五日　　道鑑

「続目裁判」（師久）（花押）　「同」（氏久）（花押）

32 「宮之城柿木原平右衛門蔵」

大隅國菱苅郡柿木原左衛門太郎隆實軍忠之事

右、去十四日加治木院田間要害、中津津（ママ）河勘解由左衛門尉并國郡小太郎以下凶徒等楯籠、致合戦之時、自身被疵、左ヒサツキ、ス、仍致度々軍忠之上者、欲預御注進候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正平十三年四月廿六日　　藤原隆實

進上　御奉行所

越後守氏久承了御判

33 「安養院文書」

鹿児嶋郡伊敷村内

國引田壱町伊地知彦七跡事

今度合戦遂先途之間、任願書之旨、所奉寄進也、守先例、令領知之、可被致朝暮祈禱之狀如件、

正平十三年四月廿八日　　氏久（花押）

諏方座主兵部律師御房

「氏久公御譜中ニ在リ」

34

『岸良氏文書』

大隅國肝付郡内岸良村弁濟使職事

右、任阿佛讓、一言も不可有違乱、契約申候上者、親子兄弟之思於封事「本ノマヽ」たかいニ見継ミつかれ申へく候、仍爲後日契約狀如件、

「張紙ニ」正平十三年四月廿九日　　伴兼世在判

岸良雅樂介殿

35

『山田氏文書』

鹿児島郡内上伊敷村地頭職事、爲給分所宛行也、任先例、知行不可有相違之狀如件、

正平十三年五月一日　　氏久(花押)

山田諸三(忠経)郎殿

36

「寫在樺山源三郎久清」

馳參之條神妙、并可抽軍忠之由、依仰狀如件、

正平十三年六月十八日　　修理權太夫判

嶋津上總三郎右衛門尉『資久』館

「此文書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

37

『載山田譜』

鹿児嶋郡内上伊敷・下田兩村地頭得分事、以參分貳爲給分所相計也、知行不可有相違之狀如件、

正平十三年七月一日　　氏久(花押)

山田諸三(忠経)郎殿

38

「道鑑公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」「坊門」殿御書　「朱カキ」「御賀本殿持下」

九州事、以使承候、此間しんく思遣候、近日使者遣之候、其時委細可申候、謹言、

「延文三年カ」七月廿九日　　義詮御判

一色入道(道猷)殿

39

「道鑑公御譜中」

「写有之」

「坊門殿御書」「御賀本持下」

於九州度々忠節、殊以感思候、猶以可致戰功候也、謹言、

「延文三年カ」八月六日　　義詮御判

一色右京大夫（直氏）殿

40

「道鑑公御譜中」

「寫在入來院石見重頼」

（本文書ハ二〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

41

「權執印文書」

（花押）

御供所職事、清直任雅意、依令質券沽却、彼料田御供闕怠之間、被収公其職早、若買得之輩等、有申子細事者、可令注進交名、可有嚴密之御沙汰之由、可令承知、永賢給之旨所候也、仍執達如件、

延文三年九月四日　　沙弥道順

謹上　正八幡宮執印法橋御房

42

御供所職事、就質券沽却地事、所被成御教書也、早任被仰下候旨、相觸權執印、若有申子細候輩者、可令注進交名之由、可被下知也、仍執達如件、

延文三年九月十日　　執印□（「不明」）元（花押）

正宮留守左衛門入道殿

43

「氏久公御譜中」

「正文在清水衆瀬戸口彈兵衛」

「被参御方欤」参御方被致忠節者、本領事、不可有相違狀如件、

正平十三年十月廿日　　修理亮氏久（花押）

姫木弥四郎入道殿

44

「帖佐船津村森永ノ仲太郎蔵」

被参御方候者、本領不可有相違之狀如件、

正平十三年十一月九日　　修理亮（氏久）（花押）

姫木又次郎殿

45

『雜抄』

禁制

大慈寺

濫妨狼藉事

右、於此寺、當手軍勢等不可致狼藉、若於違犯之輩者、

可處罪科之狀如件、

正平十三年十二月二日　　菊池武光肥後守（花押）

46

『載肝屬兼氏傳』

奉寄進　大慈禪寺

日向國救仁院志布志條内

夏井　益倉村事

右、爲天長地久、國土安穩、萬民快樂、奉寄附之狀如件、

正平十二年正月十一日　　左衞門尉基榮在判

47

『載于小濱十郎家藏手鑑』

大隅國岩河村内本職等事、給主依非御中絶候、早如元令領掌、弥可抽軍忠之狀如件、

延文四年三月廿九日　　『畠山直顯』（花押）

赤崎奏（泰カ）次殿

48

「師久公御譜中」

「寫在五之巻」

讓与　松浦女房分

薩摩國山門院内三箇村并脇本村

同國河邊郡内嘉古村事

右所〻者、一期之後、可返付惣領師久狀如件、

延文二年卯月五日　　道鑒「同」（氏久）（花押）

「統目裏判」（師久）（花押）

49

「師久公御譜中」

「寫在五之巻」

讓与　大輔局分

薩摩國山門院内青木原村事

右所者、一期之後、可返付惣領師久狀如件、

延文三年卯月五日　　道鑒「同」（氏久）（花押）

「統目裏判」（師久）（花押）

50

「氏久公御譜中　在京女子傳」

「寫有之」

讓与　京女子分

大隅國寄郡内西俣村事

右所者、一期之後、可返付惣領師久狀如件、

延文三年卯月五日　　道鑒

「続目裏判外同ジ」

51

「在氏久公御譜中祖鑒房傳」

「正文有之」

譲与　女子祖鑒房分

大隅國本庄内岩河村南方事

右所者、一期之後、可返付氏久状如件、

『当正平十四年』『己亥』

延文三年卯月五日　　道鑒

「右接目裏判」(師久)(花押)　「同」(氏久)(花押)

52

「道鑒公御譜中」

「正文有之」

條々

一祖父道佛(忠時)并亡父道儀(ママ)代々任置文之旨、無主一族同子孫等跡事、惣領師久可申給之、

一惣領大事出來之時者、庶子等悉可令同道、若令違背者、可申給彼仁跡、

一道鑒(貞久)男女子孫得分親等中仁、於現不忠不調輩所領者、師久可知行之、但、爲掠取所帯、構出不実者、不可知行道鑒跡、

一男女子孫等、無牢籠儀之様、可加扶持、

一乙壽(氏忠)丸譲与所領等事、若無一子、有早世事者、師久可知行之、

一本田次郎左衛門入道兼阿事、爲年來仁上、自幼少至于今、都鄙令隨逐之間、存不便者也、兼阿一期之程、恩給地等不可有改動之儀、

一譲狀拾通所認置也、

右條々、守堅此置文之旨、可致其沙汰也、於違犯子孫等者、不可知行所領之狀如件、

延文三年卯月五日　　道鑒(花押)

(張紙)「此御書ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御譲状置文ノ一巻中ニアリ、但卯月五日ノ分ハ皆同巻中ニアリ」

53

「北郷家元祖資忠譜中」

延文四年己亥卯月五日、　太守道鑒公賜大隅財部院、譲狀寫左記之、

54

（本文書ハ三一号文書ト同文ニツキ省略ス）

55

「氏久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋」

柏原保東方事、致忠節之上者、爲兵粮析所所預置也、任先例、令領之、弥可被抽軍功之狀如件、

正平十四年四月十九日　　修理亮（花押）

野崎太郎左衛門尉殿

「上包」野崎太郎左衛門尉殿　　修理亮氏久

56

「在太平記三十三巻」

延文四年己亥之、鎭西探題一色左京大夫直氏舎弟修理大夫範光者、與菊池肥後守武光戰而敗走、且已令歸京、故小貳・大友・嶋津・阿野・草野等皆以失合戰之籌策、不意屬宮方、只後來之俟時宜而已、其後故細川陸奥守顯氏之息男使式部大夫繫氏、任伊豫守稱九州大將、已爲發向先到于讃岐國、揃兵船集軍勢、于時六月二日、罹病痾有平臥之牀、漸邪氣之爲大熱病、醫陰共以不驗、未過七日忽赴黃泉畢、是落崇德院御領地、而爲軍勢兵粮料所、因茲蒙御罰如斯云々、以之故、九州悉屬宮方、爰有畠山治部大輔者、日向國在穆佐、而不屬宮方、同年十一月、菊池肥後守武光率五千餘騎、超嶮難到于日州、治部大輔之男民部少輔之所居陷三俣城、討殺者凡三百人、畠山父子迯入于深山、菊池遂本懐令歸陣、以此時爲佳期、小貳・大友・嶋津如元爲將軍方、將討菊池之歸軍、菊池不戰而歸肥後國畢、

57

延文四年己亥

十月五日、佐多左馬助忠直（岭岳公自将として相良氏の師と國合原に戰ハせらるに從ひ、味方敗れる時き、両弟と戰て死之、年二十五、）佐多彦四郎（以下二十三人、）佐多三郎四郎（主従四人、）向江弥太郎（此ころ岭岳公兵を起され、求仁郷氏をハ蓬原城に、岩川某をハ手取城に攻らるに從ひ、戰て死之、年月闕れハ此にを等も又同時歟、）久木崎丹後（くなり、）

58

（花押）

御供所職事、爲闕所之間、就器量可奉行之由、被仰下之處、被領狀、仍質券沽却之地事、於申子細之輩者、可被注進交名之由、被仰下之處、依令彼御教書到來之前後、參差令上表之条、以外也、早任延文三年九月四日御教書之旨、居其職、可全御供之由、依長吏仰、執達如件、

延文五年三月十八日　　少別當朝實

權執印法橋御房

59 『長谷場氏文書』

長谷場内五段・甘子木村内西牟田五段、譲与兵庫允久純之處、先主純阿令死去之間、鶴一丸仁相副本譲狀、所宛譲也、有限於公方役并地頭年貢者、隨分限可致其沙汰、而惣領と成水魚之思、迄于後ゝ末代、無相違可知行之狀如件、

正平十四年六月廿一日　　（長谷場）實純（花押）

純阿（花押）

60 「道鑑公御譜中」

「正文有之」

御札委細承候畢、如仰去春之比、預御狀候、恐悦候、隨而御賢息（伊久）可有御參之由承候之際、目出候之處、御延引、無念之次第候、其間事、御使令申候了、恐ゝ謹言、

七月四日　　（菊池）肥後守武光（花押）

謹上　嶋津判官（師久）入道殿　御返事

「朱カキ」「判官入道上総入道誤欤、判官入道ハ伊久也、鎮西時代相違、是以載之、於此可有再考」

61 「道鑑公御譜中」

鎮西探題一色左京大夫直氏舎弟修理大夫範光、延文四年己亥之春、與菊池肥後守武光及合戦、探題之軍敗、而以歸京矣、由是小貳・大友・島津・草野等共以失合戦之籌策、不意屬于宮、俟後來時宜耳、其後故細川陸奥守顯氏息男式部大夫繫氏、任伊豫守爲九州大將、已解纜赴西海、先渡讃岐國、催軍衆揃兵船之際、六月二日罹邪氣大熱病、在平臥之床、醫陰兩道共以不驗、未經七ヶ日赴黄泉矣、是又落　崇徳院御領地、而爲軍衆兵粮料所、因茲蒙其御罰、如斯云爾、以故無九州一士之不屬宮方、爰有畠山治部大輔者、在日向州穆佐城、而不屬宮方也、同年十一月菊池肥後守武光率五千餘騎、超嶮難到日州、而治部大輔之男民部少輔之所居陥三俣城、屠殺者凡三百人、畠山父子遁死迯入深山矣、菊池得勝利快心爲歸陣、以此時爲佳期、小貳・大友・島津如元爲將軍方、欲菊池之討歸軍、菊池不戰而歸肥後國也、

62

（花押）

栗野南里當年ゝ貢以下爲催促、所被下遣預所使者也、早無未進懈怠、可致其沙汰、次使者在庄之厨雑事、上洛之

衣裳草手等、任先例、可沙汰与(欲)之由、可被下知之旨所候也、仍執達如件、

延文四年八月十七日　　沙弥道順

謹上　正宮執印法橋御房

63

「安養院文書」

日向國求仁郷永吉東方比志田内地頭屋敷二ヶ所（平九郎薗、海入道薗、）

并法橋薗一ヶ所・江六薗一ヶ所事、先日任祈願之旨、鹿児嶋諏方大明神所奉寄進也、任先例、知行不可有相違之狀如件、

「延文四年」正平十四年八月卅日　　修理亮氏久（花押）

諏方座主兵部律師御房

「此文書、氏久公御譜中ニ在リ、正文在安養院トアリ」

64

「氏久公御譜中」

氏久常歎曰、未荘内之入于手裏、欲攻之、則自求麻（相良）眞幸（北原）至北郷野〻三谷、連續之大敵、輕難征伐、雖然依難黙止、延文四年己亥十月五日、發軍勢於南郷之路、於國合有合戰、時守護方敗北、佐多左馬助忠直（二代目也、忠光一男、）同彦四郎（忠光四男、）遂戰死、諸軍不得退去、難儀之至也、爰岩川某者、不有敵軍、又不有御方軍、是以氏久直征、而雖請合力於岩川、敢以不承諾、又往于蓬原、雖請加勢於求仁郷、是亦不應諾、欲歸于志布志無路、串良亦敵路也、故往百引定歸路、而求指南之者、以越於市成飯牟禮山嶮路、無恙到著于二川浦也、其間乘馬之轡、以紙包之、是又懼轡聲之觸他人耳也、於茲乎、畀于感牘於山路指南、而後歸著于麑島也、

前日以不歸服之憤、氏久自引率於軍衆、既以進發、先著陣于求仁郷某之蓬原城、不日陥之、次押寄于岩川某之手取城、無程攻落、盡屬于手裏、此時御方軍中有向江彌太郎者、遂戰死畢、於求仁郷・岩川者共爲守護領也、

65

「佐多氏譜中」

―忠直――――――――

又四郎　左馬助

建武二年乙亥誕生、延文四年十月五日、從　太守氏久公、軍日州南郷國合、合戰數回、竟結纓、年二十五、法名道覺大禪定門、

―彦四郎

兄忠直同時戰死、

一三郎四郎

兄忠直戰死之日、聞其告、馳入敵軍、竟戰死、是時當家重寶號爪切丸大刀、爲敵奪之、

66

「氏久公御譜中」

「正文在始良衆大圓房」

弥致忠節者、當知行之地、不可有相違之狀如件、

正平十四年十一月十日　　修理亮(氏久)(花押)

得丸六郎五郎殿

67

「氏久公御譜中」

「正文在始良衆大圓房」

大隅國小原別符西方地頭分柏原東方原田将監跡、日向國救仁院内野与倉茶(桑カ)事、爲兵粮析所〻相計也、可被致忠節之狀如件、

正平十四年十一月十五日　　修理亮(氏久)(花押)

得丸左近將監殿

68

『田代氏文書』

大隅國鹿屋院地頭并弁濟使職事、忠節吳于他之間、所相計也、弥可被抽軍功之狀如件、

正平十四年十一月廿七日　　修理亮(氏久)

田代新左衞門尉殿

「右接目裏判」(花押)

「此文書、氏久公御譜中、写在田代縫殿清長トアリ」

69

ミつへのゐんなかのまた名内(満家院中俣)のすいてんしもしんかい七反并ゆの木のまろ三反、以上壹丁内、ほりのうちその一所、御ちきやうあるへきよし申さるへく候、あなかしく、

正平十五
二月十一日　　「四代助三郎忠国ノ法名」道忍(伊集院)(花押)

大隅守(「五代久氏」)殿

70

「氏久公御譜中」

「正文在清水衆瀬戸口弾兵衞」

大隅國桑西郷内鏡原參段事、由緒云〻、爲凶徒知行分者、於兵粮析所、領掌不可有相違也、若又有子細者、可有其沙汰之狀如件、

延文五年二月十八日　　修理亮氏久(花押)

目弥四郎入道殿

71

「在太平記三十三巻」

延文五年、宮方者先帝第六王子西征將軍宮爲大將、新田一族・菊池一類有欲寄太宰府之聞、是以將軍方六萬餘騎、以杜渡(ユツリノ)當前、構陣於味坂莊、宮方八千餘騎、高良山・柳坂・水縄山構陣於三ヶ所、八月十六日夜半、菊池撰夜討達者、使三百人入將軍方之陣、又以七千餘騎、押寄大手之陣、發凱歌放矢石、陣中騷動、不分敵味方、三百餘人爲同士討、已夜明數度合戰之後、宮方三千餘騎合一手、蜘手十文字敵中破入、小貳・松浦・草壁・山賀・嶋津上総入道、澁谷二萬餘騎、相別于左右、飛雨箭、因茲、宮方將退去、于時宮者得疵於三ヶ所給、殊以不淺、月卿雲客欲奉退宮、而蹈留、新田一族・菊池一類亦不惜身命、散々競戰、月卿雲客・新田一族若干遂戰死、小貳亦一族廿三人從軍共三千二百廿六人遂戰死、菊池之雖爲勝利、一千八百餘人戰死人、故小貳者引退于太宰府、菊池者歸陣于肥後國、其外敵味方共歸于領知之國々畢、

72

『入來院氏文書』

奉　寄進

薩摩國入來院楠本内坂口在家田畠之事

右、彼於在家田畠者、壽昌寺之方丈通法和尚、限永代所令進候也、若於有彼所違乱之輩者、重門跡ゟ不可知行、仍爲後日寄進之狀如件、

延文五年卯月十九日　　(渋谷)平重門(花押)

73

「氏久公御譜中」

「写有之」

應當御所御教書、既被參御方云々、此上者、兼公私成同心之思、可退治凶徒候、此段不可存吴儀候、且以神佛所爲證之狀如件、

延文五年『庚子』六月十三日　　「畠山修理亮」直顯在判

嶋津修理亮(氏久)殿

74

『肝属兼氏傳』

十五年庚子、北朝延文五年、公復歸　幕府、六月十三日及直顯盟、

75

「道鑑公御譜中」

延文五年、宮方　先帝第六王子　西征將軍宮爲大將、新田一族・菊池一類有欲寄大宰府之聞、由是　將軍方六萬餘

騎軍衆相要害、前杜渡(ユブリ)屯於味坂莊、宮方八千餘騎高良山・柳坂・水縄(ミナハ)山陣三ヶ所、八月十六日夜半、菊池撰夜討達者、使三百人入　將軍方陣、七千餘騎向大手陣、發鬨聲飛羽箭、由是陣中騒動、不分敵味方、三百餘人有同士討、漸夜明數度合戦之後、宮方三千餘騎合一手、蜘手十文字破味方軍中、小貳・松浦・草壁・山賀・島津上総入道、澁谷之二萬餘騎、相分左右、飛羽箭、因茲宮方兵將退去、于時宮者受傷於三ヶ所、殊以不淺、月卿雲客欲奉退而蹈留、由是新田・菊池之一族不惜身命、盡筋力挑戦、各若干遂戦死、小貳亦一族廿三人從兵共三千二百廿六人戦死矣、菊池之雖曰勝利、一千八百餘人戦死也、是以小貳引退于太宰府、菊池歸陣于肥後國、其外敵味方各歸領國領地者也、

76

『入來本田氏文書写都之城在本田某家』

下

薩摩國山門院内本田次郎左衛門入道兼阿跡給恩菓成河地頭代官職事

右、所宛行孫子本田金太郎也、任先例、致沙汰、可知行之狀如件、

延文五年八月廿二日　　道鑑(花押)

「此文書、道鑑公御譜中ニ在リ」

77

「師久公御譜中」

「正文在清敷本田傳蔵」「入来院石見重頼家臣也」

(本文書ハ「旧記雑録前編一」二五五三号文書ト同文ニツキ省略ス)

「右奥書」

兼阿自筆之間、爲後證所加判形也、

延文五年九月六日　　左衛門(師久)少尉(花押)

78

「藤野氏四十四通ノ一」

嶋津□(上総)入道〻鑒代頼兼申豊後國井田郷地□(頭)職事、訴狀如此、□(阿)蘇筑後守濫妨云〻、早止彼違乱、任御下文之旨、沙汰付道鑒代、可被執進請取、不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

延文五年十一月一日　　相模守(細川清氏)御判

大友刑部大輔(氏時)殿

「此文書、道鑑公御譜中ニ在リ、写有之ト記ス」

79

「氏久公御譜中」

「正文在祢寝右近重永」

税所凶徒与同事、現形候了、就其候者、身之大綱、今時分候之間、八幡大菩薩　稲荷大明神も御照覧候へ、万事憑存候、隨而本末固可申談所存候之間、如此申候、恐々謹言、

「康安元年」二月一日　　氏久（花押）

祢寢右馬助殿

「右之上包有之」祢寢右馬助殿　　氏久

80

「氏久公御譜中」

「正文在志布志大慈寺」

寄進

大慈寺

右、串良院内岩廣名半分事、奉寄之狀如件、

延文六年二月廿四日　　修理亮氏久（花押）

81

「師久公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼屋」

下　薦野太郎次郎宗泰

薩摩郡時吉名内水田參町（坪付有別紙）事

右、爲給分所宛行也、早任先例、可知行之狀如件、

延文六年五月廿八日　　師久（花押）

82

「日州御領大田原村新助蔵」

去廿四日、清瀧（城カ）德凶徒等、寄來曽井城之時、馳加彼城致合戰、親類若黨被疵之由、注進狀披見候、尤神妙、弥致忠節者、可被抽賞之狀如件、

延文六年六月廿九日　　刑部少輔（色範親）（花押）

土持八郎（時光）殿

83

「在文庫」

（端裏書）「御代々御文書之写　五之内」

嶋津上總入道々鑒代得貴謹言上

欲早被經急速御沙汰、被引合譜代相傳重書等案文被校正間事、

副進

一巻　譜代相傳文書等案

右、道鑒自右大將（頼朝）家以來、迄于今代々相傳文書等、九州御管領（斯波氏経）御下向之上者、正文等可持下之處、路次難儀之上者、被正校案文等、被封次目、被順（準）正文、於鎮西、爲被

經御沙汰、恐々言上如件、

康安元年六月　日

（統目裏判）
（花押）

84 『正文池端蔵』

大隅國佐多村庶子女子二人跡事、相傳知行、如関東六波羅御下文御施行以下、當知行所見状等加一見訖、不可有相違之状如件、

延文六年七月十一日　　修理亮（氏久）（花押）

祢寢次郎入道殿

「此文書、氏久公御譜中、正文在小根占衆池端諸右衛門トアリ」

85 「安養院文書」

寄進

諏方大明神　鹿児島

右、求二郷益丸名内田地四町（別紙付有坪）所奉寄進也、可被致祈禱精誠之状如件、

延文六年八月廿四日（辛丑）　　修理亮氏久（花押）

座主兵部律師御房

86 去三日合戰被致忠節之由事、同五日貞綱注進披見候、毎度軍忠神妙、弥可被致忠節之状如件、

延文六年十月九日　　刑部少輔（一色範親）判

土持八郎（時栄）殿

87 「氏久公御譜中」

自守護方者、窺謀於凶徒之間隙、發於軍勢致合戰也、爰畠山之執事有野本藤次秀安者、守帖佐萩峯城、守護方之軍兵圍之、又守護方有本田重親者、守溝邊城、畠山之軍圍之、兩所共及難儀、已及自殺之期、互相議爲和睦而相退也、

畠山治部大輔構要害於加治木土器園、所以警衛者堅矣、氏久窺得間隙、教勇鋭之士攻陥于夜中、而後治部大輔不定居處、坂上縱横奔走、以猥發兵、好戰者也、

88 『写在官庫』

『御賀本殿持下』

（本文書ハ三八号文書ト同文ニツキ省略ス）

89 『仝』

（本文書ハ三九号文書ト同文ニッキ省略ス）

90

『肝属兼氏譜中』

十六年辛丑（北朝康安元年）、二月二十四日、　公以岩廣（在串良院）、爲大慈寺領、亦寄郡也、初大姶良有四豪族、（詳見上兼経傳）、陰附　公室、由此　公拔大姶良城及末次城等、而　公親居大姶良城、遷山田諸三郎（後加賀守）忠經於末次城、本田信濃守重親於西俣城、令以事之、蓋當此時、新納修理亮實久亦居于松尾（在志布志地頭館西二町零）、爲之外援、蓋兼里以其妹（或姉未詳）、妻之、（生勇、乃悪四郎久顯）、而及弟久兼等聽命於　公、　公諱氏久、兼里改名兼氏、弟名久兼、蓋皆分諱字所以賜也、本宗適子、後世必取　公諱、配諸兼字、以爲名者、蓋于斯始乎、〇五月、菊池武光奉　鎭西宮、戰于日向不利、（公室文書）、六月、北帝遣左京太夫氏經、爲探題之鎭西、仝、

91

「道鑑公御譜中」

「寫有之」

嶋津上總入道〻鑒代得貴謹言上

欲早被直用捨御沙汰、就鎭西管領（斯波氏經）御下向、寺社本所領半成（済）可有御管領旨、被成御教書由、承及間事、

副進

一通　右大將家御下文案（文治三年九月九日　數通雖有之、依繁略之、）

二通　鎭西警固御教書案文（弘安九年三月卅日　正應六年三月廿一日）

右、道鑒曩祖豊後守忠久、去文治三年九月九日、以嶋津庄、日向大隅薩摩（号奥三ケ國）、拜領之条、右大將家御下文以下炳焉也、其後太宰筑（頼尚）後守先祖（号武藤小次郎資頼）、建久年中、筑前豊前肥前（号前三ケ國）、拜領之、大友刑部少輔貞親先祖齋院次官親能、建久年中、豊後肥後筑後（号後三ケ國）、拜領之云〻、如此無勝劣、自被宛行九州於三人以來、面〻守護職管領無相違之處、中比遷代一族爲鎭西管領下向之刻、各二ケ國充從關東被借召之時、三人無用捨之儀、就中日向大隅薩摩三ケ國者、爲嶋津庄内條、御下文明鏡也、然間、道鑒非（普）譜通守護職者哉、將又、一統之御時、太宰筑（貞経）後入道・大友（貞宗）近江入道并道鑒面〻、一ケ國充被返付候時、以同前、何於當御代、及用捨御沙汰、限于道鑒可失面目哉、爰太宰筑後守雖罷成御敵、參于御方時者、云本領、云新恩、令拜領之、隨而被任兩國、施面目者哉、次畠山礼部、自去觀應二年以來、迄文和四年依爲御敵、可誅伐之由、雖被成御教書、去延文元年以來參御方之由、就被申之、數ヶ所被拜領恩賞、并被任日向國守護職、到于道鑒者、自最初迄

于今、於御方致無二忠節上者、殊可被抽賞之處、如承及者、筑後守・大友刑部・畠山礼部三人分國之外、大隅薩摩筑後三ヶ國之寺社本所領半成、可有管領之由、被成御教書云々、此条如載先段、道鑑何依罪科、可及用捨御沙汰哉、曩祖忠久右大將家御代、自令拜領彼國々以來數代、云奉公之勞、云軍忠之段、異于他之處、結句及道鑑八旬、不餘命幾時分、失面目条、歎餘者哉、所詮、此等次第、達于奏聞、被直用捨御沙汰、施面目、弥以爲抽戰功之勇、仍粗言上如件、

康安元年四月十日 「原本ハ四十トアリ」 「御譜中此通リ也」 「康安元四十」

「本ノマヽ、」任此狀可令領掌之由、依仰下知如件、

文保二 廿三

「末ニアリ」于時寶德三年辛未正月廿三日 私(草案)早安ニ注之候也、

宥弁大法師

92 「道鑑公御譜中」

『案文有之』

（本文書ハ八三号文書ト同文ニツキ省略ス）

93 ちうしん れんねん（花押）

正八まんくう御領てうさの村々御くてんつほつけの事

せんほんむらくわはら田一丁作人七月廿一日 餅田殿用作由申之、

同しまめくり三反 ひものれう田廿一日同人用作云々、

すみよし一反 廿一日高城殿用作云々、

なかを五反 廿一日同人用作云々、

ふなつのむら一丁四反 七月廿日西時計ニ請取、

もちゐ田のむら三反 五反 餅田殿用作云々、

一くりのゝきたさを(と)一丁 丈六入道作人

右、且注文如件、

康安元年七月 日 本合

御供田外一なかつのゝむらの内きやうてんもたゐ五反

七月廿一日作人住吉殿百姓源三大夫

94 「寫在桃山源三郎久清」

武光以下凶徒退治事、一族相共ニ、自肥後國球麻郡、令發向菊池陣、可致忠節之狀如件、

『南朝正平十六年』『辛丑』康安元年十月十六日 『斯波氏経』左京太夫判

『資久』嶋津三郎右衛門尉殿

「此書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

95 『樺山氏蔵』

爲鎮西凶徒退治、可令發向也、致用意、相待下着、且彼船津來候者、悦入候、國中憑存候、恐〻謹言、

（康安元年）七月廿日　氏經（花押）『斯波左京太夫』

嶋津安藝守殿『資久』

「此文書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

96 「氏久公御譜中」

「正文在爾寝右近重永」

大祢寝院内永吉并郡本地頭得分事、爲兵粮析所〻預置也、任先例、可被致沙汰之狀如件、

延文六年十二月五日　修理亮（氏久）（花押）

祢寝郡司（久清）殿

（表紙）

貞久公
師久公　自貞治元年
氏久公　至應安五季

前編　舊記雜錄　巻二十七

97

「國史　道鑑公」

貞治元年壬寅、是年九月改元貞治、自八月以前猶是康安二年、南朝正平十七年、春三月二十五日、探題斯波氏經與大隅小四郎感狀、賞薩州池部城之戰功也、據伊作家譜、按伊作家譜、宗久子稱大隅宗四郎、別無大隅小四郎、疑即大隅宗四郎、大隅宗四郎見上康永二年、池部城合戰未詳、二階堂氏系譜、二階堂行仲築城田布施郷池邊村、名牟禮城、遺墟在地頭館北九町餘、夏六月、公上訴牒於幕府、請賜部内闕所且禁櫛無保侵掠、先是、日向・筑後・豊後等州有闕所、輙各賜本州守護人、獨薩隅二州闕所不復賜　公、至是又使探題斯波氏經領之、又中國大將細川右馬頭頼之侵掠櫛無保、　公是以訟之、據道鑑公舊譜、闕所依當時語、蓋謂郡邑闕領主者、秋七月十八日、　齡岳公命本田小太郎領西俣地頭半分代官事、據齡岳公舊譜、本田家総譜、二郎左衛門尉久兼、生勘解由左衛門忠恒、忠恒二男、長曰左近蔵人兼久、少曰小太郎為親、兼久見第七巻永和三年、後此十年矣、則是年云本田小太郎者、蓋為親云、久兼見上巻建武二年、二十一日、齡岳公使禰寢孫次郎領深川院北方半分、同上、小松氏系圖、此云孫次郎蓋久清、其説見前年十二月註、久清始稱孫次郎、後稱右馬助、末吉郷有深川村、九月二十三日改元、　據和事始、冬十月十七日幕府賜　公教書曰、細川頼之侵掠櫛無保、當加禁止、至於闕所及寺社邑領家邑事、請於探題可也、據道鑑公舊譜、賜若松孫太郎・薩摩郡司弥太郎感狀各一通、賞三月三日薩州宮里城之戰功也、據定山公舊譜、指宿與左衛門系圖、薩摩郡司支庶有若松氏、宮里城合戦及宮里城、遺墟不詳、有宮里村、詳見第一巻、隈之城郷建久元年、

二年癸卯、南朝正平十八年、夏四月十日、　公傳薩摩守護職於定山公、傳大隅守護職於　齡岳公、據定山公・齡岳公舊譜、秋七月三日、　公薨、年九十五、葬鹿児島五道院、據島津系圖、廟堂要覽、六男、長頼久、次宗久、次　定山公、次　齡岳公、次光□、次氏忠、　公娶大友因幡守親時之女、生宗久及　定山公　齡岳公、宗久早卒、故立　二公、　定山公生於正中二年乙丑、是歳年三十九、　齡岳公生於嘉暦三年戊辰、「四月十一日拠相馬氏古系図」是歳年三十六、頼久稱大夫判官、以母非正夫人、故不立、別為川上氏祖、光□稱四郎左衛門尉、延文中事征西將軍宮、無後、據島津系圖、氏忠稱但馬守、始居薩摩大口、後如莊内、依叔父安藝守資久、居石坂、因以為氏、據島津支

流系圖、道義公第七子、曰石坂九郎左衛門尉、與此別、都城安久村有地名石坂、

98 「伊作氏三代親忠譜中」

「正文在巻本」

今月六日御狀同七日到來、委細承候了、

抑三原滿兵衛入道被申候条々、委細令申御返事候、定可有披露候哉、猶々世上不審事者、此御使可被申候之間、省略候了、毎事期後信候、恐々謹言、

三月八日　沙弥道鑒（貞久）（花押）

謹上　大隅宗四郎殿（親忠ノ幼名宗四郎ト云）

99 「正文在文庫伊作家文書」「伊作家三代親忠譜中ニ正文有之トアリ」

『藤野本』

薩州池部城（田布施ノ内ニアリ）合戰之時、於御方被疵之由事、尤以神妙也、弥可致忠節、仍執達如件、

康安二年三月廿五日　左京太夫（斯波氏経）（花押）

大隅小四郎殿

100 『調所氏譜貞恒傳』

申請　正八幡御供稲米事

合參石定

右、件田者、來秋之時、加六利可弁申候、但質券ニハ、當山析田副柳壹町之内伍段於御前執當御房方所入置実也、若此内有違乱之時者、雖爲何析田、此内不劣田お可入置候、仍爲後日之狀如件、

康安貳年三月廿六日　書生在判

政所在判

101 貞治元年壬寅

四月十六日、否笠孫六政平（高江峯城にて戰死、）

102 「執印氏文書」

（花押）

當宮執印職事、中納言法眼坊補其職、所被下向也、存其旨、佛神事以下社家興行、守舊例、可抽忠節之由、依長吏仰、執達如件、

康安二年六月十五日　沙弥觀宗

少別當朝実

正八幡宮所司神官等中

「藤野氏文書」「道鑑公御譜中ニ在リ、案文有之トアリ」

進上　御奉行所

嶋津上總入道〻鑒謹言上

欲早被除畠山礼部(直顕)・大宰筑後守頼尚(今者出家)、大友刑部太輔氏時拜任國〻闕所并寺社本所領、於道鑒分國、被經用捨御沙汰條、失面目上者、且任先例、且依抽無二軍忠實、不可有□由、預御教書、次本領讃岐國櫛無保、中國大將細河典(頼之)□(既)、近年押領段被停止、全知行弥成軍忠勇間事、

副進

一通　右大將家(頼朝)御下文(文治三年九月九日　數通雖有之、依繁略也、)

二通　鎮西警固御教書案(弘安九年十二月卅日　正應六年三月廿一日)

一通　讃岐國櫛無保御下文　貞應二年九月七日

右、〻大將家御代文治三年九月九日、先祖豊後守忠久、日向大隅薩摩三ヶ國令拜領、其後建久年中、太宰筑後守頼尚之曩祖武藤小次郎資頼、筑前肥前豊前三ヶ國被宛行、大友刑部大輔氏時先祖豊前〻司能直、豊後肥後筑後三ヶ國同年給之、如此自被宛行九州於三人以來、守護職面〻管領無相違之處、中比(先)遷代一族鎮西管領下向之刻、各二ヶ國津〻被借召之時母、三人用捨之儀無之、就中日向大隅薩摩三ヶ國者、爲嶋津庄内國〻之條、御下文明鏡之間、名字之庄内國〻也、次一統時分、大宰筑後入道妙恵(貞経)・大友近江入道具簡(貞宗)并道鑒面〻、一ヶ國津〻被返付時母、以同前之處、於當御代爭及用捨御沙汰、可失面目哉、爰頼尚雖罷成御敵、依參御方、本領新恩悉令安堵、結句被任國訖、次畠山礼部、是又去觀應三年以來、迄于文和四年、就于被成御敵、可誅伐之由、度〻雖被成御教書、延文元年以來、爲御方之旨、依被申、數ヶ所恩賞并日向國守護職被任訖、而道鑒自最初、父子共於御方致忠節、今者及八旬之間、仰付愚息師久・氏久兩國事、抽不断合戰大功之處、於畠山礼部・頼尚・氏時等分國者、無相違被任之、至于道鑒守護職闕所以下、被經用捨御沙汰之條、余命不幾、及老後失面目之段、歎中愁訴也、凡以有忠輩被任國者、古今傍例、不可勝計、何況道鑒、云先例、云當御代忠、尤可有忠賞者哉、次讃岐國櫛無保地頭職者、曽祖父左衞門少尉藤原忠義(忠時)、「御譜ニハ忠戦ニ作ル誤カ」去貞應三年九月七日、爲勲(マヽ)功之賞令拜領、知行無相違之處、近年中國大將細河厩典(ママ)押領之條、歎(難嘆カ)勘次第也、如載先段、道鑒於御方數十ヶ度之軍功抜群之間、可預恩賞之由、令言上〻者、爭於本領可有違乱哉、就中九州合戰最中、抽軍忠時分也、然則彼

兩条、嚴蜜被經御沙汰、預御教書、弥爲致忠節、言上如件、

康安二年六月　日

104

「氏久公御譜中」

大姶良四ヶ村之長（大姶良・完目・浜田・横山）、歸意於氏久、是以率軍衆渡蒼海、先陷大姶良城、次陷末次城、此時於稱市場之地、有合戰之盡筋力散火光、迄後年亦謳歌之矣、大姶良・西俣・姶良共以入手裡、由茲定大姶良於氏久之居城、末次城使山田加賀守忠經爲城主、西俣畀本田信濃守重親、是又在近邊、毎日欲參候也、山田加賀守守末次城、而以近習之有要用故、使渠去末次移居大姶良也、

105

「見于本田重親傳」

一康安始、　氏久公陷大姶良爲居城、同二年壬寅七月十八日、攻取西俣城、以七十五町賜重親、

106

西俣村地頭分半分代官職事、（注文別紙有之、）任先例、可致沙汰之狀如件、

康安二年七月十八日　　氏久（花押）

本田小太郎（重親）殿

「此文書、氏久公御譜中ニ在リ、正文在本田作左衛門宣親トアリ」

107

「氏久公御譜中」

「正文在禰寝右近重永」

深河院内北方半分事、爲兵粮析所〻相計也、任先例、可被致沙汰之狀如件、

康安二年七月廿一日　　修理亮（氏久）（花押）

祢寝孫次郎（久清）殿

108

『冠嶽文書』

補任

薩摩郡内先達職事

右、於彼職者、充行所冠嶽榮永也、早任先例、可令補任狀如件、

康安貳年八月廿五日　　師久（上総介）（花押）

「師久公御譜中、正文在串木野頂峯院トアリ」

109

『入來院氏文書』

去年二月已來、薩州合戰致忠節之由、先立所注申也、尤神妙、向後弥可抽戰功之狀如件、

康安二年九月六日　　【足利義詮将軍】（花押）

澁谷九郎（重興）左衞門入道殿

110

「執印文書」

「八月三日狀九月五日到來、委細令披露候旱」

一執印間事、已下向上者、重不可及御沙汰候、下著候者、社家事等、可有其沙汰候、次康俊留守職事、旁依有不儀子細、被改之候旱、

一修理亮氏久押妨間事、如注進者、被驚思食候、但不可依其欤、社家以同心合力之儀、可被致嚴蜜沙汰候、

一延文以來神領押妨間、將軍家之御教書以下雖被下遣、尚以不承引、氏久弥令違乱候之条、言語道断次第候、所詮、重御教書事、急速可被申下候、

一神輿御動座事、適執印下向上者、諸事令談合、可有沙汰候、

一平山方和談事、於今無爲無事、目出候、相構令合力、可被致社家興行沙汰候、

右、以前条々、先度被仰下候之間、不及委細候也、仍執達如件、

康安二　十月八日　　沙弥觀宗（花押）

正八幡宮所司神官等中

111

請取　用途之事

合伍貫文者、

右、御供所任新取継分、且所請取如件、

應安二年十二月四日　　康俊（花押）

（張紙）「康安二年十二月廿九日伊佐郡ニ有リ」

（本文書編年ヲ誤レリ）

112

（花押）

正八幡宮領帖佐・加治木・吉田・栗野・小河院内散在御供田等事、御供所即令知行下地、宛行器用之百姓、令直納御供米、召仕公事定之處、去延文以後、彼郷院郡司名主等、寄事於左右、乍令押作下地、不弁濟御供米之間、式日有限□御節年々大略退轉云々、事実者、神慮尤難測、早以所下遣之坪付注文相尋之、所申無相違者、於下地者、□沙汰付于奉行人、至多年抑留之御供米者、任員數、嚴蜜責立之、可被全御供也、凡彼郡司名主等、神用米以下

濟物等年々對捍事、追可被經御沙汰之由、依　長吏仰、
執達如件、
應安三年三月十一日　　法眼朝実
謹上　留守左衞門入道殿

（本文書編年ヲ誤レリ）

113
「師久公御譜中」
「正文有之」
去三月三日、薩州宮里城合戰之時、抽軍忠之旨、嶋津大（師久）夫判官所注進也、尤以神妙、弥廻籌策、可致戰功之狀如件、
貞治元年十月十七日　　（義詮）（花押）
若松孫（忠貞）太郎殿

114
「正文有之」
去三月三日、薩州宮里城合戰之時、抽軍忠之由、嶋津大（師久）夫判官所注進也、尤以神妙、弥廻籌策、可致戰功之狀如件、
貞治元年十月十七日　　（義詮）（花押）
薩摩郡司弥太郎殿

115
「道鑑公御譜中」
「写有之」
「藤野氏四十四通ノ一」
嶋津上總入道々鑒申大隅薩摩兩國寺社本所領半濟并闕所事、氏時・賴尚等分國共以被任用旱、右大將家以降、就九州事、兩人并道鑒之曩祖、每事及一准御沙汰之處、始中終軍忠之道鑒漏彼烈（列）之条、失面目之由、所歎申也、雖非無子細、鎭西下向之時、被除氏時等分國并日向國、所残之四ヶ國及二嶋分、可被預置軍勢之旨、被下事書旱、道鑒分國爲隨一之間、難及京都之沙汰、許否之段、依時宜可有計沙汰之狀如件、
貞治元年十月十七日　　（義詮）御判
左京大夫（斯波氏経）殿

116
「道鑑公御譜中」
「写有之」
「朱カキ」「上書ニ」「御教書案」
分國闕所以下訴訟事、尤有其謂之間、欲有沙汰之處、左京大夫（斯波氏経）鎭西下向之時、被任四ヶ國隨一也、仍於京都難落居之間、可有計沙汰由、所成御教書也、定不可有子細歟、

次櫛無保事、急速可仰付讃岐國守護也、老後之忠功殊所感思也、弥廻籌策、可勵九州靜謐之狀如件、

貞治元年十月十七日　　御判（義詮）

嶋津上（貞久）總入道殿

117

「全四十三通ノ一」

（本文書ハ一一三号文書ト同文ニツキ省略ス）

118

「全四十三通ノ一」

（本文書ハ一一四号文書ト同文ニツキ省略ス）

119

『藤野本四十三通ノ一』

嶋津上總入道ゝ鑒申候讃岐國櫛無保地頭職事、道鑒於鎭西近日殊抽軍忠之處、譜代舊領違乱出來之由、所歎申也、不便事候欤、無相違之様可令計沙汰哉、以下（恐ゝ）、

十一月二日　　御在判『義詮』

細河右馬頭（頼之）殿

120

『長谷場文書』

弥六氏純

氏久（花押）

康安二年十二月一日

「氏久公御譜中、正文在長谷場兵右衞門純正トアリ」

121

「道鑑公御譜中」

「正文有之」

畏申上候、抑嶋津上總（師久）介申、依自訴之事、京都御吹擧事被申候、無子細御申御沙汰候者、畏入候、此間度ゝ吹擧事、雖被申候、代官之間者、不可叶之由、先立堅蒙仰候之間、斟酌仕候之處、子息之事者、自身同事候之間、不可有子細之由、依蒙仰候、申上候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

十二月廿五日　　宮内大輔三雄（今川）（花押）

進上　周防右京亮殿

「此文書年間ナシ、御譜中貞治元年十月十七日ノ次ニ載タリ」

122

「指宿文書」

ゆつりわたす大隅國多祢の嶋事、成榮おんしやうとしてはいりやうの条、せい〳〵ミやのしやうくんの令旨明白なり、しかるを嫡子たる間、忠勝にはんふんおハゆつり

あたへおハぬ、のこるはんふんにおきてハ、左京の亮忠元、掃部助忠平二人して、ちきやうすへし、けりやう四分一なり、おなしなからかの嶋ハ、代〻ゆいそのちたる間、申給ハる所なり、子〻孫〻いたるまて、ちきやうさふいあるへからす、但かの所おハ、三人よりあひてわかちて、ちきやうすへきなり、仍後日讓狀如件、

正平十八年二月十七日　　沙弥成榮（指宿忠篤）判

123

「指宿系圖左ノ如シ」

- 忠連
  - 郡司又次郎
  - 忠篤　指宿郡司
    - 彦次郎入道『成榮』
    - 忠泰　次郎　討死
    - 忠勝　能登守
    - 忠元　左京亮
    - 忠平　掃部介

124

『入來院氏文書』

參御方、相語一族、至軍忠者、於本領可有子細、（致）（不脱カ）至忠節者、恩賞之事者、不可有子細也、天氣如此、悉之、以狀、

正平十九年二月一日　　左中將（西園寺実秀）（花押）

『重門』

澁谷能登守館

125

「正文志布志大慈寺」

寄進

大慈寺

右、串良院内岩廣名半分事、奉寄之狀如件、

『当貞治二年癸卯、南朝ニテハ正平十八年』

延文八年二月廿四日　　修理亮氏久（花押）

126

「道鑑公御譜中」

「写有之」

『藤野氏四十四通ノ一』

所領注文事

薩摩國守護職　筑前國今田村薩摩役所

同國鹿児島郡地頭職　同永吉村　女子一期分

同國薩摩郡地頭職

同國山門院

同國河邊郡　同十八嶋
同國市來院
大隅國守護職并守護領
薩摩國指宿郡 大隅守護領
肥前國倉上庄 同守護領
筑前國今津村 同守護領
大隅國本庄内
多祢嶋
財部院
深河院
筒羽野村
同國寄郡内
下大隅郡
鹿屋院
串良院
横河院
大祢寢院 女子一期分
百引村
曽小河村
小原別符
姶良西俣村 女子一期分
豊前國内
副田庄
皆木村 女子一期分
土師庄
豊後國内
井田郷
讃岐國内
櫛無保上下　同公文名　女子一期分　同光成名
河内國内
西嶋村
信濃國内
太田庄内石村南郷
下總國相馬郡内
下黒崎村　同發戸村　同上黒崎村　符河村
押手村　同甲斐御房村　同古志木村
日向國内
高知尾庄
「御譜中ニ朱カキ」
「貞治二年四月上旬」

『藤野氏文書』「自是ロ欠缺、継目裏判ノ残有之」

一大隅薩摩兩國奉行事　『忠久公』建久八年十二月三日
一嶋津庄内薩摩方補任事　『仝』建暦三年七月十日
□(二)越前國薩摩國安堵御下文　『忠義公(嘉)』加錄三年十月十日
□□(二)御教書　『忠義公承久三』五月十九日　『四五ノ巻ニアルトソ』
一武藏守殿(泰時)かんなかきの御書　『忠義公』承久三七月十二日　『四ノ巻ニアルトソ』
一同(二枚)かんなかきの御書　『同』七月十二日　『宛カキハ忠久公』
一同御書　『仝』七月十五日　『宛(同前ニ)』
□同(二)御書(二枚)　『忠時公ニ』閏六月廿九日　『文暦二年ならん』
一二位殿御書　『忠義公』十一月十三日　『貞応元年ならん』
一右大將家かんなかきの御自筆書(二枚)　『忠久公』八月十五日　『文治五年宛カキ庄司次郎也』
一同御自筆御書(三枚)　『忠久公』八月廿日　『同年』『戌時』
□皇山殿自筆狀(二)(重忠)　『仝』正月十三日　『元久二年十三日トアル此ナラン』
一越前國守護職　『忠久公』承久三年七月十二日
一同御施行　『仝』貞應元年十月十二日
一越前國生部庄御下文　『忠義公』承久三年八月廿五日
一伊賀國長田郷地頭職　『仝』承久三年閏十月十五日
一近江國興福庄(寺脱カ)地頭職　『仝』貞應二年六月六日
一伊賀國長田庄事　『仝』貞應二年八月六日
一伊賀國長田庄地頭職事　『仝』貞應二年十二月八日

一異賊警固事
一高知尾以下御下文　『忠宗公』文保元年十二月廿一日
一周防國簗井庄御下文　『貞久公』正慶元年十二月一日　『元弘二年也』
一長田庄安堵事　『久時公』文永八年十二月廿四日
一麿嶋郡安堵御下文　『忠宗公』永仁六年十月廿三日
一道佛(忠時)御置文之御下知　『久時公』文永八年十二月廿四日
一市來院井田郷綸旨　『貞久公』建武元年二月廿一日
一同御施行　『仝』暦應四年閏四月二日　『仝』暦應元年十二月廿七日　二通内一通案文
一日向國守護職綸旨　『仝』元弘三年八月十五日
一大隅國守護職　『仝』建武二年十一月十七日
一正八幡宮神輿事　『忠宗公』正應六年二月七日
一同神輿事　『仝』正應六年四月五日
一造正八幡宮事　『忠宗公』延慶二年二月十日
一御教書(将軍家船上)　『貞久公』元弘三年六月廿九日
一將軍家御返事(『高氏』)　『仝』元弘三六月十日
一御教書(将軍家)　是ハ不入候之間、遣之候、(花押)
一下總國古敷國衙(三郎殿御分)御下文　『師久公カ』觀應元年十月廿一日
一道義(忠宗)御置文
一三通道義御讓狀内二通者有外題、　文保二年三月十五日

『忠宗公』『九誤欠』弘安元年十二月卅日　『忠宗公』正應六年三月廿一日

128

一關東御教書谷山所務事　『忠宗公』永仁二年三月四日
一故判官殿大藏郷御下文（三郎殿御分『宗久』）　『貞久公』建武五年正月廿四日
一大隅寄郡御下文　『仝』觀應二年八月十五日（御しきやう）　文和元十月十三日
一嶋津下野守跡御下文（三郎殿御分『忠氏』）　『師久公』觀應二年十一月二日（御しきやう）　文和元十一廿一
一河邊郡本庄御下文　『貞久公』建武三年二月十七日（『三カ』）
一同御施行　『仝』貞和二年十一月六日
一官符宣　『仝』建武二年十月七日
一道鑒（貞久）御讓狀御外題有之、
右、目六如件、

「朱カキ」「継目裏判」（花押）

「此文書、道鑒公御譜中ニアリ」

「師久公御譜中」

「写在五之巻」

讓与　師久分

薩摩國守護職
同國薩摩郡地頭職
同國山門院　但於三ヶ村并脇本村者、松浦女房一期之後可知行、
同青木原村者、大輔局一期之後可知行、

讃岐國櫛無保上下村
同公文名并光成名
同田所名
薩摩國河邊郡
同拾貳嶋此外五嶋
同國和泉庄名主職
同國串木野村
同國宮里郷（ママ）參壹地頭職
豊後國井田郷
豊前國副田庄
筑前國今田村（ママ）　薩摩役所
河内國西嶋村地頭職
信濃國大田庄大藏郷地頭職
同國石村南郷地頭職
下總國相馬郡内
下黒崎村　符河村　押手村
發戸村　甲斐御房　古志木村
右、相副代々御下文以下證文、所讓与也、於讓漏地者、
惣領師久可知行之狀如件、
貞治貳年卯月十日　道鑒（貞久）

「継目裏判」(師久)　(花押)　「同」(氏久)　(花押)

129

「氏久公御譜中」

「正文有之」

譲与　氏久分

大隅國守護職付守護領

薩摩國指宿郡

肥前國倉上庄

筑前國今津村

同國本庄内多祢嶋

岩河村南北　但於南方者、女子祖鑒房一期之後可知行、

同國寄郡内

大祢寢院　深河院　鹿野院

下大隅郡　串良院　筒羽野村

曽小河村

薩摩國鹿児島郡地頭職但除永吉村、

日向國高知尾庄

右所々者、限永代所譲与也、有限於御公事者、守惣領師久支配、任先例、可令勤仕之狀如件、

『南朝正平十八年』『癸卯』

貞治貳年卯月十日　道鑒

「右接目裏判」　「師久」(花押)　「氏久」(花押)

130

「載氏久公御舎弟但馬守氏忠御譜中」

譲与　乙壽丸分

薩摩國鹿児島郡内永吉村

大隅國寄郡内百引村

筑前國三奈木村地頭職

右所々者、限永代所譲与也、於有限御公事者、守惣領師久支配、任先例、可令勤仕之狀如件、

『癸卯』

貞治二年卯月十日　道鑒

「右接目裏判」　「師久」(花押)　「氏久」(花押)

「此前後卯月十日ノ正文ハ、旧御番所二番箱中御譲狀置文一巻中ニ在リ」

131

「在氏久公御譜中禰々傳」

「正文有之」

譲与　祢々女子分「氏久公御妹禰々御事」

薩摩國鹿児嶋郡内中村・郡本兩村郡司職事

右所者、一期之後者、氏久可知行狀如件、

貞治貳年卯月十日　道鑒

「右接目裏判」
「師久」(花押)　　「同」
「氏久」(花押)

132

(本文書ハ一二九号文書ト同文ニツキ省略ス)

133

「執印氏文書」

(花押)

執印下向之間、則可被入部之處、康俊致敵對于本所、及異儀之条、甚以狼籍也、早相催諸座神人等、不日康俊以下輩令追放神境、執印入部、任先例、可致其沙汰之由、嚴蜜被仰下候也、仍執達如件、

貞治二年四月廿日　　沙弥觀宗
　　法橋朝実

正八幡宮所司神官等中

134

(花押)

執印下向之處、康俊敵對于本所、依現不忠、入部遲々之處、抽忠節之由、被聞食之条、殊被感思食候之由、所被仰下也、仍執達如件、

四月廿二日　　沙弥觀宗
　　法橋朝実

正八幡宮權執印法橋御房

135

「道鑑公御譜中」

「正文有之」

『藤野氏本四十三通ノ一』

大隅國本庄内岩河村南方御讓狀一通、慥給候旱、仍請取之狀如件、

貞治二年卯月廿五日　　祖鑒(花押)

136

「仝」

『仝四十三通ノ一』

薩摩國麑嶋郡内中村・郡本兩村御讓狀、慥給候了、仍請取狀如件、

貞治二年卯月廿五日　　あね〻(花押)

「此二通、旧御番所御文書二番箱中、御讓置文一巻中ニ在リ」

137

「新田宮観樹院文書」

「一師久訴陳申狀」

豊後合戰并薩州同乱事、度々注進言上仕候處、依路次往覆難成、不令參着候条、恐歎不少候、抑爲豊州御合力、去々年九月廿六日懸合發向候處、於中途當國凶徒和泉諸太郎兵衞尉政保、同一揆牛屎近監高元、同一揆隅馬越藤四郎行家、同一揆肥州葦北七浦賊徒等依差塞通路候、對彼輩致合戰候處、及親類若黨并澁谷一族數十人討死手負云々、其間子細管領御方言上仕候畢、定御注進候哉、雖然重而可令發向候處、地頭御家人等更ニ催促國凶徒乞餘テ過半蜂起候間、難閣候上、政保并一揆等ノ城彼合戰以後自去々年于今在陳防戰間、御合力ノ事不遂其節之条、且ハ可有御高察候哉、且ハ分國難儀之段、管領之御使長刑部尉見知、次舍弟氏久於隅州、自去々年。于今、向合敵陣致合戰候、巨細段々定而注進仕候哉、次豊州合戰之事、大内介弘世就渡海、菊地肥後守武光退散之間、御方大慶此境候處、無幾程弘世依歸國、鎭西。及難儀、管領周防國分御開之間、則進飛脚候畢、隨テハ御上洛之由預御返事候、驚存候、急速九州對治被御沙汰被差討畢。所仰候、次雖無勢候、兄弟相供踏兩國、連日」致合戰候条、被下廉直之御使、預御挨言可然候、國之軍勢等可應師久催促之旨、被成下御教書、廻凶徒對籌策候、此旨可有披露候、恐惶謹言、

貞治二年五月二日　　左衞門尉師久在判

探題判官殿

（本文書「　」部分ハ「山田聖栄自記」ニヨリ補イ、傍注（　）ハ「玉里本」ニヨリ補足ス）

138

『廣濟寺文書』

奉寄進

薩摩國滿家院小山田中俣内水田伍町并薗九箇所加之、限永代、於圓勝寺所奉寄進也、仍状如件、

貞治貳年五月六日　　熙久（花押）

沙弥道應（花押）

沙弥觀了（花押）

沙弥道忍（花押）

圓勝寺都寺御寮

「此文書、伊集院長門守忠國法名道忍之譜中ニ在リ」

139

『入來院氏文書』

薩摩國入來院中村之内永野・世与牟礼兩村事、自定円被

讓与候事承候早、隨而至子〻孫〻、無他妨可有知行候、
仍爲後日狀之(ママ)如件、
貞治貳年五月八日　　左衞門(淺谷)尉重門（花押）

140

「御譜中」

元久

又三郎　陸奥守

貞治二年癸卯五月二十日、見于仲翁祭文、誕生於大姶良、御母伊集院長門守忠國女也、

志布志者、雖爲亡父　氏久以降之所居、欲去是移麑島、然則東福寺城雖曰佳例、宅地隘狹、又城脇築地之宅亦偏地、是以更占宅地於清水、且限實方之川、爲土石勞構城郭、則東南有川流、有嶮涯、西北亦深谷也、何地如之乎、一族老臣等共以議定矣、既終土木之功、則携妻子、自志布志移麑島矣、貴賤上下祝萬々歳、庶民歌市村野、無如此時也、

141

「御譜中」

貞治二年癸卯七月三日卒、年九十五、法名道鑑、號道阿彌陀佛、淨光明寺殿、康安元年代官得貴有訴狀之寫、道鑑及八旬云々、然者誕生之年月有相違乎、又觀應二年七月三日卒、年八十三、如此雖有之、貞治二年卯月十日男女妻妾有所畀之讓狀數通、以之觀焉、貞治二年四月已後逝去、非所疑矣、可有再考、

142

「國分宮内澤氏文書」

貞治二年十一月十五日

岩河村三分二五十町御供米工事析引役事

合

御供米三十石工事析十三貫　十一十五請取下了

十石工事析七貫　并十一十八

二石伍斗工事析三百五十　十一廿一

三石工事析八百　十一廿一

十二石工事析九貫三百　十二三

一石五斗工事析二百五十　十一廿一

四斗百五十(工事析脱カ)　十二廿三

八斗工事析三百　十二廿二

五石六斗工事析五貫　十二廿四

一石三斗工事析二百五十　十二廿四

四石二斗工事析三貫五十　十二廿七

四石七百(工事析脱カ)　十二廿七

同三年正月八日ニ

三石七斗工事析一貫百　正八

二石一斗五百五十（工事析脱カ）　正八

四斗百五十（工事析脱カ）　正八

二石伍斗工事析四百五十　正十一

別納分

一石一斗工事析五百岩屋谷　正十一

四斗并工事析二百　正十一　仟山

正八幡宮御供所検校法橋大和尚位永賢（花押）

143

「島津國史」

齡岳公（名氏久、道鑑公第三子也、稱又三郎、改三郎左衛門、歴修理亮及越後守、任陸奥守、法名齡岳玄久、即心院殿、子孫稱奥州家、）

貞治三年甲辰、（南朝正平十九年、）春二月朔日、左中將奉

後村上帝綸旨、命澁谷能登守重門、率其族人歸南朝、（入據來院主馬家蔵文書、左中將無名、據是年九月十四日宣旨、稱蔵人頭左近衛權中將藤原朝臣實秀奉、疑即實秀、澁谷重門者、入來院定心五世孫、定心見第三卷弘安四年注、）

秋九月十四日、藏人頭左近衛權中將藤原朝臣實秀奉

後村上帝宣旨、以左衛門少尉（大隅宗四郎、改稱左衛門少尉、）藤原親忠、爲

下野守、因遺親忠書曰、歸順納欵、已達聖聰、若有殊

功宜加封賞、（據伊作家譜、）

144

『野田感應寺文書』

眞如寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

貞治三年五月十五日　源朝臣義滿（詮カ）判

祖通西堂

145

御供所奉行事、度々雖被上表申候、私難計候、此趣本所

可注進候、彼御左右之間、自今年八月朔日、迄明年七月

十七日之御供米當納之分、有結解、可被奉備候、仍執達

如件、

「貞治三」七月十七日　康賀（花押）

權執印法橋御房

146

「正文在樺山源三郎久清」

讓与　夫太郎（『音久』）丸分

右、日向國北郷參分壹、限永代所讓与也、但有限於公方

御公事者、守惣領宮次郎丸支配、任先例、令勤仕、可知

行之狀如件、

貞治參年七月廿五日　「但北郷ノ元祖七郎左衛門尉資忠、法名道明也」道明（花押）

承候了（『氏久公』）（花押）

「此書、樺山家二代音久譜中ニ在リ」（「此レハ北郷資忠二男也」）

147

『伊作親忠譜中』「正文在文庫三番箱」

（端裏書）「口　宣案」

上卿　権中納言

正平十九年九月十四日　宣旨

左衛門少尉藤原親忠

宜任下野守、

藏人頭左近衛權中將藤原朝臣實秀奉

148

『仝』「正文在文庫」「伊作家親忠譜中　綸旨トアリ」

可參御方之由、被聞食旱、有殊功者、可被抽賞者、

天氣如此、悉之、以狀、

正平十九年九月十四日　左中將（西園寺実秀）（花押）

嶋津伊作下野守（親忠）館

「上書」

嶋津伊作下野守館　左中將（花押）

149

「伊作親忠譜中」

「正文在巻本」

（端裏切封）

御名字事、聊有憚事候間、親忠と被仰候、同事候欤、

可得御意候也、

去五月十九日御狀、八月六日到來、喜承候了、多年奉及候之間、可申之旨、乍思給候、遠國之境、便風不容易、仍乍存送年月候之處、態御音信、尤本望候、就中當方御參事、殊以目出候、　綸旨并御官途事、其境事者、宮將軍（懐良親王）御注進之時、每時御沙汰候、無左右難及御沙汰候、但内々申沙汰、　綸旨并御官途事無相違候、目出候、相構面目候之樣、可被擧御旗候哉、

一御本領事者、已綸旨文章ニ、有殊功者、可被抽賞之由、被載之上者、大方者不可有子細候欤、先大方御安堵綸旨無相違候上者、重可被申候之由、其沙汰候、又自餘御一族官途事も、追可被申候、石堂邊へも被仰候之間、公方へ申候、彼是傍例難義候へとも　勅許候、返々目出候、雖向後、重可奉候也、

一鎮西宮將軍仁可被申狀事、奉候了、坊門と申候仁、當時兵衛督と申候、當家一門候之間、彼方へ進狀候、被遣御雜掌、委細可被仰候也、彼仁一方申沙汰事候、委事以賴方（安藤）令申候、

一此御使令對面、委細其境事奉候、又所存分、大概申含候き、可尋聞給候、御進退事者、依國躰、定可落居候欤、

一竹侍者、此邊ニ細〻相看申候、委事者、定其邊よりも可被申候哉、

一弓三張（こふし）白木一帳、巻二帳、革十枚（牧）白革五、染革五、慥給候了、殊更弓、此境にハ難得物候、令秘藏候、如此色〻送給候条、芳志之至喜入候、悉以自愛候、其子細申含御使候了、又輕微之至雖其憚候、邊土之式不甲斐候、折節所在分扇十本進之候、下品之至比興候、於今者細〻以便宜可奉候、賴方（安藤）下向、全分不弁東西之物候、未練之至、雖心苦候、以舊好參申候欤、且又其境事、能〻爲奉定進之候、年内相構令歸參候之樣、可被仰含候、千萬難盡狀候之間、省略候、恐〻謹言、

「朱カキ」「正平十九」九月十五日　顯方（藤原）（花押）

伊作下野守（親忠）殿御返事

150

『藤野氏四十三通ノ一』

被成下牛屎一族御書事、先規無其例候之處、今始迚御沙汰、失面目候、其子細面拜之時、委申候了、可預御披露候、恐〻謹言、

十一月廿二日　沙弥道鑒（貞久）

『貞治二年御逝去カ』

謹上　廣澤藤三郎殿

151

『調所氏文書』

依有要用、本物返入置臺明寺三昧田五段事、右、件田者、米壹石七斗代、御前執當御房方入置事実也、雖爲何ヶ年、不返本物程者、可有御耕作候、仍爲後日之狀如件、

貞治四年三月八日　書生在判

政所在判

152

『池端氏文書』

御はかに御きしんの水田ならひに、いのしり四つゑにをいてハ、覺阿のいかやうにも御はからい候はんするを、いさゝかするゑ〳〵までもいらんわつらい申ましく候、仍狀如件、

貞治四年七月十三日　氏純（長谷場）（花押）

久武（長谷場）（花押）

「右文書、長谷場氏ニ保存セリ」

（本文書、所在「池端氏文書」トアルハ誤リナルベシ）

153

「島津國史　齡岳公」

四年乙巳、南朝正平二十年、秋閏九月十七日、武藏守遣澁谷彈正少

弼能登守改稱、彈正少弼、重門書、使討鎮西凶徒、據入來院主馬家蔵文書、此書止稱武蔵守無名、有渋川義行花押、書皮書曰武蔵守義行、諸家大系圖、足利氏宗人渋川中務大輔直頼子、曰武蔵守義行、即此人也、花押藪云、源義行従五位下武蔵守右衛門佐、貞治・應永間人、

154

『入來院氏文書』

爲鎮西凶徒退治、所發向也、於御方致忠節云々、弥被抽戰功者、可注申之状如件、

貞治四年潤九月十七日　　武蔵守（渋川義行）（花押）

澁谷彈正少弼殿（重門）

「包紙」澁谷彈正少弼殿　　武蔵守義行

155

「正文在樺山源三郎久清」

『樺山氏文書』

「上書ニ「朱カキ」「樺山殿分」

北郷北方相分壹方事

合

一本名宮丸名内

善阿乍六町三反　右馬允壹町六反

怒久水田八段　除得益給定

以上八町七反　（花押）（氏久）裏ニ判アリ、上ヨリハ左字也」

一御一向

財丸貳町三反十　南原大夫次郎跡二反卅

別當丸南方貳反十　友重卅

宗近四反　留下跡五反卩

池原貳町五反卅

以上六町四反廿卩

都合拾五町壹反廿卩

一請分　小牟礼五百文　坂下三百文

薗壹ヶ所倉原

右、太概如件、

貞治四年壬九月廿六日

「此書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

156

「執印氏文書」

（花押）

當宮御供所職事、前權執印永賢、乍被管領、于今任料無沙汰云々、然者早嚴蜜加催促、任先規、如員數急速可令執進給之由、所被仰下也、仍執達如件、

貞治五年正月廿六日　　大和守尚直（花押）

法橋朝実（花押）

謹上　正宮留守左衛門入道殿

157

『志布志寶滿寺文書古写』

寶滿寺之領臼河原上下事□□□任守時之例、向後不可有□□違之狀如件、

貞治五年二月十八日　　修理亮氏□(久)

寶滿寺長老

「此文書、氏久公御譜中ニ在リ」

158

『仝』

轉讀大般若經等、修〻祈禱巻數給候了、悦入候、恐〻謹言、

【年号未考】七月十一日　　相模守(守時)(花押)

寶滿寺長老御返事

159

「正文在文庫」「此御書伊久譜中ニ在リ」

嫡子伊久分

一薩摩國守護職

一下總國所〻本知行分但除伯父下野入道跡

一信濃國南郷

一讃岐國櫛無保

一山門院西方

一薩摩郡地頭職

一宮里郷三分一地頭職

次男小法師分

一伯父下野入道跡

一信濃國大藏郷

一筑前國(豊カ)制田(副カ)村

一薩摩國河邊郡

女子尼分

一水田伍町・薗貳ヶ所一期分山門院糟渡之内、

後家鶴田女房分

一山門院西方惣領門六内山下門二・同院内市來崎次郎太郎入道跡・同彦五郎跡并多田入道跡田薗焉、

一山門院内當知行分給分矣、

一薩摩郡光冨名内鳥取入道代官分・同前寒水田薗・同人代官分、何毛後家一期之後者、可惣領知行也焉、

貞治五年三月五日　　【統目裏有之】(花押)

（島津家文書「師久公一流」ニハ貞治六年トアリ）

160

「島津國史　久哲公　齡岳公」

五年丙午、南朝正平二十一年、春三月五日、　定山公傳薩摩守護職於長子久哲公、　定山公二子、長爲　久哲公、少久安、　久哲公生於貞和三年丁亥、母氏不詳、是歳年二十襲封、久安稱三郎左衞門尉、爲碇山氏祖、據久哲公舊譜、久哲公受薩摩守護職於定山公、與齡岳公分國而治、猶定山公也、前史氏書曰上総介某、恐非、　齡岳公遣七將討菊池武光、夏四月十六日、大戰于肥後日之岡、種子島對馬守賴時死、七將之一也、據種子島藏人系圖、系圖、種子島氏出於平相國清盛、傳至肥後守信基、信基幼孤、北條遠江守時政養爲己子、賜之種子島、因以爲氏、亦稱肥後氏、賴時、信基之六世孫也、六將名闕、　阿多郡觀音寺白河村及知覧院皆爲闕所、未係官地、秋八月二十三日、　定山公使二階堂隱岐守直行權領觀音寺・白河村、使二階堂近江前司權領知覧院名主職、據定山公舊譜、二階堂氏家譜、建武四年十月十五日僧俊忠讓状、有阿多郡觀音寺領事、然阿多郡今無觀音寺、寺社記、亦不載其名、蓋廢已久矣、郡村高辻帳、阿多郡阿多郷有白川村、　直行、行仲之子也、據二階堂氏系圖、

161

貞治五年丙午

四月十六日、種子嶋對馬守賴時　齡岳公に従ひ、菊池武光と肥後の日の岡に戦て死す、

已下二人皆賴時の家臣なり、羽嶋久成申状を按するに、肥州日岡の御陣は、應安八年四月八日なりとあり、註して備考なり、上妻九郎左衞門家信・下野小藤太秀遠、

162

「師久公御譜中」

「正文在田布施士二階堂三左衞門定行」

阿多郡内觀音寺并白河村事、爲闕所之間、公方御計之程、所預申候、任先例、可被知行之狀如件、

貞治五年八月廿三日　　師久（花押）

二階堂隱岐守（直行）殿

163

「正文在二階堂城介信行」

智覧院名主職事、右爲闕所之間、公方御計之程、所預申候也、任先例、可被知行之狀如件、

貞治五年八月廿三日　　師久（花押）

二階堂近江前司（直藤）殿

164

「在皇德寺」

雲板銘

立幅二尺一寸計

165

『頂峯院文書』

薩州谷山郡永谷山常住

正平廿一丙午沽洗望日　　大工淨法

一町、數余木一町、以上貳町、爲此之堺之合戰之祈禱、
奉寄進冠嶽權現也、其外於山中可被止地頭之妨、宜可被
存知此之旨之狀如件、
正平廿一年九月二日　『入來院氏』彈正少弼重門（花押）
冠嶽院主御房

166
「重富船津村森永百姓仲太郎藏」
造替　持國天王
右、誠志者、擬欲（欲擬）嶋津修理亮藤原朝臣氏久之眞影、然則
董修生〻件種善因之結緣、世〻志求家門昌榮之嘉運者之（也カ）、
『当南朝正平廿一年』丙午十一月　大隅國守護藤原朝臣氏久判
貞治五禩

167
『入來院氏文書』
（端裏書）「置文」
定
依合戰忠節析所可沙汰条〻事
一其忠有抽出事者、可有常一倍之沙汰也、
一討死跡事、有子息者、本知行之上、重析所出來之時、
可有其沙汰也、次於女子者、本知行半分事、一後之間（期）、
不可有子細之也、次於後家者、可爲女子同篇之沙汰、
但別男被相具者、不可有知行之也、
一其跡無子孫者、田地一反永代可有寄進寺家也、
右、此之趣、至子〻孫〻、於背此之旨之輩者、不可有重
門之子孫（マゴ）之也、仍爲後日所定置如件、
正平廿二年正月廿九日　（渋谷）重門（花押）

168
『入來院氏文書』
致軍忠之由、被聞食了、尤以神妙者、
天氣如此、悉之、以狀、
正平廿二年二月十日　右衞門權佐（花押）
澁谷彈正小弼（重門）（少）館
『包紙』澁谷彈正小弼館　右衞門權佐（花押）

169
「載山田久興譜」
讓渡　嫡子　とらわう丸所
薩摩國谷山郡内山田・上別府兩村事
右所領者、重代相傳地也、亡父道慶讓狀并関東御下知以
下證文等をあひそへて、とらわう丸ニ讓渡ところ也、と
らわう丸男子なくハ、わう犬丸ニゆつりあたへらるへき
也、仍爲後日、以自筆かきをくゆつり狀如件、

貞治六年二月十八日　　（山田）忠經（花押）

170

「右ノ文書考」「山田氏系図」

六代久興

虎王丸　四郎　右京亮　出羽守　入道名玄威

延文四年己亥九月廿六日巳時、誕生于鹿児島宮地也、

171

「氏久公御譜中」

「正文在比志島左京義時」

（本文書ハ一一号文書ト同文ニツキ省略ス）

172

「島津國史　齡岳公」

六年丁未、南朝正平二十二年、夏六月十七日、　齡岳公以下大隅之田一町、爲下大隅稲荷大明神社領、以其嘗有顯靈於戰場故也、據齡岳公舊譜、下大隅稲荷大明神顯靈事不詳、下大隅見上、其地多稲荷社、但不詳當時顯靈稲荷、的為何社耳、秋七月四日、齡岳公使禰寢久清權領大隅西俣村地頭職及辨分、同上、十九日、　齡岳公禱討賊於下大隅稲荷社曰、當造拜殿、二十四日、禱於冠嶽權現社曰、當修寶殿、同上、冬十二月七日、征夷大將軍足利義詮薨、法名瑞山道權、號寶篋院、據將軍家譜、

173

「載伊地知文書」

於戰場依有奇瑞、下大隅稲荷御社ニ、同郡内田地壹町、奉寄進之狀如件、

貞治六年六月十七日　　氏久（花押）

「氏久公御譜中、正文在伊地知縫殿重治トミヘタリ」

174

『執印文書』

此境合戰事、今時分大綱候之間、憑存候、御同心候ハヽ、日來可爲本望候、尚〻憑存候、委細御返事可承候、恐〻謹言、

（貞治六年カ）六月十七日　　修理亮氏久（花押）

謹上　『友雄』執印殿

175

『河上次郎左衛門家蔵』

市來院内河上村地頭職事

右、依申談子細候、所相計也、仍領掌不可有相違之狀如件、

貞治六年六月廿七日　　基久（花押）

『六代之太守氏久公』氏久（花押）

176

「氏久公御譜中」

「正文在禰寝右近重永」

河上次郎左衛門尉殿「家長」「後山城守」

大隅國西俣村地頭職并弁分、事

右、爲兵粮析所〻預置也、任先例、領掌不可有相違之狀如件、

貞治六年七月四日　　氏久(花押)

祢寢孫次郎殿(久清)

177

「載伊地知氏文書」

下大隅稲荷御拜殿事

右、爲凶徒退治之祈願、可令造營之狀如件、

貞治六年七月十九日　　修理亮氏久(花押)

178

「氏久公御譜中」「正文在串木野頂峯院」

『冠嶽文書』

冠嶽權現　御寶殿修理事

右、爲凶徒退治、立願如件、

貞治六年七月廿四日　　『六代太守』修理亮氏久(花押)

179

『仝』

御札委細承候畢、抑去夏被入見參候之条、悦存候、便宜時者、連〻可申候、兼又承候奉加事、進之候、巨細御使申候之間、令省略候、恐〻敬白、

『年間未考此ニ置』九月廿四日　　『氏久公御法号』沙弥玄久(花押)

謹上　冠嶽別當御坊御中

180

「伊作親忠譜中」

さつまのくにさつまこをりのうち、ときよしミやうのうち、くしきの丶むらのうち、しもへきた五たん、『櫛木野』『田尻』たしりた三反、まとはその一かしよの事、

右、件のところハ、わかまつのまこ大郎(太)か、『若松』ちうたいさうてんのしよりやうなり、しかるを、いさくとの丶御かたに、しろのようとう十くわんもんニ、あいたいをかきて、うりわたしまいらせ候事しちなり、かのところにをきてハ、もとよりちとうあひいろハす候うへ、いまさら『伊作』(親忠)

（地頭米）ちとうまい、ちとうくうしあるへからす候、たゝししゆこ御くうしハ、ふけんにしたかいて、御きんしあるへく候、よてこにちのために狀如件、

『当応安元年』ちやうち七ねんつちのへさる 五月廿八日

『貞治』

（若松）忠貞（花押）

「押札ニ」

『文保』「ふんほう元年

いさくへき正わくわん二兩年の、りやうけねんく三百くわん文のうけとり正文、やまた入道之京上の時」

181 『長谷場氏文書』

（端裏書）「りふつの御房」

はせはのうち、いのしりよつゑハ、かゝこかうのたよりのために、かうあゝた佛にまいらせ候、一こののちハ、六らうに給ハるへく候、かやうにはからひ申て候を、わつらいいらん申候ハんする物ハ、なかくふけうたるへく候、よて狀如件、

貞治六ねん十月一日　　かく阿（花押）

182 『仝』

（端裏書）「六らうとの」

弥六とのかあとの水田はくの事、はせはの内にしのなゝつゑ、つきのゝつゑ、四郎五らうつくりいたん、山下にたん、ひやうして五たん、かんしきのむらの内、にしむた五たん、い上壹丁、にしのそのハ、弥六子もなきあひた、しやてい六郎にとらするところ也、弥五郎とのを、おやと思ひて、たの心なく、たかいに水魚の思ひをなし、ちきやうあるへく候、仍狀如件、

貞治六年十月一日　　覺阿（花押）

183 『調所氏文書』

古河田薗以下所〻崩渡堺實検帳　貞治六十廿七

注進

守公神講師隆幸申請當屋敷・同古河田薗以下所〻崩渡堺事

一所　隆幸分　東者限故安慶薗内崩渡、北者限彌勒寺土器免并開發、西者限故修理別當實舜北薗内崩渡、當知行人前権執印法橋永賢

一所　故安慶薗内　東北者限東郷内之畠、西者限隆幸之畠、香丸講免

一所　澤薗内　東者限東郷内之畠、南者限開發并宮主免之畠、

一所　宮主免　東者限染屋、南者限隆幸畠并實舜北薗内及四至内、

一所　染屋（東者限開發、南者限隆幸之畠、西者限宮主免、北者限澤畠、）

一所　開發（東者限弥勒寺土器免并隆幸之畠、南同、西者限染屋、北者限澤畠、）

一所　四至内（東者限實舜北薗之崩渡、北者限宮主免薗之崩渡、）

右、依隆幸并面々領主之訴、遂検見、爲後代注進之狀如件、

貞治六年十月廿七日

實検使

留守沙弥康俊（花押）

權執印兼大検校法橋道与（花押）

田所検校法橋永琮（花押）

御前執行兼秀（花押）

政所検校道世（花押）

184

「執印氏文書」

（本文書ハ一八三号文書ト同文ニツキ省略ス）

185

「島津國史　齡岳公」

應安元年戊申、（是年二月改元應安、正月猶是貞治七年、南朝正平二十三年、）春二月十八日改元、（據和事始、）冬十月十五日、定山公以山門院西方栫田之水田三段、爲諏方社領、（據定山公舊譜、栫字不詳、字書無栫字、）十二月、足利義滿任征夷大將軍、（據將軍家譜、）

二年己酉、（南朝正平二十四年、）三年庚戌、（南朝建德元年、）凡二年事缺不書、

186

『水引執印文書』

契約

右、雖以傳々説承子細候、不信用候之間、則申候旱、就其以契狀如此承候之條、悦入候、向後も何様義聞得候とも可申候、又其方にも風聞之説候ハん時者、則承候て可令落居候、若此條僞申候者、

當社新田八幡宮并天滿大自在天神御罰お可罷蒙候、仍契狀如件、

貞治七年二月三日　　氏久（花押）

執印左衞門太夫入道（友雄）殿

『右上包紙ニアリ』

執印左衞門太夫入道殿　　氏久

187

「權執印文書」

（花押）

當宮御供所職事、未補之条、先度委細被仰下候了、而重被申異儀之条、不可然候、任料事、先所存分被沙汰進上、

可被歎申之由、被仰下所也、仍執達如件、

應安元年三月六日　　大和守尚直(花押)

法橋朝実(花押)

正宮前權執印法橋御房

188

請取御供所職任料取継用途十貫文、慥給候了、仍執達如件、

應安元　五月廿日　　康俊(花押)

御供所検校御房

189

『執印文書』

薩摩郡内寄田村牧事、被致忠節之間、以別儀所預置也、可被存其旨之狀如件、

貞治七年三月廿七日　　師久(花押)

執印左衛門太夫『友雄』入道殿

190

『水引執印文書』

先日計申候析所事、若相違之時者、可致別沙汰候、聊不可有等閑之儀候、兼又寄田村牧事、以別儀預申候、恐々謹言、

(応安元年)卯月二日　　氏久(花押)

『右奥ニアリ』

(上書カ)執印殿　『遠江守友躬カ』　氏久

191

『長谷場氏文書』

弥六殿あとの水田やしき、覺阿はからわせ給て候にしたかい、六らうをやうしにし候て、狀をしてたてまつり候うへハ、すゑ〳〵までわつらいゐらんあるましく候、身いまゝて子も候ハねハ、たかいすいきよのおもひをなさるへく候、仍狀如件、

貞治七年五月十八日　　「長谷場弥五郎カ」久武(花押)

192

「伊作家三代親忠譜中」

(本文書ハ一八〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

193

『入來院氏文書』

譲与

所子息松羞丸

一所薩摩國入來院内清色南方、四至堺任本證文者也、

一所美作國河繪庄内本郷下村西方
一所相模國曽司郷内藤意田畠在家立野參町、屋敷付荒野
一所筑前國比伊郷修理免禪俊比丘尼跡
右、所領等者、重成重代相傳所領也、而子息松羞丸ニ、
次第調度相副手継證文御下文、限永代、讓与所也、巨
細之旨見置文、有違乱妨時者、任本證文、可知行者也、
仍爲後證讓狀如件、
貞治七　八月六日　　(渋谷)刑部少輔重成在判

194
『入來院氏文書』
讓与　所子息松羞丸
一所薩摩國入來院内市比野名主職
一所同入來院内清色南方内本村北方
一所肥前國佐嘉下御領よしまつのありしけの内田地二町
并屋敷壹所 ときりかそのゝかハり
同國佐嘉下御領内よたかり壹町廿六つほ
かのへおほたかり八反十二つほ等事
右、所領等ハ、重成重代相傳所領也、而子息松羞丸ニ、
次第調(度)渡相副手継證文御下文、限永代、所讓与也、巨細
之旨見置文、有違乱妨時者、可知行本證文(任)○者也、仍爲
後證讓狀如件、
貞治七　八月六日　　(渋谷)刑部少輔重成在判
（一九三・一九四号文書ハ「前編」一上二八五・二二八六号ト同文ナレドモ再録ス）

195
「執印文書」
請取　御供所職任料用途事
合參拾貫文者
右、且所請取如件、
應安元年八月十二日　　法眼(花押)
大和守(花押)

196
「在師久公御譜中案文有之」
『藤野氏文書』
寄進
諏方大明神御寶前、山門院西方栫田之内水田參段事、
右、所奉寄進如件、
應安元年十月十五日　　『師久公御法号』沙弥道貞
「口裏ニ」「諏方御社寄進狀案」

197
『入來臣武光氏文書』

譲与　小三郎兼氏所

薩摩國高城郡本万得名惣領職加弁済使職定、領家御安堵之時可申給、

同國同郡吉枝名惣領職

同國宮里郷床並田地薗惣領職今者号武光名、元権次郎名、

同郷清水寺別當職惣領田薗并免田、薩摩郡高城郡散在料田也、

薩摩國三番在廳權大拯職牛屎院南郷書生吉枝名内在廳給在之、五町也、

同國薩摩郡別府前田地四段

筑前國三奈木庄七隈郷田地三町　屋敷二ヶ所　畠六段

井上　長淵等　弘安恩賞地頭職惣領職

右、所領所職等、重代相傳之地也、然間、相副次第本證文御下文御下知、譲与小三郎兼氏者也、限永代、不可有知行相違、將亦庶子等并女子後家先年田薗等譲与了、御公事支配之外、不可成違乱、仍譲狀如件、

應安元年十月廿五日　　沙弥心呈(重巻)(花押)

『右ノ裏書』

「任此譲狀之旨、知行所不可有相違也、

應安元年十一月三日　　伊久(花押)」

198

『樺山氏文書』

目安嶋津安藝入道明見申(樺山資久)

欲早任御下文旨、被成下御教書、弥抽忠功子細事、副進二通御下文

右、於日向國臼杵院・同國宮崎郡、肥後國山鹿庄・同國尻無村等者、明見云軍忠、云奉公、依致多年勞功、所宛賜也、然早任御下文之旨、被成下御教書、弥抽忠節(為脱カ)、目安言上如件、

應安二年八月　日

199

『岸良氏文書』

譲与　大隅國肝付郡内岸良村弁済使職事

字鍋太郎丸所

右、彼村者、兼阿重代相傳所領也、然字鍋太郎丸依有父子契約之儀、其志不浅之間、相副次第證文等、限永代、所譲与也、有限御公事等、任先例、令勤仕、至于子々孫々、無他妨可令領知也、仍爲後日譲狀如件、

應安貳年十二月十四日　　沙弥兼阿(花押)

200

「正文在安養院」

条々

一しうてんならひにしへきをこほす事、

一すわの御はやしの木竹をきる事、
一すわの御まへの道をとをる事、
一御うちのしへきのうちに馬牛をはなす事、
この条々、人ニよらす、不日ニさいくわにをこなうへく候、此条男ニをいてハ、すなわちちうすへく候、女子にをきてハ『是ハ女ノ髪ヲ切ル事也』はつけすへく候、
正八幡すわの大ミやうしんもせうらんあるへく候、いつはりあるましく候、
『当南朝建徳元年『庚戌』』
應安三年正月十一日　「氏久」（花押）
『右御誓願ニより諏方瀬戸通無之処ニ、享保十九年ヲ六月後迫中より依願御免有之、但神主ハ不知、但不浄之者又ハ馬通ハ堅差留事也』
「此文書、御譜中ニ有之」

201

「伊作大隅守久義譜」
譲わたすちやくしいぬわか丸（久義）に
さつまの國伊作庄みなミかた
右、件の所領は、道壹重代相傳の所領たるあひた、ちやくしいぬわか丸に、したい相傳のもんしよをあひそへて、譲わたすところなり、但なかのさとの内に、宗五郎（久次）仁譲ところあり、水田拾壹町同薗、かやうに譲与といへとも、もし宗五郎男子なくハ、一後のゝちは、惣領知行すへし、もし又いぬわか男子なくして、をなこはかりあらは、ゆ（湯浦）のうらを女子にゆつるへし、惣領をは、わか二郎（久親）にゆつるへし、わか二郎男子なくは、宗五郎にゆつるへし、かやうにはからいをき候ところに、いらんわつらいをなさむものは、道壹か子孫のきあるましく候、仍爲後日譲狀如件、
應安參年二月廿三日　道壹（親忠）（花押）
「此文書、伊作家譜中大隅守久義譜中ニ有リ」「幼名大若丸也」「正文在巻本」

202

「正文土持孫兵衛家ニアリ」
鎮西大將軍（今川了俊）既所着下也、早相催一族并同心輩等、可抽忠節之狀、依仰執達如件、
應安三年庚戌十月拾四日　武藏守（細川頼之）御在判
土持三川守

203

「指宿文書」
智覧美濃權守忠泰申、薩摩國智覧院并河邊郡事、任亡父忠元譲狀旨、可致沙汰之由、令旨如此、早鮫嶋下野守相

共莅彼所、可被沙汰付下地於忠泰、若有子細者、載起請之詞、可被注進之狀如件、

建徳元年十一月廿一日　　前中納言（花押）

指宿能登守（忠勝）殿

204

忠篤　彦次郎入道
- 忠泰　次郎
- 忠勝　能登守
- 忠元　左京亮
- 忠平　掃部介

205

「伊作家譜中」

親忠（三代）
- 初忠親　愛壽丸　宗四郎　左衛門少尉　下野守
- 女子　字ほうしゆ子　田布施之二階堂某室
- 久義　犬若丸　大隅守
- 久親（十七代孫）　若松正左衛門

應永二十九年正月廿九日、爲弟遠江守十忠被殺、

206

「國史　齡岳公」

四年辛亥、（南朝建徳二年）、春三月二十三日、

後光嚴天皇讓位於

後圓融天皇、（據續本朝通鑑）、秋七月二十四日、左少將胤房奉征

夷大將軍宮令旨、與禰寢久清狀、使應官軍効忠節、（小據）

- 親久（廿四代孫加世田士）
  - そうゆうの房
  - 西彦四郎　近江守　西之元祖也
- 久幸　久秀
- 久次（略ス）
  - 加賀守　伯耆守　加賀守
  - 宗五郎　左馬頭　肥前守
- 十忠
  - 初十久　字六郎　遠江守　法名道三
- 久周（国イ）
  - 久清　石見守　法名道全　宗次郎
- 男子　ぞう
- 號若松　若次郎丸　下野守　法名宗壽

松氏系圖文書、征夷大将軍宮蓋謂良懐親王、　是歳冬九州亂、幕府以今川伊豫守貞世入道了俊、爲筑紫探題、據大日本史、

207

「載伊作譜ほうしゆ子傳」「譜中正文在巻本トアリ」

譲与　字ほう壽子所仁

伊作庄今田名内水田森本壹町貳段

ならひに中原名内寺前八段

宮内名内しゆくしん薗壹ヶ所円性房屋敷

右、件の所領ハ、道壹重代相傳の所領なり、しかるをほうしゆこに譲あたふるところなり、但、いちこの後は、そうりやういぬわか知行すへし、かやうにゆつりあたふるうへハ、いつれの子にても、かの所にいらんわつらいをいたさむともからハ、道壹子孫たるへからす、仍爲後日譲狀如件、

建徳貳年五月廿七日　　道壹(親忠)(花押)

208

「載伊作譜久義傳」「正文有之トアリ」

譲与　犬若(久義)母所仁

伊作庄南方内伊与倉水田

ならひに薗

右、件の所領は、道壹重代相傳の所領なり、しかるを犬若母にゆつりあたふるところなり、但、いちこの後は、そうにゆつるへし、もしそう男子なくハ、惣領いぬわか知行すへし、かやうにゆつりあたふるうへは、いつれの子にても、かの所にいらんわつらひをいたさむともからハ、道壹か子孫たるへからす、仍爲後日譲狀如件、

建徳貳年五月廿七日　　道壹(親忠)(花押)

「此文書、伊作家文書中ニ有リ」

209

「伊作家譜中大隅守久義譜」

對南方別府某、有宿意之未散、故廻欲誅伐之籌策、發軍勢、不以時、正月元旦、發於伊作、別府之内、以稱鵜塚之地構一陣、未施帷幕、城裏之軍衆、不移時刻發出來、而却而責久義之陣、久義以無勢故、不得進退、徒經數日而已、於茲大守元久公使一价爲制禁、故令開陣畢、又田布施二階堂某者久義之姉婿也、別府亦二階堂之爲婿、是以今度不合力於久義、故久義發憤欲報恨於二階堂、而告之於太守、太守亦慮後之有害也、應久義之請、且又太守構陣營於田布施、周圍攻責者太急也、二階堂不得防禦、爲降伏、向市來没落畢、委曲記元久公譜中者也、

210

「見伊作譜若松元祖久親傳」「文庫中在伊作家文書、正文在巻本トアリ」

譲与　若次郎丸（久親）に

伊作庄南方内日置吉利田畠

ならひに熊栖田畠山野川海　四至堺本文書あり、

右、件の所領は、道壹重代相傳の所領なり、しかるを若次郎に永代をかきて、譲与ところなり、御公事は、分限にしたかいて沙汰をいたすへし、かやうにゆつるといへとも、若次郎男子なくは、惣領いぬわか（久義）にゆつるへし、かやうにはからいをくうへは、かの所にいらんわつらをなさんともからは、道壹か子孫のきあるへからす、仍爲後日譲狀如件、

建徳貳年五月廿七日　　道壹（親忠）（花押）

211

「載伊作譜そうゆうの房傳」「文庫伊作家文書中、正文巻本ニアリ」

譲与　そうゆうの房所仁

伊作庄北方伊与倉名内水田　桑木五段同次郎太郎入道屋敷薗壱ヶ所

宮内名内極樂寺後田伍段

右、件の所領は、道壹重代相傳の所領なり、しかるをそうゆうの御房にゆつりあたふるところなり、かやうにゆつりをくうへは、いつれの子にても、かの所にいらんわつらいをいたさんともからは、道壹か子孫たるへからす、但、いちこののちはわか二郎知行（久親）すへし、仍爲後日譲狀如件、

建徳貳年五月廿七日　　道壹（親忠）（花押）

212

「載伊作譜遠江守十忠傳」「伊作家文書中、正文巻本ニアリ」

譲与　字六郎（十忠）所仁

伊作庄花熟里名内水田貳町五段

并薗三ヶ所、此薗内壹ヶ所ハ花熟里入道

居薗たるへし、今田名内野崎田五段

右、件の所領ハ、道壹重代相傳の所領なり、しかるを六郎仁永代をかきてゆつりあたふるところなり、たのさまたけなく知行すへし、かやうにゆつりをくうへハ、いつれの子にても、かの所仁いらんわつらいをいたさむともからハ、道壹か子孫たるへからす、御公事においてハ、分限にしたかいて沙汰をいたすへし、かやうにゆつりをくといふとも、そうりやういぬわか（久義）ゝめいをそむかは、惣領ちきやうすへし、仍爲後日譲狀如件、

建徳貳年五月廿七日　　道壹（親忠）（花押）

213

『高尾野士出水藤之丞蔵ノ文書』

野州跡御譲雖拜領仕候、和泉庄地頭職御免之上者、靜珠
并一族等知行分事、故殿御時任被定置之旨、不可有相違
候、次永吉内給分人々、杉・朝岳・井口三人内、前此(於カ)上
者、向後不可有違變之儀候、且此趣面々可有仰候、仍狀
如件、

建徳二年六月廿七日　　武久在判

酒勾美作守殿

214

『建徳二年六月廿七日ノ文書裏書』

此狀正文惣領方仁所簡置也、仍當知行分事、何モ任彼狀、
不可有相違候矣、

建徳二年七月廿八日　　伊久(花押)

215

「羽嶋氏文書」

譲渡　松土与丸所

可早領知薩摩國天滿宮國分寺領内原田壹丁二反、なか
はらい壹丁、よつのつほ八段、ちやうせい五段、八段
つほ三反、野本三反、一所やくしたうの大薗、一所い
むたの入道薗、

右、件所領者、禪惠重代所也、限永代、松土与丸所譲与
也、無他妨可令子孫相傳也、仍爲後代譲狀如件、

建徳二年七月　日　　沙弥禪惠(友重)(花押)

216

『入來院氏文書』

置文事

右、重門以後所領事、雖有數輩之兄弟、守其器用、惣領
一人仁一所ヲモ不残可譲与之也、若背此旨、所領ヲ於分
与數子之輩者、不可有重門之子孫云云、如此定置上者、
若万一ニモ所領ヲ雖分譲、任此狀之旨、於惣領一人之計、
押而可令知行之者也、仍爲後證、置文之狀如件、

建徳二年十月十五日　　彈正少弼(渋谷)重門(花押)

217

『入來院氏文書』

(端裏書)「をきふミ」

置文

一後家并帶刀左衞門尉(渋谷重継カ)事、於虎五郎(重頼)丸之計、可加扶持也、
一かつしきの當知行、藏野・内山二ヶ村之事、是又於虎
五郎丸之志、一期之分可有知行也、

一女子長王ハ、塔原内なへの村を可知行也、同一期分、
一同女子虎王にハ、上副田内沙た柄を可有知行也、同一期分、
一同女子くり犬ハ、市比野内平野を可知行也、此内除自作分、同一期分、
一上副田内濱田左衞太郎給分之事、爲副田湯接待料足可寄進也、限永代、

右、此条々、爲後日所定如件、

建徳二年十月十五日　　重門(渋谷)(花押)

218

『入來院氏文書』

譲与

所　子息虎五郎丸(重親)

一所　薩摩國入來院内清色北方
一所　北方内上副田村
一所　市比野村半分地頭職并下地
一所　南方内清色村
一所　塔原村
一所　中村
一所　楠本村
一所　倉野村
一所　久中村(住)
一所　柏嶋村
一所　筑前國柏原水田屋敷
一所　筑後國永淵屋敷　同國みな木の屋敷
一所　甲雙(斐)國西嶋内葦入在家田畠
一所　美作國河繪庄内下森上山大足
一所　相模國澁谷曽司郷内ふちこゝろの屋敷立野等事

右、於所領等者、重門重代相傳所領也、仍虎五郎丸仁相副次弟(第)調渡(度)手継證文等、限永代、所譲与也、於御公事者、任先例、可致支配者也、次重門以後所領之事、雖有數輩之兄弟、守其器用、惣領一人仁一所ヲモ不残可譲与之也、若背此旨、所領ヲ於分与數子之輩者、不可有重門之子孫云云、如此定置上者、若万一ニモ所領ヲ雖分譲、任此狀之旨、於惣領一人之計、押而可令知行者也、且爲後證、所書載置文之趣也、仍譲狀如件、

建徳二年十月十五日　　彈正少弼重門(渋谷)(花押)

219

『日州御領大田原村新助蔵』

武光以下凶徒寄來當城之間、致合戦最中也、早馳越佐伯蒲江邊、可被致忠節之狀如件、

應安四年十一月十四日　　治部少輔判(今川義範)

土持八郎(時光)左衞門入道殿

220 『入來院氏文書』

讓与　所

所養子松乘丸

薩摩國入來市比野村内鳥原跡地頭職事

右、件所領者所務之事、重門重代相傳私領也、而依有其志候、限永代、所讓与也、但、於于諸事、惣領之支配ヲ令違背之時者、不可有知行彼所務者也、且爲後證之狀如件、

建徳二年十二月二日

221 「國史　定山公　齡岳公」

五年壬子、南朝文中元年、春正月二十五日、今川了俊遣島津親忠書、使與　齡岳公俱事幕府、據伊作家譜、又遣禰寢氏宗人書亦如之、據小松氏文書、　定山公築城高江郷名曰峯城、使山田式部三郎大郎忠房等定之、夏六月二十三日、澁谷重門引軍攻峯城、重門緣岸登城、中飛石殪、已而祁答院氏・入來院氏・高城氏・東郷氏合兵來攻遂陷之、殺忠房及守護代酒勾氏、據定山公舊譜、山田聖榮自記、重門死於峯城、定山公舊譜無月日、今書六月二十三日、據入來院主馬系圖、峯城遺墟在高江郷地頭館東北高江村、忠房、忠經之從兄弟也、據島津支流系圖、又與菱刈氏・牛屎氏及球麻相良氏共圍碇山城、　定山公告急於志布志、　齡岳公馳至鹿児島、募兵未集、先引伊作・伊集院之衆、而西既踰薩摩山、而後軍及之、下令曰、旦日擊賊、敵軍聞之、宵遁碇山城圍解、　據齡岳公舊譜、山田聖榮自記云、市來某發兵遏後軍、公使人請、且賂以邑、不聽曰、若得公女以為内主受賜多矣、土地非所欲也、公怒、群臣咸曰、事急矣、何惜一女、乃許之、於是市來某解兵遂娶公之女、生三男、齡岳公舊譜・市來次左衞門系圖、齡岳公唯有一女、適伊集院頼久、未聞別有一女、適市來某者自記所言妄也、今不取、或曰、公之女始適市來某、後適頼久、亦不可知也、對曰、不然、頼久之妻即義天公之妹也、義天公生於永和元年、後此三年矣、則頼久之妻、云始適市來某者、愈妄、薩摩山、東屬串木野郷、西屬隈之城郷、冬十二月二十一日、左少將與澁谷虎五郎重頼書曰、爾父死於薩州峯城之役、　朝廷嘉之、恩賞宜及爾、因諭、重頼、重門之子也、據入來院主馬系圖文書、左少将止書其官、視其花押、即胤房也、

222 「正文在文庫伊作家文書」

「伊作親忠譜中」

嶋津修(元久)理亮相共、可致忠節之狀如件、

應安五年正月廿五日　　「今川伊予守貞世入道了俊判」

沙弥(花押)

嶋津下野(親忠)入道殿

223 「正文在文庫」

「仝譜中」

嶋津三郎相共、可致忠節之狀如件、

應安五年正月廿五日　　沙弥（了俊）（花押）

嶋津下野（親忠）入道殿

224

「正文在島津安藝守久雄」

就硫黄事、梵章首座下向候、嚴密可有沙汰候、委細被仰含章首座候也、

二月廿八日　　「義満」（花押）

島津修理權太夫殿

（捻封ウハ書）　嶋津修理權太夫殿

225

『岸良氏文書』

「ロウラ」

「さきやう」

沙弥成佛譲渡

左京進兼弘

大隅國肝付郡内岸良村田畠山野狩倉等之事

合

四至堺ハ如阿佛譲、

右、件於岸良村者、阿佛重代相傳所領也、隨テ阿佛譲、同兼光譲、同兼村譲、同成佛譲、

一領家代々御下知、一通モ不残孫左京進譲渡畢、

一領家御年貢拾貫内本田肆貫、東方肆貫二人ニテ西方弐貫可有沙汰候也、

一沽田引出物雑事分残參貫文、

本田壹貫百文、東方壹貫百文、西方捌百文、無懈怠可有沙汰也、

一此上ハ一事一言にても無煩寄進可有沙汰也、仍爲後日譲狀如件、

一西方　東方　彦二郎・得犬丸・犬一丸相違候者、本田内政所分前田彦太郎、一宮薗門口得犬丸上村田口犬一丸知行可有候、

應安五年五月十五日

岸良平内左衞門入道沙弥成佛（花押）

226

「日州御領大田原村新助蔵」

畠山治部太輔（直顕）入道爲御方打出肥後國云々、早令同心合力、可被致忠節之狀如件、

應安五年五月廿日　　沙弥（今川了俊）判

土持左衞門太郎殿

227

文中元年壬子

六月廿三日、入來院彈正少弼重門高江峯城ニて戦死とあり、敵して欤、壽昌

寺住僧牢山（重門俗弟にて十世の主僧、同しく此に死す、）山田式部三郎忠房（右の重門に攻られ、峯城を守て戦死とあり、年月なし、姑此に置く、或ハ式部三郎太郎に作り、師久公の守護代なりといへり、）宮里三郎太郎好久（薩の嶺城に戦死とあり、年月闕れは此に置く、）酒勾筑前守（高江峯城に戦死とあり、薩州高江之城ハ酒勾氏安堵すと横川酒勾氏由緒に見へたり、）

228

『野田愍應寺文書』

祈禱申於當寺、殊可被抽懇祈之狀如件、

應安五年九月四日　　太政大臣義滿判

感應寺長老

229

『仝』

右於當寺、軍勢并甲乙人等不可致濫妨狼籍、若有違犯之輩者、可處罪科之狀如件、

應安五年九月四日　　同御判（足利義滿）

感應寺長老

230

「正文在文庫」

「伊作親忠譜中」

被差進親類山田太郎左衛門入道之条、尤神妙、急重馳參、可被致忠者、可被抽賞狀如件、

應安五年十月十三日　　「今川了俊判ナリ」沙弥（花押）

嶋津伊作下野（親忠）入道殿

231

「伊作親忠譜中」

追而申入候、

御官途之事、御面目之次第、定可有御申入候哉、重恐惶謹言、

畏申入候、

抑今度山田殿爲御代官上荷（府）候之間、諸事御滿足之躰、目出度畏入候、雖不甲斐〳〵敷候、此後者御代官一分と被可思食候哉、公方の御意も可然候つるか、此御方御上荷故候哉、世上躰ハ不能注御申入候、恐惶謹言、

（応安五年カ）十月廿八日　　沙弥幸阿上（花押）

「上書」進上　山田太郎左衛門入道殿　沙弥幸阿上

232

「正文在文庫伊作家文書」

「伊作親忠譜中」

久不申承、不審候處、御音信爲悦候、抑此邊凶徒等事、度〻合戦、毎度御方打勝、或討取、或追拂候了、今明日之間、宰府博多可打入候、定御上府候て、入見參可申承

候、恐々謹言、

二月廿一日　　大宰少貳冬資(花押)

謹上　嶋津下野入道殿(親忠)御返事

233

「正文在文庫　伊作家文書」

「伊作親忠譜中」

去七月十三日御札、今月十九日到來、委細令承悦候了、當方御對治事、大略屬無爲候、公私目出候、其境御合戰之由承候、無心元候、遙々九州令靜謐、以參會可申承候、毎事令申御使者候了、恐々謹言、

十月十九日　　大宰少貳冬資(花押)

謹上　嶋津下野入道殿(親忠)

234

『入來院氏文書』

凶徒國分平次郎友重・同永利又太郎入道祖性兩人跡田薗事、善悪共令中分、半分所去申候也、迄于御子々孫々、聊不可成違乱之煩候、此上者、於公方可擧申候、恐々謹言、

二月十九日　　左衞門少尉師久(花押)

謹上　澁谷美濃五郎左衞門尉(重継)殿

（本文書ハ「旧記雜録前編一」二五七三号文書ト同文ナレドモ再録ス）

235

『仝』

參御方者、本領不可有相違、有別功者、可被抽賞之狀如件、

應安五年十一月廿五日　　『今川伊予守貞世入道了俊』沙弥(花押)

澁谷虎王丸

236

日向國飫肥郡内北郷之事、爲兵粮所之領定置候也、若有子細者、重可致其沙汰之狀如件、

應安五年壬子十二月十一日　　沙弥(今川了俊)御在判

土持三川守太郎殿

237

『入來院氏文書』

薩州峯城合戰之時、親父(重門)討死之条、所被感思食也、可有抽賞之狀、依仰執達如件、

文中元年十二月廿一日　　左少將(池尻胤房)(花押)

澁谷虎五郎(重頼)殿

238

「羽島氏文書」「写ニテ本書ナシトアリ」

「此書、樺山家二代音久譜中ニ在リ」

ゆつりわたす二郎四郎ところニ
さつまのくにかこしまのこほりのうち、たけのむらハう
〳〵のかとの事、
みきのてんちさんやの事ハ、つほつけとちやうニミへたり、たのさまたけなく、ゑいたいをかきりて、ちきやうするへし、よてのちのためニ、状くたんのことし、
（応安五年也）
けんとく三年八月廿八日　（友重）せんゑ（花押）

239　『入來院氏文書』

參御方致忠節者、本領不可有相違、有別功者、可被抽賞
狀如件、
應安五年十二月廿五日　『今川伊予守貞世入道了俊』沙弥（花押）
『渋谷家七代重頼』澁谷虎五郎殿
『包紙』澁谷虎五郎殿　了俊

240　「正文樺山源三郎久清ニ在リ」

被差進中条三郎左衛門尉候条、尤以神妙、急重馳參、可
被致忠者、可被抽賞之狀如件、
應安五年十二月廿五日　『今川貞世』沙弥（花押）
嶋津安藝左京進殿（『音久』）

（表紙）

氏久公　自應安六年
伊久公　至永和元年

前編　舊記雜錄　巻廿八

應安七「二年師久公逝去」　永和四　康暦二　永徳三
「応安三ヨリ　応安五ヨリ　永和元ヨリ　永徳元ヨリ　至徳元ヨリ」
『建徳二　文中三　天授六　弘和三　元中九』

241

「見于本田信濃守重親譜」

一氏久公陣咲限、與税所某戰湯之嶺、而後應安六年癸丑二月、又凶徒等寄來姫木城石原口、襲我　太守、味方者、碇山金吾・伊集院長門守・本田重親其息男河北太郎于時十六歳也、　玉利・小田・蒲生・北村・上井・篠原・小島彼是僅四十騎許、誠雖當危急之時、各輕命防戰、故退大敵討取許多強兵、應安六年癸丑二月中旬、　氏久主欲爲都之城後攻、陣天嶺曰、使又三郎君後号陸奥守元久公、歸入志布志、君不應之、　氏久主數諫言、　君漸諾、重親補佐此、君自幼今臨別、落涙不忍焉、向氏親曰、我已定意於戰死、汝全命、而奉仕于又三郎君可抽忠勲、　君可名將矣、其外諸將等察主君父子離愁、皆共啼泣也、○同廿八日、去天嶺赴末吉、屯平長谷、三月一日、合財部人數其勢八百有餘、月一揆太將新納近江守時久、杉一揆太將本田信濃守重親相共卒手勢、又小一揆之勢二百計備于　氏久公前後、兩將若無利、議横合操合、于時旌奉行梶原或記北原、向重親、問今日卯如何、重親曰、不如抜敵後矣、梶原則鞭駿馬、而向諸將、今日軍可守此旌、則眞先掛而進平長谷渡、丁此時、肥後兄弟・石井・大始良・完目藤藏・北郷弥次郎・同七郎共戰死、其外諸將等重義輕命雖相挑勝負未決、兩陣互避去矣、重親至小鷹原庄内戰死矣、實應安六年癸丑三月三日也、氏久記并見自家之旧記、

242

「國史　齡岳公」

六年癸丑、南朝文中二年、　齡岳公致注進狀於今川了俊、上安藝入道三郎右衛門尉改稱安藝守、資久・島津山田掃部助友久大隅式部亀三郎改稱式部孫三郎、又稱掃部助名友久、之功勞也、春二月七日、了俊贈資久・友久書各

一通、以褒嘉之、（據島津支流系圖、）

243

「写在樺山源三郎久清」「此書樺山氏元祖資久譜中ニ在リ」

於國致忠節、嶋津越後守氏久所注申也、尤以神妙、向後弥抽軍功者、可被抽賞狀如件、

應安六年二月七日　　沙弥了俊（今川）判

嶋津安藝入道（資久）殿

244

「載山田友久譜」

於國致忠節之由、嶋津越後守氏久所注申也、尤以神妙、向後弥被抽軍功者、可被抽賞之狀如件、

應安六年二月七日　　沙弥（花押）（今川了俊）

嶋津山田掃部助（友久）殿

245

『入來院氏文書』

相催庶子一族、可致忠節、有別功者、可被抽賞之狀如件、

應安六年二月廿三日　　沙弥（花押）（今川了俊）

澁谷虎五郎（七代重範）殿

246

「正文在土持孫兵衛家」

日向浮田庄之事、爲兵粮料所之領定置候也、専先例之日（守カ）取、可致其沙汰候、有子細者、追而可有沙汰之狀如件、

應安六年癸丑二月廿八日　　沙弥御在判（今川了俊）

土持三川（河）守殿

247

應安六年癸丑

三月一日、岩河大和守盛久（日州饗原ニ於て戦死、盛久は種子島氏の臣なり、）

248

「伊集院大隅守久氏譜中」

相良氏領肥後州八代・葦北・球麻、誇武威以與伊東氏合心共謀、而逼日州已入眞幸・北郷・野々三谷於手裡、圍樺山氏・北郷氏之在都城、　太守氏久公欲渠等之救窮困、應安六年癸丑正月、率軍衆先陣末吉所運籌策也、澁谷右馬助者、兼日堅壻之約、由是遣价使達久氏曰、吾亦屬于國中一揆、將赴庄内攻都城者、有近日所冀、發向以前欲遂一會向云云、久氏報曰、我之太守氏久在夫境、手干戈無晝無夜勞軍務矣、如予之曹亦帶兵器率騎歩、欲往其地　太守之增軍勢、於一面佳會者、必向戰場互可以實見首云云、使者反命、則右馬助謂返答旨趣所以深羞也、三月一日、進蓑原、兵刃既接終日挑戰之際、右馬助遂戰死、如嚮之

所言、果而實見於澁谷之首、右馬助者、守一言捨一命、備首於實見、久氏者、其壻既雖戰死令女子薙髪禪衣、而爲圓通庵住持、右馬助之吊後世頓證菩提、不怠晝夜讀經、哀哉、

249

「新納越後守實久譜中」

伊東氏・北原氏・相良氏已下之凶徒、企叛逆逼莊内、攻樺山氏・北郷氏之守都城者久矣、　太守氏久公欲渠之救急難、已發於志布志、先構陣於梅北天ヶ嶺、待應安六年癸丑三月一日、而發向蓑原、于時實久爲月一揆之將、抽軍功者也、

250

「正文在樺山源三郎久清」

於國被致忠節候之由、其聞候之間殊喜入候、凶徒對治不可有紛候、急被馳參候者、可目出候、其子細可注進京都候也、早速御參陣候者、弥可爲忠功候、恐々謹言、

三月十一日　　了俊（『今川』）（花押）

應安六　　嶋津安藝（資久）入道殿

「上包」嶋津安藝入道殿　　了俊

「此書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

251

『冠嶽文書』

補任

薩摩國串木野村内冠嶽東谷西嶽○別（両山）當職事

右、於職者、所宛行榮永也、早任先例、可令補任之狀如件、

應安六年三月十二日　　伊久（『上総介』）（花押）

「伊久公御譜中、正文在串木野頂峯院トアリ」

252

『入來院氏文書』

度々被成御教書了、近日可有合戰之上者、其堺事、嚴蜜一途可有籌策之狀如件、

應安六年三月十六日　　沙弥（今川了俊）（花押）

澁谷虎五郎（重頼）殿

253

「日州御領諸郡（県）大田原村新助蔵本」

打入宇目長峯、被致忠節之条、尤以神妙也、弥可被抽忠功之狀如件、

應安六年卯月四日　　治部少輔（今川義範）判

土持左近將監（栄勝）殿

254
「正文在樺山源三郎久清」
當陣合戰最中也、急速着船於肥前國寺井津、可被致戰功之狀如件、
應安六年五月十四日　沙弥（了俊）（花押）
嶋津安藝（資久）入道殿
「此書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

255
「正文在喜入氏」
先日計申候析所事、若相違之時者、可致別沙汰候、聊不可有等閑之儀候、兼又寄田村牧事、以別儀仰（預）申候、恐々謹言、
「応安年中欠」卯月二日　氏久（花押）
執印殿

256
『廣濟寺文書』
竜泉庵之知行分田畠山野、開山懐聞和尚廣濟寺方丈景周藏主被讓与申候上者、重代御知行不可有子細、仍爲後日之狀如件、
應安六年八月十七日　沙弥（伊集院久氏）觀了（花押）

257
「伊作親忠譜中」
（本文書ハ一四九号文書ト同文ニツキ省略ス）

258
「正文在樺山源三郎久清」
掃部助所望事、可擧申京都之狀如件、
應安六年十月一日　沙弥（今川了俊）（花押）
嶋津安藝太郎殿
「此書、樺山家二代音久譜中ニ在リ」

259
「樺山家元祖資久譜中」
「正文在樺山源三郎久清」
日向國嶋津庄内穆佐院領家職（南都一乘院領）、半濟事、爲兵粮析所々預置也者、守先例、可致其沙汰之狀如件、
應安六年十一月五日　沙弥（今川了俊）（花押）
嶋津安藝（資久）入道殿
「上包」嶋津安藝入道殿　了俊

「伊集院大隅守久氏譜中ニ在リ」
沙弥道應（伊集院頓久）（花押）

260

『椛山文書』

日向國嶋津庄内穆佐院領家職（南都一乗院領）、半濟事、爲兵粮析所〻預置也者、守先例、可致其沙汰之狀如件、

應安六年十二月五日　沙弥（今川了俊）（花押）

嶋津安藝（資久）入道殿

（本文書前号文書ト同一ナルベシ）

261

「載山田忠經譜」

加賀守所望事、可擧申京都之狀如件、

應安七年五月廿二日　沙弥（今川了俊）（花押）

嶋津山田九郎左衛門尉殿

262

「載山田久興譜」

右京亮所望事、可擧申京都之狀如件、

應安七年五月廿二日　沙弥（今川了俊）在判

嶋津山田四郎殿（後出羽守久興入道玄貳）

263

「國史　齡岳公　久哲公」

七年甲寅、（南朝文中三年）夏六月、　久哲公使本田圖書允泰光上訴狀於幕府曰、豊後井田郷・豊前副田荘・日向高知尾荘吾舊邑也、喪之已久、請賜本州闕所、以償之、又前所言讃岐櫛無保、信濃太田郷・大藏郷、下總相馬郡符川・甲斐御房・發戸・黒崎等知行分事、願蒙吹嘘、（據久哲公舊譜、闕所、鮫島掃部助舊領阿多郡半分百五十町、二階堂隠岐守舊領阿多郡半分百五十町、上益山・下益山両村合三十町、顕娃郡名主職、鮫島氏領阿多郡半分、見第五卷建武四年注、掃部助世系不詳、定山公使二階堂隠岐守直行權領阿多郡観音寺白河村、見上貞治五年、和語謂禄為知行、）　久哲公使其子生黒丸爲僧、秋八月二十九日、先賜生黒丸山門院西方三村之地曰、將以資爾直椒裟裟之費、（同上、將軍家譜、王代一覧、本朝通紀等云、應安七年三月、將軍義滿西征、四月先鋒至長門、擊菊池武政、武政退保筑後高良山、島津・伊東等叛菊池降幕府、九月武政求和許記、喜連川系圖、皆言是歳、義滿親帥諸將平筑紫、然據三代記、是歳義滿無西征事、故不取、按定山公・齡岳公舊譜、此年無二公叛菊池降幕府事、且二公未嘗從菊池、何謂叛、固已從幕府矣、何謂降、又據續本朝通鑑・大日本史、是歳義滿無西征事、則將軍家譜・王代一覧等所云、如夢中言、不辨可也、是歳義滿西征、大日本史注云、足利治乱記、寛文七年、武朝嗣位、無義滿西征事、然其書往往行於世、恐有以誤後人、故書此以著其妄、）

264

「藤野氏文書」「此文書伊久公御譜中ニ在リ」

嶋津上總介伊久代本田圖書允泰光重謹言上

欲早被經御沙汰、豊後國井田郷、豊前國副田庄、日向國高知尾庄間事、

右、巨細言上先畢、仍彼所領等者、伊久於普代（譜）相傳所領無相違之處、于今御沙汰遅引之条、愁訴無極者也、所詮、九州御退治之間、彼所領等事、可被閣御沙汰者、御靜謐

中間、先薩摩國闕所本宮方之仁等跡（注文在別紙）、進上之、爲彼替令拜領、弥欲抽忠節、次讃岐國櫛無保、信濃國太田郷内南郷・同國大藏郷、下總國相馬郡内符川・甲斐御房・發戸・黒崎以下所〻知行分事、可預御吹擧京都之由、先度令言上畢、然早此等條〻、急速爲被經御沙汰、粗言上如件、

應安七年六月　日

望申闕所事

一鮫島掃部助跡（阿多郡半分百五十町）、

一上益山・下益山（兩村三十町）、

一顯娃郡　名主職

一二階堂隠岐守跡（阿多郡半分百五十町）、

井田郷・副田庄者、御方之輩當知行之間、世上靜謐之間、爲井田郷・高知尾庄・副田村、爲彼替欲宛賜之、

265

「正文在樺山源三郎久清」

美濃守所望事、可擧申京都之狀如件、

應安七年七月廿日　　沙弥（今川了俊）（花押）

嶋津左京亮殿

「上包」かはやま殿まいる

「此書、樺山家二代音久譜中ニ在リ」

266

「比志嶋氏文蔵」

ちやくし孫太郎（久範）か所□薩摩國満家□（院）の内比志嶋名ならひニ西俣・河田・城前□（田）・上原薗、以上五ヶ所の惣領職ハ、源範□（平カ）重代さうてんのち也、しかれハ、くわんとうあんとの御下文代〻のてつきの狀等も、一しものこさすあひそへて、ゆつりわたすところ也、方〻の御くうし等ニをいてハ、せんれいのむねニまかせてきんしすへし、但當名の内水田すこししやてい犬一丸にゆつるへき也、そのほかきやうたいあまたありといへとも、せう所たるあいた、おもひあてさるなり、孫太郎はからいとして、めん〳〵にふちすへきなり、仍ゆつり狀如件、

應安七年（歳次甲子）八月廿二日　　源範平（比志島）（花押）

267

『入來本田氏文書』

ゆつりあたふ　しそくさこん（『左近』）のくらん（『蔵』）人か所

さつまの國山門院ミなりか（『薬成河』）ハのむらのてんゑんらの事

右所りやうハ、聖興ちうたいさうてんの地なり、しかるあひた、しそくさこんのくらん人兼久に、やうたいをか

きりてゆつりわたすところ実なり、しゝそん〳〵にいたるまて、たのさまたけなくりやうちすへきなり、『庶子』そし、このうちひやうへころう『兵衛五郎』・かなめうひめ御のゆつりをのそく、かの地におきて、いらんわつらひあらんにおきてハ、ゆつるところの所りやうをちきやうすへからす、『不孝』ふけうの子たるへし、『水魚』すいきよのおもひをなし、おとゝいもうとをふちすへし、又國かりやうけちとう米御くうしいけハ、せんれいにまかせて、そのさたをいたすへきなり、よてこうせうのためにゆつりしやうくたんのことし、

（せん脱カ）

應安七年八月廿二日　　尼聖興（花押）

268

『仝』

ゆつりあたふかなめうひめ御せんの所

さつまの國山門院内ミなりかハのむらのてんゑんの事

一所　竹原町壹町

一所　古城屋敷

右所りやうハ、聖興ちうたいさうてんの所りやうなり、しかるあひた、かなめうひめ御せんに、やうたいをかきりてゆつりわたすところ実なり、しゝそん〳〵にいたるまて、たのさまたけなくりやうちすへきなり、國かりやうけちとう米御くうしいけにおきてハ、かの田地にあたらんほとのふんけんによりて、そのさたをいたすへし、よてこうせうのためにゆつりしやうくたんのことし、

應安七年八月廿二日　　尼聖興（花押）

269

「伊久一流系圖」

伊久公三男

久照

字生黒丸　又稱北殿　又三郎　○法名道音

270

「正文有之」

譲与　生黒丸（久照）分

右、薩摩國山門院西方内三ヶ村、所譲与也、但、僧になすへき之間、けさころもの爲析足、はからひあつるところなり、もし弓矢をとり、在家のふるまいあらん時ハ、惣領生若知行（守久ノ字也）すきなり（ハ脱カ）、仍爲後日譲状如件、

應安七年八月廿九日　　伊久（花押）

271

『藤野家文書』

（本文書ハ二七〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

272

「伊集院圓通菴文書」

ゆつりたてまつる

さつまの國ミつゑのゐんのうちかまか(蒲)原村事 このうちさんやあり、

かの所におひてハ、くわんれうちきやうたりといへとも、

その心さしあるによつて、犬太郎母ニ一このあひたゆつりたてまつるところなり、他のさまたけなく知行あるへく候、たゝし一期の後ハ、犬太郎丸かはからひたるへく候、よて爲後日、ゆつり狀くたんのことし、

おうあん七ねん きのへとら 十一月廿二日

沙弥觀了(伊集院久氏)(花押)

「伊集院大隅守久氏譜中ニ在リ」

273

「羽嶋氏文書」

羽嶋浦の内よこすのしほやひとつまきの馬一年に一疋、そうりやう友豊の一期さりたてまつる、友豊一期の後ハ、とよまさり可令知行候、いくらの狀文候とも、禪惠の自筆自判なくハ、もちいられ候ましく候、仍爲後日狀如件、

應安七年十二月五日　　惟宗久成(花押)

274

「仝」

ゆつりあたふ　とよまさりかところニ

さつまのくにかこしまのこほりのうち、たけのむらはう〳〵のかとの事、

右の所領ハ、せんゑのゆつり狀ニまかせて、たのさまたけなくちきやうあるへく候、たゝし此内そしともニゆつるところあり、くうしの事ハ、ふん〳〵ニしたかて、きんししさせらるへく候、よてのちのためニゆつり狀くたんのことし、

應安七年十二月五日　　惟宗久成(花押)

275

『入來院氏文書』

薩摩國之内谷山郡・同國給黎院半分事

右、爲析所〻預申也、任先例、可被沙汰之狀如件、

應永七年十二月十三日　　久哲(伊久)(花押)

澁谷彈正少弼殿

(本文書編年ヲ誤レリ、六六七号文書ト重複ス)

276

『入來院氏文書』

祁答院内中津川名并黒木村事者、重茂雖爲由緒、依申談

子細候、避進所実也、仍爲後日之狀如件、

應永七年十二月廿一日　　重茂（渋谷）（花押）

清敷殿

（本文書編年ヲ誤レリ、六六八号文書ト重複ス）

277

『入來臣武光氏文書』

河縁殿知行分薗

すみとの丶要害きハより五郎大郎かその丶かきねまて一所

さこのその四ニわけて中二きれかハ丶たのふん

つたとの丶屋しきにしひかしにわけて、にしかハ丶たのふん

ゆあなの上さこのハりあまし、三郎五郎との丶にその丶わりあまし、ミやのうしろつたとの丶下人の今のやしきすみとの丶用寄下のにの丶われたふち計也、

くほのそのつたとの丶まへ一所、以上、

河縁殿分

『右ノ裏』

心賢　　應安七八兩年分早、

西入道屋敷、又太郎入道屋敷、道越有之、了心屋敷、彦九郎殿作宮の前、五郎太郎か屋敷、太郎か屋敷、津田屋敷、東より半分、さこのその四にハりて上下二きれ、此外荒野有之、未分、以上、

心賢分『末ナシ』

278

「正文在樺山源三郎久清」

嶋津安藝入道明見事、日向國臼杵院地頭職上稲左馬助跡事、雖令拜領御下文、未及施行之由、歎申候、可被經御沙汰候哉、隨分致忠節仁候之間、如此執申候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正月廿五日　　沙弥了俊

進上　武藏守（細川頼之）殿

「此書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

279

一永和元乙卯、北郷讃岐守義久築城於日州南郷、号都城、以居焉、

280

「國史　齡岳公　久哲公」

永和元年乙卯、是年二月改元永和、正月猶是應安八年、南朝天授元年、　野邊刑部大輔盛久、求日向國櫛間院・大隅國深河院北方教書、其舊邑也、春二月二十五日、　齡岳公爲盛久、致擧狀於齋藤六郎左

衞門入道、以告今川了俊、盛久、盛忠之孫也、（據野邊主計家藏系圖文書、野邊盛忠見第五卷建武四年、）二十七日改元、（據和事始、）日向人富山彦五郎□弘求富永・成清、其舊邑也、三月十一日、　齡岳公爲□弘、致擧狀於齋藤六郎左衞門入道、以告今川了俊、又求富山・安久・和里木・秋永等地亦舊邑也、二十三日、　公又爲之請、如十一日狀、（據齡岳公舊譜、據原書、富永・成清屬日向北鄕宮丸名、富山・安久・和里木・秋永屬中鄕、都城安久村有飛山、上長飯村有地、名今和里木竿、秋永在上長飯村、郡村高辻帳、安久村屬莊內南鄕、）　久哲公爲澁谷山城守重信、上擧狀於今川了俊、夏四月五日、了俊上諸執事細川武藏守賴之曰、此人於鎭西有功勞、宜蒙收錄、（據久哲公舊譜、）公爲島津下野入道道壹、（親忠法名、）上擧狀於了俊、二十日、了俊上之、如重信例、（據伊作家譜、）島津加賀守忠經（諸三郎左衞門尉、改稱九郎又改加賀守、）求谷山郡山田・上別府、其舊邑也、五月十日、　齡岳公爲忠經、致擧狀於齋藤六郎左衞門入道、以告今川了俊、（據島津支流系圖、郡村高辻帳、山田村屬谿山郡山田鄕、山田鄕有五箇別府村、）初一色道猷以安藝入道明見、（資久法名、）爲肥後山鹿莊尻無村・日向宮崎郡等地頭職、六月七日、　齡岳公爲明見、致擧狀於齋藤六郎左衞門入道、以告今川了俊、（同上、）秋七月十二日、今川了俊屯肥後菊池郡水島、（據久哲公舊譜、國分豊後守久成軍忠狀、應安四年今川了俊為筑紫探題、至是五年、引兵屯水島、蓋討菊池氏也、）移書召　齡岳公及大友修理大夫親世・少貳冬資、　公如水島、了俊大喜、往還益親、　公飲了俊酒、極歡而罷、了俊因使　公召少貳冬資、（據齡岳公舊譜、山田聖榮自記、）十八日、今川了俊上五月十日擧狀於執事細川賴之曰、此人於鎭西有功勞、宜蒙收錄、又上六月七日擧狀亦如之、（據島津支流系圖、）少貳冬資至水島、八月二十六日、了俊與之飲宴、酒酣、山內某搏冬資而仆之、今川金吾刺而殺之、使謂　公曰、少貳冬資貳於南朝、筑紫擾亂、職此之由、是以誅之、事之本末、當俟面陳、　公欲往、群臣止之、以爲恐效少貳、　公曰、不往、示之怯也、遂從本田二郎氏親・伊地知民部少輔季弘等數人而往、酒三行、了俊謂　公曰、少貳冬資貳於南朝、筑紫擾亂、職此之由、是以誅之、　公曰、既聞之矣、卽起而出、（據齡岳公舊譜、山田聖榮自記、續本朝通鑑、齡岳公舊譜、山內某作山內左衞門尉、今川金吾作今川左衞門尉氏兼、未知何據、山田聖榮自記、原文似言齡岳公往見今川了俊於博多、又似言今川了俊召少貳冬資於博多而殺之、然國分豊後守久成、獻今川了俊軍忠狀云、應安八年七月十二日、從至菊池水島、應安八年、即永和元年也、又久哲公應永二年、贈大友親世書云、往年探題詐召少貳冬資於水島、而殺之、又大日本史菊池傳、天授中今川貞世侵肥後、武朝將兵戰於水島敗之、尋遣菊池武國、破貞世之子仲秋于博多、南朝天授元年、即北朝永和元年也、（據此三者、則此年了俊在水島明矣、聖榮自記恐誤、然大日本史及續本朝通鑑皆言、永和元年、今川了俊與少貳冬資戰於肥後、卒殺冬資、又與聖榮自記及久哲公書不合、姑舍是、）親世、氏時之子、冬資、妙惠之孫、（據諸家大系圖、大友氏時、見上卷文和元年注、少貳妙惠、見第五卷元弘三年、）　氏親、重親之弟、季弘、季匡之弟也、（據本田信次郎・秋父十郎兵衞系圖、見文和元年、本田重親、見康安元年、伊地知季匡、見上卷、）十八日、今川了俊遣　齡岳公書曰、薦君爲筑後守護職、君其領之、（據齡岳公舊譜、了俊誘殺少貳冬資、公怒、了俊乃為此書以說之耳、其實公未嘗為筑後守護職也、說讀曰悅、）

公怒爲了俊所賣、欲與少貳族人共擊了俊、群臣止之、乃告絶於了俊而還、遂與南朝連和、（同上）九月十三日、今川了俊遺澁谷重頼書曰、若應幕府盡忠節、輙加賞賚、（據入來院主馬文書、渋谷重頼父重門死於峯城、是事南朝無貳者也、而是歳齡岳公亦應南朝、則重頼將與之合矣、故了俊誘之、使應幕府、）是歳、北郷讃岐守誼久築城莊内南郷宮古島、名爲都城、誼久、資忠之子也、（據山田聖榮自記、島津支流系圖、島津資忠、見第四巻文保二年、按文和元年、幕府賜資忠莊内北郷既而為相良氏所侵、遂喪其邑、延文四年、道鑑公賜之財部院、至是誼久復城南郷而居之、）

281

「野邊氏文書」

野邊刑部大輔盛久申、日向國櫛間院・大隅國深河院北方事、盛久相傳知行之段無相違候、安堵御教書所望仕候、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年二月廿五日　　越後守氏久（花押）

進上　齋藤六郎左衞門入道殿

282

「氏久公御譜中」

新納實久（第二代、後任越後守、）後有于志布志松尾城、十六歳之時、請氏久加首服任修理亮、且賜求仁院巳下數ヶ領地、號名代在其地、當此時也、畠山治部太輔自薩州山北發向志布志、構對陣、（後稱内城、）時實久發出石谷巳及合戰、實久之一族多遂戰死、然而居城堅固也、氏久聞此急、則欲爲後攻以救其難、發於麑島經於岩川到于其地、禮部豫謀知不勝乎、徒開陣退櫛間、夫地亦不得支、而退于飫肥、暫雖胥支而一陣巳破、何残黨得全乎、赴越於山東請救於伊東、亦不應諾、不得巳而向豊後退散矣、其後氏久以内城爲居處、迄于元久在于此地矣、實素以松尾城爲住宅也、

一族之中樺山氏・北郷氏者居于日州莊内、就中北郷七郎左衞門尉資忠、先是文和四年十二月十二日、充賜日向國北郷、領知其地、而後築都城（莊内）、居住者有年矣、有相良某者、領於肥後州八代・葦北・球麻、誇于武威、與伊東氏合心侵我領土、丁此之時、我之薩隅日三州中之御家人等背守護之命者六十有三人、屬于渠之旗下、與肥後三郡軍衆俱逼領土、巳迄于眞幸・北郷・野〻三谷、爲相良氏之用土、以本原爲本營、其將帥者新野某云尓、三州中逆徒者、谷山・南方・市來・澁谷・菱刈・牛屎・眞幸・肝付・根占・櫛間・飫肥・伊東氏・土持氏等也、自舊冬占要害地結陳柵而逼于都城、北郷讃岐守義久・樺山美濃守音久巳下勇鋭之士在城裏爲防禦者堅矣、爲救其急難、氏久自將發向於志布志、陣於末吉南郷西成寺之上天ヶ峯、于時所屬守護之將者、加治木氏・肝付氏・次男財部氏而巳、應安

六年正月之比、以神水之上、凝評議、定合戰、以三月一日豫爲一戰之吉日、而招於伊集院・伊作・麑島・大隅・下大隅・大姶良等之士卒、雖有此急、而師久父子隔于出水四ヶ所（和泉・高尾野・野田・莫祢）、山北四ヶ所（東郷・祁答院・入來院・高城）、之敵、不得加勢者也、於茲乎、氏久謂又三郎元久曰、速可歸志布志、元久曰、縱雖有他所宜馳至、況臨合戰之期歸私宅全一身、而如其悪聲何、氏久曰、元久之所言者勇士衆卒之所思也、爲大將者之慮不然、亡万卒爲一人、而全身以遂素意、此爲得其器量、艴然不悦曰、吾與汝其思慮天地懸隔也、又無更言矣、少焉、元久不得已而應我言、歸志布志者也、氏久父子深情智勇、候旗下所慮知之老輩勇士、一人而莫不落涙、就中本田信濃守重親者以後見異他人、且謂弟二郎氏親云、今度吾必可遂戰死、汝等全身仰元久主可抽無二忠節、今也其年十一而所報嚴親之旨趣如此、及壯年非名將而何也云云、同年二月廿八日、去天ヶ嶺陣末吉平長谷、同三月一日、財部騎歩相加增勢、雖然都以不足一千僅八百有餘也、月一揆大將者新納越後守實久、杉一揆大將者本田信濃守重親、又稱小一揆二百許從于氏久馬廻、是亦兩揆之中若有難儀、則横入謀慮也、去程旌旗之役（梶原イ）北原彦七郎前出曰、今日旌旗如何、重親答曰、可専懸通敵後、北原應諾、而指揚旗於馬上謂軍衆曰、今日各守此旗、可被進向平波瀬、已懸渡也、北郷讃岐守義久於城裏有言曰、今日者兼約相圖其期也、爲救吾之窮困、太守愛情諸軍勢若不可勝言（「苦カ」）、先一戰者爲我之役、率甲兵七十餘員、衝入于太敵中、雖然非利、而義久被傷於數ヶ所、舍弟彌二郎基忠・七郎忠宜雙冑遂戰死矣、爰平田新左衞門尉宗親・工藤藏人者、折庭上櫻枝挾己之腰、太刀打移刻、而後將退入于城中、同列勇士等共謂藏人曰、汝等似梶原彈正之花軍乎、且狂言、且戲笑、藏人曰、汝等不知吾乎、何可劣彈正乎、相共失笑而不止、又其後致合戰爲粉骨者越于人矣、氏久者著黒絲威鎧、加同毛冑之在鍬形、帶三尺有餘之太刀、駕黒栗馬之逸物、指揚旗於馬前、相從二百許騎歩、進月杉兩揆於左右矣、敵軍充滿蓑原、並轡扣以俟變、氏久不懼之、直前衝入于太軍中、各打太刀散火光不顧死挑戰、氏久在于此、不可隔敵兵、下知諸卒切通太軍中、扣馬於本原之偏面、或人夫或馬捕已下不得遁去、而涵溺于池水者多矣、城中勇士今朝之合戰負浅手者出於城門、加於氏久之軍、且攜入手負於城中、雖爲大勢敵兵懸立小勢味方、右往左往散亂、而精鋭勇士被討捕者多矣、翌日求死體於廣野、敵味方之僧法師互雜

亂于原野、其後所討捕之敵首爲實見於氏久之目前矣、他州敵首相良氏之弟氏賴・伊東六郎左衞門・同池尻五郎及薩州一揆長本澁谷右馬助等也、此外諸卒等者不違于書記也、爰有珍事、澁谷右馬助者有伊集院大隅守久氏壻之兼約、出陣已前右馬助使一价達久氏曰、與于國中一揆、將發莊内攻都城者有近、發向以前欲遂面謁、久氏報曰、我之太守氏久在彼境手干戈致軍勞者有日、由是愚臣等亦不日欲帶兵器赴其地、必參會向戰場、互以實見首宜爲佳會、右馬助聞此言爲褒美曰、返答之旨所以深耻也、其後到莊内、如其言果而實見于澁谷之首、嗚呼勇士一言一約何有不信乎、右馬助者捨一命備頸於實見、大隅守者其壻雖死敢不違兼約、以女子剃髪禪衣、而爲圓通庵之住持、是則右馬助之弔後世、爲頓證菩提晝夜讀經不怠云云、同三日、敵軍將引退而發出于蓑原、御方乘勝吾不後進出、已合戰移時、漸及日暮御方敗、而肥後兄弟其外數輩遂戰死、敵亦散亂向下財部引退畢、爰有石井某者、去朔日之合戰負深手、而存命不定之身在療養之床、問今日合戰之勝負於傍人云云、答曰、御方敗北而肥後兄弟戰死云云、石井聞此言歎曰、肥後與石井者、宛如飛鳥之有兩翼、今也絶於片翅、吾若雖生豈可經千歳乎、不如死再全羽翼於蓮臺、手自引破吾疵赴黄泉畢、今度兩日之合戰御方戰死之勇士、北郷彌二郎・同七郎・本田重親・肥後兄弟・石井・旌旗役人北原彦七郎・大姶良・完目藤藏其外諸卒若黨已下不及書記、重親者不違於前日之一言遂戰死、氏親亦蒙疵者七ヶ所、雖然平復矣、爰加治木某者既被切伏、物之具以下盡雖剝取、未得切頸捨置于諸卒死骸之中矣、戰止而後、味方攜來而加療養幸免死焉、迄後年彌抽忠功者也、爰氏久厩中有稱墨足黒(スミクロヒツグロ)之良馬、預置山田右京亮矣、去朔日之合戰右京亮雖被傷、不深傷、故同三日、亦發向戰場、下馬振威提三尺向強敵、盡筋力以挑戰、又被傷者二三ヶ所、故不得歩行欲求馬駕、而敗軍戰場紛亂不知其所、勞苦以到我陣、翌且渠之中間牽件馬來曰、昨晩御方敗走之際捨馬於戰場、與亡主人者俱向財部逃去矣、彼馬及深更尋我所來、以故就驢尾得參候、不知宥我罪乎否、右京亮告其故於我曰、念以名馬如斯乎、即返上、氏久曰、唯以體之具衆善不稱、以心善爲名馬、稱今度軍功抽賞、直畀右京亮者也、

283 「二代北郷讃岐守義久譜中」

永和元年乙卯、築都城所以移居也、

284

永和元年乙卯、天授元年、三月十一日、廿三日、齡岳公就齋藤六郎左衞門入道、爲日向人富山彦五郎義弘、請以其傳領之地達將軍家聽、有御沙汰、

285

「正文在都城衆富山外記」

日向國富山彦五郎義弘申、島津御庄日向方北郷宮丸名内富永・成清等事、相傳之段無相違候、仍京都御吹擧所望仕候、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年三月十一日　　越後守氏久(花押)

進上　齋藤六郎左衞門入道殿

286

「此二通氏久公御譜中」

「正文在喜入衆志々目正兵衞義辰」

日向國富山彦五郎義弘申、島津御庄日向方中郷富山・安久名・和里木名・同秋永等之事、相傳之段無相違候、仍京都御吹擧所望仕候、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年三月廿三日　　越後守氏久(花押)

進上　齋藤六郎左衞門入道殿

287

『藤野家文書』

來廿七日可罷立候、如何も(ニ脱カ)山通可然存候、其期は隨躰候て、次日山よせニ陳を取候ハヽやと存候、如此事、兼日に披露候へは煩候間、山鹿に通候て、安入ニ陳をとるへきやうニ披露仕て候へとも、山よりにしかるへき陳をミたてさせて候ほとに、大村領内雄高邊ニ、明後日ハ打寄候て、やかて山よりに罷通候へきよし存候間、いかさまこなたとほりを御出可然候、諸事安入ニて可申談候、如此事、御心へたるへく候、又此邊事、了簡仕候、子細候間、中〳〵うちすてゝ可罷立候、たゝし黒木邊物共ハ、皆〳〵めしくし候へく候間、可御心安候、尚〻道つかいの事ハ、郡春とほりよく候へく候、同候ハヽ、御共申へく候、ていにしたかひ候て、陳をとるへく候間、申候、相構〳〵御披露ハあるましく候、恐〻謹言、

『永和元年カ』(応安八年)三月廿五日　　了俊(花押)

(伊久)嶋津殿

288

『在伊集院大隅守久氏譜中』

當參尤神妙、弥可被致忠節之狀如件、

應安八年三月廿七日　　「今川伊予入道了俊」『譜中此片書ナシ』沙弥(花押)

「伊集院家五世久氏」（久義）
嶋津大隅守殿

289

「氏久公御譜中」

「正文在喜入摂津介」

先日計申候析所事、若相違之時者、可致別沙汰候、聊不可有等閑之儀候、兼又寄田村牧事、以別儀預申候、恐々謹言、

卯月二日　　氏久（花押）

（上書）
執印殿　　氏久

（本文書ハ二五五号文書ト同文ナリ）

290

「正文在渋谷如兵衛重増」「此書伊久公御譜中ニ在リ」

薩摩國澁谷山城守重信申訴訟事、當國守護島津上總介伊久執申候、仍捧擧狀候、謹進覧之候、可被經御沙汰候哉、於鎮西致忠節候之間、如此令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年四月五日　　沙弥了俊（花押）

進上　武藏守殿
「執事細川武藏守頼之ノコト也」

291

「比志嶋氏蔵」

比志嶋河内守久範申

薩摩國滿家院内十參町名主職事、本領當知行無相違候、彼仁於御方忠節之段、無異于他候、仍望申京都御吹擧候、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年卯月十四日　　上總介伊久（花押）

進上　御奉行所

292

「伊作親忠譜中」

嶋津下野入道道壹（親忠）申訴訟事、薩摩國守護人嶋津上總介伊久執申候、仍捧擧狀候、謹進覧之候、可被經御沙汰候哉、於鎮西致忠節候之間、如此令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年四月廿日　　沙弥了俊（花押）

進上　武藏守殿（細川頼之）

293

「伊作親忠譜中末紙、右文書ノ次ニアリ」

六月二日死去、法名道壹、號天南、

294

「載山田譜」

嶋津山田加賀守忠經申

薩摩國谷山郡内山田・上別府事、譜代相傳之段、無子細候、仍京都御吹擧所望仕候、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年五月十日　　越後守氏久(花押)

進上　齋藤六郎左衞門入道殿

295

「正文在樺山源三郎久清」

嶋津安藝入道明見申「樺山安芸守資久入道明見ナリ」

肥後國山鹿庄内筑後守賴尚跡、同國尻無村・日向國宮崎郡内戸次丹後守跡地頭職事、帶　將軍家京都御吹擧所望仕候、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年六月七日　　越後守氏久(花押)

進上　齋藤六郎左衞門入道殿

島津安藝入道

「上包」進上　齋藤六郎左衞門入道殿　　越後守氏久

「此御書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

296

「正文在文庫」

「藤野氏文書」

五月十三日御札委細承候了、抑如仰、雖無何事候、速ニ可申承候之處、今河了俊以下凶徒、當國山鹿・志〻木原依取陣候、無盡籌策計會云、御在所遠國之間、路次不輙云、無其儀候、背本意候、此堺事、先度者當國〻人大略令組御敵候、今度者無殘所御方候之間、他國勢縱雖大勢候、對治不可有幾候、筑後事、依　御所御座候、國〻仁等申通子細等候、彼云、是云、合戰勝利不可有子細候、就其候、其堺事被致御計策候、凶徒御對治候者、今時分一勢御合力、就公私可目出候、兼又　公方吹擧事、不可有子細候之處、御使不待其左右、被通　御在所候之間、不及申沙汰候、每事期後信候、恐〻謹言、

「永和元カ」(天授三年)六月十日　　藤原(菊池)武興(花押)

謹上　嶋津上總介(伊久)殿　御返事

297

「正文在文庫」

『藤野氏文書』

(本文書ハ六〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

298

「正文在樺山源三郎久清」

「此書樺山家元祖資久譜中ニあり」

嶋津安藝入道明見申訴訟事、嶋津越後守氏久捧擧狀候、謹進覧之候、可被經御沙汰候哉、於鎭西致忠節候之間、如此執申之候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

永和元年七月十八日　　沙弥了俊（花押）

進上　武藏守殿（細川頼之）

「上包」進上　武藏守殿　　沙弥了俊

299

「山田譜」

嶋津山田加賀守忠經申訴訟事、嶋津越後守氏久捧擧狀候、謹進覧之候、可被經御沙汰候哉、於鎭西致忠節候之間、如此執申候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

永和元年七月十八日　　沙弥了俊（花押）

進上　武藏守殿（細川頼之）

300

『末吉士羽島氏文書』「伊久公御譜中ニ在リ」

薩摩國御家人國分豊後守久成申軍忠事

右、於國致忠節之段、守護人嶋津上總介伊久度〻令注進之間、達御上聞畢、隨而去年應安七年自十二月久成令當參谷河御陣之時分、數日令在陣旱、『即永和元年也、三月二日改元ナレトモ未達ナラン』同八年四月八日肥州日置御陣『此陣ニ伊久公モ御参陣コレアリタルナラン』被召之刻、御共仕、同七月十二日菊池水嶋御陣被召之時、抽忠勤之条、無其隱、然早於于國、云戰功當座、云忠節、且預京都御注進、且下賜御判、爲備亀鏡、恐〻言上如件、『応永記ニハ小弐冬資於水島被討申候云々アリ』

永和元年七月　日

承了（今川了俊）（花押）

301

（花押）

田所永穩万善・曽恒見・東恒見三ヶ所已令知行、不進上御年貢等抑留候条、何様事哉、猛悪之至以外次第也、嚴密加催促、可被執進也、若猶令難澁者、可有嚴密御沙汰之由、可被□所被仰下候也、仍執達如件、

永和元年七月十八日　　法眼朝実

法眼定禪

謹上　正宮留左衛門（守脱カ）入道殿

302

「肝属河内守兼氏譜中」

永和元年乙卯、南朝天授元年、七月、鎭西探題今川伊豫守貞世入道了俊、將陣肥後、菊池、徵兵於　定山公　齡岳公等、八月十一日、

了俊會　公於水島、菊池、小貳冬資不來會、了俊使　公徵之、冬資乃來、二十六日、了俊令賊殺冬資於水島、二十八日、了俊僞薦　公、代冬資爲筑後守護職、以徵　公、公欲行之、從臣曰、勿往矣、　公曰、不往怯弱、少隊赴之、伊地知民部季弘・本田二郎氏親等從、衞卒固門、不得從内、氏親持太刀堅請内之、季弘亦續、於是　公會了俊及今川兵部大輔滿範、一説範氏、乃享　公酒、滿坐惴慄如意狙　公、了俊且告曰、小貳猾邦故討平之、扈酒三行、公乃起歸客舍、留書還國、書曰、　幕府命　島津・小貳・大友鎭九州久矣、今招冬資欲共竭忠、却賊殺之、豈得不耻乎、

303

『南山巡狩録』

後亀山院天授元年乙卯、北朝永和元年、

八月小、

廿六日、肥後國に於て、太宰小貳冬資、今川伊豫入道了俊と相戰ひ、終に討死す、花營三代記、廿九日(八)、嶋津越後守筑後の守護となり、時に嶋津は京方なりしかハ、今川了俊か許に書を贈り、武家の古實を尋ね問ふ、了俊か返簡に曰、錦のひたゝれは先祖一代ゆるしを蒙れは、子孫永く是を用ひ、白旗ハ其陳に一流に限るへしとなり、島津氏古文書、　○世に今川了俊か大草紙といふ書ありといへとも残闕なり、本文にしるせし条目は、今傳ふる所の大草紙に逸せるや否、いまた其詳なるをしらす、

304

『藤野氏蔵』

今日吉日候之間、令申候也、

今夕罷出當陳候、肥後菊池ナルヘシ、即可申候之處、期明日之參會候之間、遲ゝ仕候き、抑にしきのひたゝれの事承候、先祖一代御免候へは、子孫相續無相違事候、尤御用ハめてたかるへく候、可存其旨候、御旗事ハ、其陳ニ一流之外、不用事候間、御所持まてたるへく候、如何様御ひたゝれの事ハ、殊ゝ可目出候、心事入見參可申承候、恐ゝ謹言、

『永和元年ナラン』八月十日　　了俊(花押)『今川』

嶋津越後守殿『氏久公』

305

「藤野氏文書中」

「引返シウラニ」「やく人の注文　たちはき　すいひやう

やく人いてたちのちうもん」

一たちはき(帶刀)　よろいひたゝれニわきたててかいすへし、ゑほうしかけ、よろいひたゝれハねりぬきむもんのあやたるへし、

わかたう一人　ゑほうしかけ、一すまたら、ひたゝれきへし、ねり大口、
ちうけん一人　かちんのよろいひたゝれに、はらまきてうとかけ、あかゝへのゑほうしかけ、
ひたゝれきのちうけん五人
わかたうのちうけん二人内一人ひたゝれきてうとかけ
一すいひやう「随兵」　よろいひたゝれによろいをき、ゆみそやたち「征矢」をたいすへし、ゑほうしかけ、たちはくろさくとう、金銀の類ヲとゝめらる
かいそいのわかたう二人「介添」　ひたゝれきへし、わらうづはくへし、ゑほうしかけ、
やく人のちうけん四人　ミなよろいひたゝれかちん、あかゝへのゑほうしかけ、ぬの大口くゝりをあけ、はゝきをし、わらうつをはくへし、
そのほか中間三人たるへし、　やく人にしやうそくハをなし、
まやのもの「厩」二人よろいひたゝれをなし、
かいそいのわかたうのたちもちをの〳〵中間一人ツゝミをくりてそふへし、

306

「正文在樺山源三郎久清」「此書樺山氏元祖資久譜中ニ在リ」

日向國臼杵院地頭職上椙左馬助跡事、守御下文之旨、可被致沙汰之狀如件、

永和元年八月十一日　　沙弥（今川了俊）（花押）

「考按」永和元年八月、氏久公今川了俊ニ肥後水島ニ御参会ノ時ニ供奉ノ注文アレバ、前ノ八月十日了俊狀ノ次ニ入ヘシ」

嶋津安藝（資久）入道殿

307

「比志嶋氏文書」

ゆつりわたすひしゝまの孫太郎久範所に薩摩國いしうゐんの内中河名六町、同敷中山田一町居屋敷分、麦生田内はいらく、おなしく前原、此内水田少あり、ならひニ神殿内柳田一町、彼地おいてハちうたい相傳所領也、しかれハ代〻安堵御下文手付狀あいそへて、一紙ものこさすゆう子（翁子）として、ひしゝまの孫太郎久範ニ、永代をかきてゆつりわたす事実也、もしそれかしか子孫といふ物出來、違乱わつらひ申とも、彼ゆつり狀ニまかせて、しさいなく地（知）行せらるへき也、仍ゆつり狀如件、

應安八年八月十一日　　善喜（俗名時光）（花押）

308の1

一宰府越前殿「口切ナシ」方へ音信あるへく候、使者ハ久富たるへく候、若酒勾新左衛門上候ハ、是を可被遣、「明徳四年六月十一日、元久公より志和氏ニ遣ハサレシ御書ニモ、酒勾新左衛門入道令進云〻トアリ、同人ならん」「石塚氏カ」

一兵衛佐對面事、種玄に申つけらるへく候哉、是にても中務入道に談合候て、可被計候、

一菊地「肥後守武光ナラン」、若犬追物「笠掛ナト」其外の弓矢の事物射候様なんど尋申候ハ、、「師久公ヲ指シ玉ナラン」おやにて候者ハ、すこし物をも仕候へとも、我「伊

ら事ハふたん合戦候間、けいこ仕たる事もなく候、おうかた存知せす候よし仰らるべし、かやうに被仰候者、おくゆかしく候へく候、物の一も申おさ□ニて候、また尋候時、別事ともしられすてハ、はぢたるべく候哉、

一今ハ御へし者在ゝ存とも、若犬追物被射候へなんと申候ハ、、かたくしたい候へく候、手負候て後ハ、更〳〵弓をよくも引立す候よし可被仰候、

一越後殿と若寄合候ハ、、さか月の事始度ハ、つよくしきたい候べし、其後ハ酒月こなたにとらるべし、代ゝすこしもかハりそを候、大方ハこしもますくて候へハ、つよくれいをせられ候する事しやうきたるへく候也、

一若菊地と寄合候時、車内八郎殿よハるゝ事も候ハ、、床敷に候とも、大方のしきたいハ候へし、是にてのことくつよくハ候ましく候、やとに人も候ハで寄合れて候時ハ、これにかハりめ候ましく候、大方にてハ心得られ候へく候哉、

一被上候する路にてあハひよく候とも、追出犬いられ候ましく候、まして人の家ちかく候所にて、犬なんどいられ候ましく候、

一菊地、同はかたの宿にての振舞、これらにてのごとく、殿原とうへしたもなく、うたひとしめき、くるハるゝ事候ましく候、かへこられ候ましく候あいた、御酒へふたん人も見候とおもハれ候て、身を直せらるへく候也、

一高城小太郎、若對面し候ハんと申候ハ、、於國おやにて候者と御ふくわいの事にて候間、入見參候事、所存に御かゝり候よし可被仰候、

一御つかい定可來候、其時者もてなされ候て、よく〳〵あいしらハれ候て、御本領入部候時者、可承候、雖不甲斐候、可合力申候、若御下も候ハ、、同道可仕候、於國子細候ましく候よし、よく〳〵物語候へし、

一若菊地宿へも來候ハ、、庭ニ出合れ候へし、立候する時も、庭まて可被出候、下ハ咄候へとも、小櫻のよろいひかれ候へし、當座にて候ハすとも、後にをくられ候へし、若さしきにて出され候ハ、、久富と弥二郎に云人総州家ニアリ、応永記ニ見ユかゝせらるへし、上手久富たるへし、よろいハうしろをかき候が上手にて候、よろいをまいらせ候時ハ、そハニハおかす候、前にをき候よろいをかきて、前にをき候時ハ、下手かきて候、物引候人の前にちかつき候、あまりハちかくよらす候、すこしとをくおき候て、そ

バへなをり候て、主の前へをしよせ候也、赤星おりて『御出』候ハヽ、馬ひかれ候へし、上野ニ引せられ候へし、若とんせい物候ハヽ、小袖一『通世』とらせられ候へく候、それハ後にやられ候へく候也、諸事あれにてのこしつハ、『菊地水島ノ御陣ヲ云ナルヘシ』『故実』種玄に申合られ候へく候哉、恐々謹言、『石塚大和入道』『六代上総介師久公御法号』

『永和元年乙卯ならん』八月廿七日　道貞(花押)

308の2

「伊地知季安右御書ノ考」

此御書ハ、永和元年　氏久公今川了俊ヲ肥後菊池水島ノ陣屋ニ訪玉ヘル時、　師久公ノ御嫡子伊久公モ參津シ玉ヒツラン、其時　師久公ヨリ進セラレシ御書ナルヘシ、氏久公ノ行キ玉ヒシ事ハ聖榮自記ニ委シケレド、　師久公ヨリノ事ハ見ヘス、但聖榮其年月ヲ略ス、室町記ニ年月考ラルヽ也、○永和元年八月廿六日午尅、今川了俊、小貳冬資ヲ肥後ノ陣中ニ殺セシコト室町記ニアリ、此時氏久公モ參陣セラレタルコト聖榮自記ト合フ、然トモ氏久公ハ冬資カ變ヨリ俄ニ歸ラセ玉ヒシト見ヘレハ、伊久公ハ右ノ通　師久公ヨリ仰出シアリシカトモ、　氏久公ノ歸リ玉ヒシヲ聞召、參陣ナカリシモ知ベカラス、

309

「應永記之内伊久公御案文ニ有之」

肥州託麻原ノ御合戰之時ハ、舍弟三郎左衞門尉・新納ノ左近將監御目之前ニ而討死仕候、ケ様之忠節掛テモ、被思召寄御氣色モナク、小貳冬資事者、九州三人之可爲親眤之由享御意処也、已ニ於水島被討申候、依其恨、歎之顔色薄面目罷成、在國仕候云々、

310

『大日本史足利義滿傳』

天授元年秋、今川貞世與少貳冬資戰、殺之、花營三代記

311

「室町記巻三」

永和元年乙卯八月廿六日午尅、於肥後國軍陣、太宰少貳冬資爲探題今川伊豫入道被誅之由、使者到來、

312

『日向記巻三伊東祐重世傳』

永和元年乙卯九月七日、肥後國水島御陣御開、肥前國横大路松崎城之御引足、兩度於塚崎致宿直云々、

313

『在秩父本田調書』「正文在文庫」

筑後國守護職之事、所擧申京都也、守先例、可被致沙汰

之狀、執達如件、

永和元年八月廿八日　　『今川伊予守貞世入道』沙弥（花押）

嶋津『氏久公』越後守殿

「氏久公御譜中」

九州探題今川伊豫守貞世入道了俊曰、九州三人之警固于今遲參不可然、早可有在津、或以雲翰、或以使節、因茲氏久博多進發之爲支度而已、依爲遠國、用捨多勢撰輕鋭士卒相從、無猶豫上著博多也、已遂參會、而探題之喜悦顯于面上、其後參會及度〻矣、有時了俊入御于氏久之旅館、且賜樽酒、其大筒之口不拔而無興之至也、了俊供奉人々亦指寄々々欲拔不能、於茲氏久曰、有誰人否、皆以斟酌不能出、爰有牧次郎三郎者、唯一人前寄于大筒之傍、覆素袍之袖於筒口、挾腋有暫時則筒口拔出、酒氣座中散亂、此間座中上下之屈氣不覺同時發聲、是又爲當座之興、一老遁世等衆口之褒美不可勝言、氏久之家人等亦召席末、賜盃酒催佳興畢、彼牧二郎三郎・同又二郎者古來之者也、其比小貳筑後守冬資、無宮方將軍方之分別、非無所疑、故探題謂氏久曰、小貳參津之催促宜有此時云云、依之已通於參扣之催促、小貳卽以參越候于探題之旅館、得遂對面、是又雖爲誅戮於冬資之籌策、不能口外、造立於陣屋、塗高屏設門戸、稱小貳馳走之支度也、三獻既過、及數盃之亂酒、候配酌之役山内左衞門尉、押掛組伏如元來議定、今川左衞門尉氏兼了俊子息、進寄刺殺畢、雖然門戸出入制禁堅固、故敢無知者、漸及人口雖有風聞、供奉之家臣等無有討殺主敵志者、且又後日無殉死者、可謂無云甲斐、在津人々漸々傳聞、周章奔走、而入于探題之陣中、又遲參之人亦有之、少焉、了俊令使者告于氏久、爲鎭西探題職、雖下著于當國、小貳異意之故、難成九州之靜謐、動宮方蜂起在冬資之謀計、所以爲凡誅也、委曲以參會可演說云云、氏久聞之、卽欲至于探題之宿所焉、供奉之家人等相議而諫曰、見前車之覆爲後車之誡、今若得彼之宿所者、豈可免小貳之戮乎否、氏久曰、往不訪則臆病之至、且何人口如哉、縱雖往亦何難之有乎、若帶干戈者、宜似驚動、只太刀帶之、任恒例本田二郎氏親從之、而先氏久以步行、其外競前後令守護、見人無不飜舌、漸到于陣門、則居警固加制禁、先本田氏親前入、次伊地知民部少輔從入、警固之族曰、多勢狼籍也、氏親曰、公門之制供奉、亦當依時宜、氏久退出之後者遮莫、其間可有免許云云、此外之供奉人候于門外、陣屋出入之口以唐莚爲帷帳、氏

親不憚進于戸外窺見座席、則請待氏久、而今川殿兄弟兵部大輔範氏其外宗徒人〻伺候、盃酒三獻過、則今川殿被談説件旨趣於氏久、氏久曰、承畢、又更無言、而即退出者也、

氏久歸于旅館曰、招小貳之一族、可凝評議廻探題討殺之籌策、雖然供奉之家人等致群議、而深諫止之、故菊池并小貳之一族通同意之眞儀、可爲歸國治定也、雖然無其屆、而令歸國者、却而對于　大樹可爲緩怠欤、且於向後亦豈不越度哉、於茲封一翰贈探題、其詞曰、今度在津之段、度〻依蒙仰、早速馳登畢、雖致在津可抽忠功之爲存念、小貳冬資不糺其罪、已如此、則九州警固之三人、共所以失面目也、且又於氏久者、不知了俊之僞言、通冬資在津催促之旨、信其言冬資已參津之刻、被誅戮之條無其隱、是氏久之所以厚痛也、當座恥辱更無所逃、故解歸帆之纜者也、

315　『入來院氏文書』

氏久加凶徒上者、別而致忠節者、可被忠賞、仍一揆同心、可被致忠節狀如件、

永和元年九月十三日　　沙弥（今川了俊）（花押）

澁谷虎五郎（重朝）殿

了俊

316　「越前島津氏九代範忠譜中」

「包紙」澁谷清敷殿

嶋津周防五郎左衞門尉範忠申、播磨國布施郷公文職事、任亡父忠兼所給貞和二年六月廿一日御下文、可被沙汰付忠兼跡之狀、依仰執達如件、

永和元年九月廿二日　　武藏守（細川頼之）（花押）

赤松藏人左近將監殿

317　嶋津周防五郎左衞門尉範忠申、播磨國布施郷地頭職（岩間四郎）左衞門尉跡事、任亡父忠兼所給貞和五年七月二日御下文、可被沙汰付忠兼跡之狀、依仰執達如件、

永和元年九月廿二日　　武藏守（細川頼之）（花押）

赤松藏人左近將監殿

318　嶋津周防五郎左衞門尉範忠申、播磨國布施郷下司職等事、任亡父忠兼所給觀應二年正月廿四日御下文、可被沙汰付忠兼跡之狀、依仰執達如件、

永和元年九月廿二日　　武藏守（細川頼之）（花押）

赤松藏人左近將監殿

319 『入來院氏文書』

於肥後國八代堺、致忠節云々、尤以神妙也、於國弥可抽軍功之狀如件、

永和元年十一月十日　沙弥（今川了俊）（花押）

澁谷虎五郎（重範）殿

320 『入來院氏文書』

（本文書ハ三一五号文書ト同文ニツキ省略ス）

321 『仝』

（本文書ハ三一九号文書ト同文ニツキ省略ス）

322 『聖榮自記』

探題より度々ニおひて被仰下趣ハ、九州三人之警固たるニ付、無音不可然、早々在津候者、諸事談合可被仰旨御注進及數ヶ度、探題職ニ有下向延引之条、可爲仁儀ハ緩怠之至と而、氏久御上ニ定早、遠國なれは御勢ハさほとなし、宗との御内之人計なり、六ヶ國江御上探題ニ有御對面、今川殿之御奔走被悦喜、殊御感望も見得候、其後ハ不断御寄合折々有、探題氏久之御宿ニ御酒を持せ御入候けるニ、大筒之口手ニ餘り更ぬけかね候、御前之事ニ候得ハ、今河殿之御内よりも指寄〳〵ぬかむと候へ共、了簡もなく候半ハ不興候處、氏久誰か〳〵と御意候なから、何も斟酌候、爰ニ御内に牧野次郎三郎參、一人ニてなをさぬ筒之涯ニ寄、素袷之袖を筒ノ口ニをしおほひ、脇ニかいこみ一しめ、暫あれはふたぬけ、御酒いきおひなれは寔ニあかり、御座敷散々こほれ、上下氣をせめこらへ候事ニ而、一度ニわつと聲を立、中〳〵當座之曲と成而、遁世者なと時々褒美不及申、嶋津殿御内旁之御前ニ而盃を給候、ヶ様之事迄も御家之非規模哉、牧二郎三郎・同又次郎何も當家御年比之仁也、其比小二方將軍方共なく、探題ゟも氏久江催促候へかしと、依御意候半と御音信候處、小二方探題有冬資討れんたくみ、更大儀之子細なれは、人口ニ不及候、陣屋を結構ニ作、高屏を塗城戸を立、奔走と見へけるに、小貳方を御しやうより、いつもの御會尺有、三獻過、其後數盃ニなれハ、酌ニ立山内押懸組、本ゟ儀する事なれハ、今河金吾指寄指殺る、是程之たくミ之事候間、城より外ニも番衆堅候へハ、小二

323

『聖樂自記』

方供之者一人として腹を切者なし、無覺語とも不及言候、探題御座所へ參する人も有、未聞分遅參する人も有、

軈而嶋津殿へ使者を以今河殿ゟ被仰趣ハ、鎮西探題職を預下向候得共、彼方さゝへニ依而、九州之靜謐を遂かたし、動ハ宮方物云となる、毎度ニ依及如此之沙汰仕候、御心中如何ニ候、參會面を以可申開之由被仰遣、嶋津殿御内人〻、差寄思〻ノ吳見は、探題へ御座候事ハ不可然、二舞覺悟之前ニ候、御思案可入次第ニ候と各被申、氏久仰ニハ、不參ハ當座之越度ニ可成、何程之事か可有と、則御參候處、物具なとハ驚ニ似と而、各取太刀計なり、爰本田氏親何もの恒例と而、御はかセ持御前ニ立、何も〳〵前後覺悟与所ゟハ無事ニハ不見得、時之人〻舌をふりける也、陣ノ城戸なれは竹かうしなり、堅警固す、仍氏親先前ニ立入、次ニ伊地知民部續而入、門かため狼藉のことに候と咎、其時折節ニ寄事ニ候、嶋津殿たゝれ候而後ハ可爲御計、其間は此方仕第と而、氏久を入被申、奏者と同氏親前ニ立、跡之傍輩込入御制止あれは、城戸涯ニ祗候、陣屋之口ニハ唐莚を掛られたり、簾之渥ニ不憚氏親居たり、座敷を見れは、今川殿御兄弟宗徒之人〻、しかと祗候有、嶋津殿御座敷へ御直、御式躰御會尺有、御酒三獻過而、今河殿ゟ之御意趣一〻被仰聞、氏久承候と而、軈而座敷を御立候へ共、無事とは不見得、何とやらん、外目ニハ立ける也、御宿ニ御歸候而、俄ニ小貳方親類之所ニ有御音信、可及對面旨御内之人〻ニ御談合有、意見被申ハ、是ニ而事を御破有ハ不可然、只急ニ國江御下可然由各依被申、尤と而小二・菊地ニ同意之有内儀、下向ニ定候處、無篇ニてハ如何、於已後も不可然と而、探題へ訴狀を以、今度在陣之段、度〻依蒙仰、早〻馳上、可致忠節存候處、小二方如此之御沙汰ニ罷成候時ハ、九州三人失面目次第候、其上氏久任御意、彼方ニ催促申通候事無其隱、此時ハ當座之耻辱難遁處候間、薩州江罷下と而、今河殿江仰捨御下向候、軈而宮方蜂起可有物言共有、又人〻之上ならすと云人口も有、九州破んとす、探題兎角方便を通、暫年月を送と云共、終ニ御叶候ハて上洛候得共、御前之御意悪候て、分國遠江江御下之由承傳候、氏久其後管領御方迄御意趣悉依被申上候、還而上聞ニ御叶、當御代ニ及迄も大慶御座候、氏久御幼少之時者、親之御名代として肥後國迄御上り、名誉之御合

戰數ヶ所之御手負御難儀之処、『筑前金隈合戦ナリ』伊地知御身ニ替、嶋津氏久と名乗打死するに仍御助り候、御年長ヶ、今度之在陣ニハ、儀を重、家之嗜ニ依而命輕する所、當座之難儀をも御遁候哉、御内之旁ノ志振舞、小二方ニハ不似と、六ヶ國ノ物語ニ成ける由承傳候、於于今も嗜油断有間敷候、

324

「見伊作大隅守久義譜中」

對南方別府某有宿意之未散、故廻欲誅伐之籌策、發軍勢不以時、正月元旦、發於伊作、別府之内以稱鵜塚之地構一陣、未施帷幕、城裏之軍勢不移時尅發出來、而却而責久義之陣、久義以無勢故不得進退、徒經數日而已、於茲太守元久公使一价爲制禁、故令開陣畢、又田布施二階堂某者久義之姉聟也、別府亦二階堂之爲聟、是以今度不合力於久義、故久義發憤、欲報恨於二階堂、而告之於太守、太守亦慮後之有害也、應久義之請、且又太守構陣營於田布施、周圍攻責者太急也、二階堂不得防禦爲降伏、向市來没落畢、委曲記元久公譜中者也、

325

「載伊作久義譜中」「正文在手鏡トアリ」

御札之旨、委細承候畢、如仰連〻可申承之由、乍相存、御在京之間、無其儀候之處、御下向、就公私悦入候、抑加世田別苻御拜領、先以目出度存候、將又、使節間事、不甲斐候之間、雖可申辞退候、御方様御事候之間、今度者可隨仰候、仍御施行案文給置候了、正文者令返進候、巨細令申御使候了、毎事期見參之時候、恐〻謹言、

九月二日　　沙弥定圓（花押）

「充書無之」

『按ニ、渋谷家四代新平次重基沙弥定圓とあり、入來院氏譜中花押ニも似たれは、注して考を俟つ』

326

「見伊作久義譜」

別苻はんふんの事

一たうはう（唐坊）の内さかりまつ、こミなとこひちをさかふへし　一たけた

一つぬき（津貫）　一いて

一おうらはんふん　一のまかたわら

一やまたはんふん　一上下ふん

一ちとうしよいちをくわへたる定

一宮寺のこさす

一田の〳〵

へふはんふん、いさくとの〻御ちきやうあるふんの事、

たうほんの御たいくはんの時、しるしおかれて候ほん、

永和元年丙辰十月一日、これをしるす、

327

伊作家三代 親忠 ― 四代 久義 ― 五代 勝久

久親

犬若丸　大隅守　大隅守

號若松

328

「載于伊作久義譜」「正文在巻本」

一日預御狀候条、于今悦入候、抑奥州(元久)上洛事、無是非治定候由、度々以兩使承候間、貴方様にも同前被申候哉、隨而我々間事、奥州參洛候ハんするにハ、在國事かつけ事、無方便候間、上意憚存候、誠奥州參洛候者、就諸事雖難叶候、被上候ハて者、難義至極候、か様大綱各申談候、進水平入道候、愚意条々此仁申含候、定可令申候哉、不残御心底、此御返事承候者、本望候、恐々謹言、

九月十六日　　伊久(花押)

伊作(久義)殿

329

久豊

號南殿　次郎三郎　修理亮　陸奥守

永和元年乙卯、誕生於鹿兒嶋、御母佐多三郎左衞門尉忠光女也、

330

『藤野氏文書』

去月十七日御狀、今月十二日到來、委細承候畢、抑其方様御事、屬無爲候、仍可有御出津之由承候、先以目出候、定探題悦喜申候哉、則彼方御返狀、付遣之候、兼又、京都御禮御申事目出候、隨而代官安治方ニも、種々拜領候之由申下候、不思寄事候、乍去御懇志之至恐悦候、尚々恐入候、雖不甲斐〳〵候、自然之時者、可立御用候之旨、申付候、將又、筑後(筑後)凶徒對治事、去月廿二日、馳渡長田河候、於溝口及合戰候、則時打勝候、仍菊池武朝家僕等以下三百餘人討取候了、其身事者、具足切捨候、落散候、當日肥後山鹿ニ罷着候、其後取籠菊地陣城候之間、自是差遣一勢候、又貞公致籌策(了俊ノコトナラン)候之間、依難堪忍候欤、今月七日捨在所、山中ニ逃籠候、於今者無差事候、其段先日りよ阿弥陁仏申候、遁世人被參之時、委細令申候、定參着候哉、尚々京都事無御等閑之様、連々被申候者、尤可目出候、他事併期後信候、恐々謹言、

『永和元年カ』十二月十三日　『大友』親世（花押）

『右ノ書ハ、伊久公ニ進セシ書ナルヘシ』

331

『藤野文書』

（本文書ハ一二一号文書ト同文ニツキ省略ス）

（表紙）

氏久公　自永和二年（即天授二年也）
伊久公　至永徳三年（即弘和三年）

前編　舊記雜錄　巻廿九

332

『池端文書』

譲与　子息別當丸
大隅國祢寢院佐多村内田薗等事
副渡　関東御下文六波羅御施行鎮西御下知并手継以下
證文等
一湊田肆段三百歩　竹原田貳段六十歩
同田薗壹ヶ所（号小藤二外薗）
一濱田柒段同山野口薗壹ヶ所
右、於田薗等者、道種重代相傳之私領也、而関東御下文六波羅御施行鎮西御下知守（譲カ）證御奉書并手継以下之次第證文等相副之、限永代而別當丸仁所譲与也、仍爲後證之譲狀如件、
永和貳年三月一日　沙弥道種（花押）
「右、同文ノ譲状外ニ一通アリ略ス、（小異アリ、右文ニ同田薗一ヶ所ト有所、寂円房居住松坂薗一ヶ所トアリ、）年号月日ナシ」

333

「羽島氏文書」

はしまのうらのうち、よこすのしをへの事、こくふとのよりおつかせられ候ほかに、こうしう申て候へハ、しさいあるましきよし、うけ給候ほとに悦申て候也、よてのちのために、しやうくたんのことし、
てんしゆ二年（ひのへたつ）三月二日　めうゑん（花押）

334

「師久公御譜中」

師久居住乎薩摩郡碇山城、（天辰村内）而自串木野・羽嶋・荒川、至隈城・宮里・高江・山門院、共以領知、而對澁谷氏、爲合戦尚矣、此交築高江峯城、使鋭勇士爲警衛矣、於茲乎入來院彈正少弼重門、爲大將率多勢來、而攻峯城者甚急也、城裏鋭士任運於天、勇競防禦不敢慢也、敵軍漸以力倦將向敗績、丁此之時、重門專馮河勇、忽入城隍依涯

岸將攻登、城裏勇士飛羽箭投大石、其石當重門打碎冑鉢、倏死于隍底矣、雖然山北軍衆入代荒手、發鬨責登、散火光各挑戰、以故城裏之士筋力倦兵器竭、失防禦道、山田式部三郎太郎忠房・守護代酒勾氏一族及石塚氏・古井氏・否笠氏・中條氏已下勇士數十人、[三十八人イ]遂戰死滅鋭士者也、永和二年丙辰三月廿一日卒、年五十二、法號定山道貞、

「國史 定山公 鮎岳公 久哲公」

二年丙辰、南朝天授二年、春三月二十一日、定山公薨於碇山城、年五十二、據定山公舊譜、廟堂要覽、公氏不詳、位牌供養稱名寺、稱名寺在限城郷、公氏出左傳定公元年、註疏、春秋言氏猶言家、故謂公之墓地為公氏、言是公死之家宅也、薩隅日三州人、往往叛我、求大將於幕府、幕府使今川兵部大輔滿範往、夏五月二十五日、今川了俊遣澁谷重頼書、使應今川滿範、又遣伊集院大隅入道久氏、加治木近江權守書亦如之、據鮎岳公舊譜、島津支流系圖、加治木半左衛門家蔵文書、是時加治木氏平為加治木領主、近江權守蓋氏平也、加治木半左衛門系圖、加治木氏出於大織冠鎌足之後、蓋鎌足十一世孫曰三條關白頼忠、頼忠子曰宰相經平、經平流於加治木、初加治木郡司大蔵良長死、其妻寡居領加治木、至是再適經平、遂以加治木與之、生藤大夫經頼、傳六世至八郎親平、稱加治木氏、氏平、親平八世孫也、六月二日、今川滿範至球麻郡人吉、遣禰寢右馬助孫次郎改稱右馬助、久清・伊集院久氏書、使接應、據小松氏文書、島津支流系圖、小松氏文書・島津支流系圖、載是年六月二日滿範遣禰寢氏・伊集院氏書、並云、今日已至球麻郡人吉、六月七日沙彌某遣禰寢氏書曰、去二日大将今川兵部少輔殿已至球麻、今川兵部少輔即滿範也、六月五日、野邊薩摩守盛久遣禰寢氏書曰、去二日大将今川新野殿已至球麻、蓋當時稱今川兵部大輔為新野殿云、四日、人吉領主相良近江守前頼遣禰寢久清書、使應今川滿範、據小松氏文書、前頼、貞頼之子也、據相良氏系圖、相良貞頼見上巻延文四年、五日、野邊薩摩守刑部大輔改稱薩摩守、盛久遣禰寢久清書亦如之、據小松氏文書、今川了俊誘禰寢久清・澁谷重頼使叛、皆陰許之、秋七月三日、了俊遣久清書使擧兵、五日、遣重頼書亦如之、據小松氏・入來院主馬文書、十六日、今川滿範遣禰寢久清書曰、此間已辨田浦・二見之賊、將攻莊内、君其擧兵來援、小松氏文書、是時禰寢氏應今川滿範、而擧事未果、故據滿範以書促之者前後數通、大旨皆與此同、今不悉載、久哲公始應幕府、既而叛之與、鮎岳公連和、今川了俊請罷、久哲公鮎岳公守護職、八月十二日、幕府以今川了俊爲薩摩大隅守護職、同上、冬十一月十日、久哲公與澁谷重頼盟曰、自今以後、患難相恤、有渝此盟、諸神殛之、據入來家臣村尾市郎右衛門家蔵文書、久哲公既叛幕府、故與重頼盟、然重頼既叛南朝、應今川了俊、公豈未之知耶、十九日、今川滿範移書、促禰寢久清會師曰、澁谷氏・和泉氏・牛屎氏皆已到矣、已戒師期、君其毋後、據小松氏文書、十二月二十九日、鮎岳公使大禰寢伊勢介領大姶良次郎秀義舊領大禰寢院郡本村田一町園一所、據鮎岳公舊譜、志志目正兵衛系圖、此云伊勢介、蓋雅義、雅義、義光之後也、禰寢義光見第一巻建仁三年注、今川滿範率相良氏・伊東氏、寇我北鄙、三州御家人市來氏・澁谷氏・菱刈氏・牛屎氏・肝屬氏・禰寢氏・土持氏及谷山・南方・眞幸・飫肥・櫛間等之衆咸應之、滿範進

屯本原攻都城、北郷誼久與島津美濃守音久禦之、據齡岳公舊譜、島津支流系圖北郷氏譜、山田聖榮自記、齡岳公舊譜以此為應安五年事、按永和元年北郷誼久築城荘内宮古島、名為都城、而永和二年六月五日、野邊薩摩守盛久遣禰寝氏書曰、今月二日、大将新野殿始至球麻、新野殿即満範也、據此則満範攻都城在是年明矣、非應安五年事也、今從北郷氏譜、本原在都城領主島津筑後別館東十八町許、音久、資久之養子也、據島津支流系圖、

336

『肝属河内守兼氏譜中』

二年丙辰、南朝天授二年、了俊因悪　公不賓服、五月二十五日、遣今川兵部大輔満範募兵於州郡、以伐　公、六月二日、満範帥兵至人吉城、在肥後玖麻郡、城主相良近江守前頼等迎應之、七月、前頼進入眞幸、此了俊賜兼氏書、蓋徴蔽賦、二十四日、満範附人致之、二十六日、満範亦贈書報知、前頼既入眞幸、使我亦謀伐敵未備、十月、兼氏蓋懐兩端猶未應募、了俊復賜書、蓋強催之時、方禰寝右馬助久清使人報事、八日、満範乃以書附之、令久清傳致兼氏、此月満範蓋陣池尻、日州倉岡城主、土持左近將監榮清等帥兵會之、二十七日、了俊賜榮勝書曰、嚮奉教書使討島津、何爲未會、宜立軍功、十二月、兼氏及禰寝師・谷山師・市來師・澁谷師・菱刈師・牛山師・玖麻師・眞幸師・伊東師・土持師・飫肥師・櫛間師會満範於本原、日州庄内、謀伐北郷讃岐守義久於都城、時　公在志布志、乃樺山安藝守音久・平田新左衞門親宗入道玄親、等往助義久與城守之、

337

『藤野氏文書』「正文在文庫」

薩摩國事、御一跡并所々□以下、不日ニ安堵被成□『国事御一跡并所々不日ニ安堵被成云々ハ、応安七年六月、上総介伊久代本田図書允』□若うたかひ候ハヽ、日限をさし候て承候て、其中ニ御(安)案堵をとり進候へく候、身か私曲公方の御あやまり候哉いなやみえ候へく候、あまりニ〳〵、今度承候分無念候、御あやまりかと存候間、以使者平子若狭權守申候、此左右ニ付て、重々可申承候、たゝしハや伊集院禪門『大隅入道也』方ニ『氏久公也』委申承て候しかハ、定被申行候哉、然者可目出候、越州御進退を猶とかくたすけ申され候ハんためニ、御現形遲々候てハ、京都御うたかひ弥候ぬと存候、御急可然候、恐々謹言、

『永和二年ナラン』
四月八日　　了俊(花押)

嶋津上總(伊久)介殿

338

『入來院氏文書』

掃部允所望事、可奉(挙)申京都之狀如件、

永和二年卯月廿日　　『今川了俊』沙弥(花押)

澁谷虎五郎(重恒)殿

『包紙』
澁谷虎五郎殿　　了俊

339
「寫在藤野久右衛門久昉」「伊集院久氏譜中ニアリ」

氏久心替以後、可致忠節之由、被捧請文候、仍所差遣今川兵部太輔也、【満範カ】属彼手可被抽戰功狀如件、

永和二年五月廿五日　　【今川了俊】沙弥御判

伊集院（久氏）大隅入道殿

「同案、加治木近江権頭殿ト宛アリ、是ニ略ス」

340
「在氏久公御譜中」
『入來院氏藏』

氏久心替以後、可致忠節之由、被捧請文云々、仍所差遣今川兵部太輔也、属彼手可被抽戰功之狀如件、

永和二年五月廿五日　　【今川了俊】沙弥（花押）

澁谷虎五郎【重頼也】殿

341
『寫在雜書』

土持方事者、御方大忠事候而候者、此方之御在所難儀候由承候間、取申候ニ付、致敗軍申候、功成合戰之由、殊土持方之此へハ一陣之事、宮犬殿へ申談候、御奔走候、此時分宮犬方御合力候而同前候、其段委細土持方之代官可申進候、謹言、

【嘉永和二年】五月廿七日　　【今川兵部太輔】満範（花押）

大塚殿

342
『藤野氏文書』

三ヶ國人々多分於御方御志候之由、度々依被承候、罷下可申談之由被仰候□、今日二日、【相良近江守前頼領内也】球磨郡人吉ニ下着候了、就其一向憑存候、一途急速御張行候ハヽ、可目出候、依御返事合戰之次第、重可申談候、兼又面々御中被進候狀案文進候、隨御左右正文をバ可進候、委細承候ハヽ、頼存候、恐々謹言、

六月二日　　【今川兵部大輔事カ】満範

伊集院（久氏）殿

343
「小松氏文書」

三ヶ國人々多分於御方御志候之由、度々依被承候、罷下可申談之由被仰候之間、今日二日、球磨郡人吉ニ下着候旱、就其一向憑存候、一途急速御張行候者、可目出候、依御返事合戰次第、重可申談候、兼又面々御中へ被進候

狀案文進候、隨御左右正文ヲハ可進候、委細使者可申候、恐々謹言、

六月二日　　滿範判

祢寢右馬助(久清)殿

344 其後連々可令申由乍存候、路次不輙候之間、無其儀候、背本意候、抑三ヶ國御事共多分御方御志之由、依被聞食候、爲大將今河兵部大輔殿御下候、仍一昨日ニ當所ニ先ツ御下着候キ、就其候而被進使者候、今時節就于公私可然樣御計候者、可目出候、探題(今川了俊)一事以上其國ニハたのミ存候よしを被申て候、西方事者、委細此御使者被申候欤、兼又此堺之事、此間者無指事候、彼方之躰何樣ニ候哉、承度候、尚々一途思食立候者、爲公私可爲大慶候、恐々謹言、

六月四日　　近江守(相良)前賴(花押)

謹上　祢寢(久清)殿

345 去月下旬之由、御陣ニ御座候由を存候て、捧愚札候處、既依御歸、使者加治木殿之御方ニ進置候キ、可進之由御返事ニ達候間、今者定參着候哉、其時此邊之不審等令申候間、不能重言候、抑去月之比、探題へ進候飛脚、今日五日ニ到來候、隨而身ニ宛て、御内書給候、此文章者面々樣可懸御目欤と存候間、案文を進候、宜可寄御了見候欤、兼又先札ニ副進候し御内書、定御披見候哉、無相違御請文候者、給候て近日管領へ進飛脚候、可付進候、不然候者委細御返事ニ示承候て、可令注進候、將又大將(今川滿頼)者去二日ニ、求磨ニ御着陣候、自是使者あれ迄御共申候了、御名字者今河新野殿ト申候由承候、依大將御下向、近日前賴庄内へ御共申候而、可打出由申遣候、爲御不審令申候、次ニ求磨之上郡之人々陣をもちかね候て、既はつすへき由承候、小田者我城ニ罷歸候而、城誘仕候由承候、求磨上郡人々自兼日大將御下向候者、陣をはつすへき由申候けると承候、今ハ、や前賴(相良)之案ニ入候ぬと存候、尚々大將御下向之刻能樣ニ御計も候者、公私可目出候、如此之事等、樣々其憚多候へ共、自公方貴方樣面々同心之御旁、此旨を申候て、其さ右を注進申せと被仰下候間、不顧憚令申候、又西方之不審者、定被聞食及候哉、御方御勝利由承候間、目出度候、心事難盡愚狀候間、令省略候、恐々謹言、

六月五日　　薩摩守(野辺)盛久(花押)

謹上　祢寢(久清)殿

346

「小松氏文書」

此間者、依路次難儀不申通候条、背本意候、兼又去二日、大將今河兵部少輔(満範)殿求磨仁御着候、仍彼御使大合良勘解由左衞門尉殿、去ル五日此堺ニ被越候、御教書并大將御狀被進候、依此御左右、御陣へ可有御注進候、尚〻御返事兼給候者可然候、恐〻謹言、

六月七日　　沙弥堯覺(花押)

謹上　祢寢(久清)殿

347

「正文在樺山源三郎久清」「此書樺山家二代音久譜中ニ在リ」

爲御方致忠節者、本領不可有相違、有別功者、可被抽賞之狀如件、

永和二年六月九日　　沙弥(今川了俊)(花押)

嶋津美濃守(『音久』)殿

348

「正文在樺山源三郎久清」「此書樺山資久譜中ニ在リ」

爲御方致忠節者、本領不可有相違、有別功者、可被抽賞之狀如件、

永和二年六月九日　　沙弥(今川了俊)(花押)

嶋津安藝(樺山資久)入道殿

349

「小松氏文書」

先日兵部太輔(今川満範)下向之時申候處、御請文今月二日到來候了、殊ニ目出候、就其重委細兵部太輔方ニ申遣候、定可申候哉、其間事一向憑申候、殊更大隅薩摩國事愚身可拜領上者、別而御志候者弥可悦入候、將又此方躰、同兵部大輔方ニ申遣候、可被聞食候哉、玖磨事一落居候者、定面〻爲合力可罷出候哉、毎事可有御談合候、恐〻謹言、

七月三日　　了俊(今川)(花押)

祢寢右馬助(久清)殿

350

『正本種子嶋氏蔵』

去比遁世者被越候間、探題方(今川了俊)吹擧以下委細令申候了、仍御勢渡海候由致注進候、無到來候間、不審至極候、此時分祢寢(久清)方談合候、御勢被進候ハヽ、可目出候、既御渡海之由、探題御方へ先度注進申候了、恐〻謹言、

『永和二年カ』七月十二日　　『今川兵部太輔』滿範(花押)

『左近將監時充』多祢嶋殿

351の1

「指宿文書」

譲与

薩摩國指宿郡惣地頭職事

右、所職者、依多年軍忠之節、被成下安堵令旨、忠勝令當知行所也、然間嫡子將忠(正)限永代譲与所也、迄于自今以後者、守彼狀趣、不可有知行相違、仍爲後日譲狀如件、

天授二年七月廿五日　　能登守忠勝判

351の2

忠勝能登守――正忠郡司

352

『正文小松氏蔵』

一昨日自其方慥便宜之由承候間、探題(今川了俊)よりの内書、同事之不審委細申候了、前頼(相良近江守)既眞幸まて罷着了、其方様之事、同者一揆之軍勢悉不打寄候以前に、一途御方便候者、公私可目出候、条々此仁に申含候、定可申候哉、恐々謹言、

『疑永和二年』七月廿六日　　『今川兵部太輔』満範(花押)

肝付(兼氏)殿

仕候とやらん聞候、これハ薩州より急と御張行候けると聞候、実事ニ者是又無勿躰候、如此事をこそ京都にもうたかいおほしめさるゝ事ニて候へ、所詮、何の儀も候ましく候、たゝ先御出陣たに候て、是事御合力候ハヽ、何事を可有御所存候哉、相良近江方(前頼)へ人遣候之間、可然便宜候之間申候、此仁も御出陣候へきよし承候欤之間、令悦喜候、重澁谷人々方へも狀を遣候也、恐々謹言、

『疑永和二年』八月十九日　　『今川伊与守』了俊

嶋津上總介(『師久公』)殿

353

『藤野氏蔵』

いまた治定ハ不承及候へとも、去比又野部城にて合戦被

354

「正文在田代氏」

大隅國串良院内本知行分事、闕之時者、爲析所々可宛行也、守先例、可致沙汰之狀如件、

『北朝永和二年』『丙辰』天授二年八月卅日　　氏久

「ツキ目ウラ判」(花押)

田代肥前(以久)守殿

「此文書、氏久公御譜中、写在田代縫殿清長トアリ」

355

「氏久公御譜中」

「正文有之」

硫黄二万五千斤到來候了、神妙候、鎧一両浅黄絲・太刀一腰遣之候也、

九月二日　（足利義満）（花押）

嶋津陸奥守（氏久）殿

356

「氏久公御譜中」

「正文在入來院石見重頼」

氏久・伊久令參陣、可致忠節之由申候、仍起請文を進候上者、安堵事申行候、就其御一族達御同心に御參陣事承候、殊ニ目出候、久庵主下向候、急々御同道可目出候、其子細以事書申候、恐々謹言、

九月十六日　了俊（花押）

澁谷清敷（重頼）殿

「右上包」

澁谷清敷殿　了俊

357

「伊作家文書」

（本文書ハ三二六号文書ト同文ニツキ省略ス）

358

『正本小松氏蔵』

又肥後之合戰之事、久多良木か狀、和泉ニ注進爲御不審進候、

態々御音信目出悦存候、隨而探題（今川了俊）より内書其外狀共到來候之間、驕進上候、路次難儀候とて于今延引候、幸に御使に付進候、兼又西方御合戰去月廿九日、御方被打勝候て、敵方無所残被射捕候了、此時分御注進到來殊御志之通と目出候、如此候子細条々可申談候、肝付駿河守親類を進候由申候、其方間之事能々可承候、

一肝付河内守（『兼氏ナリ』）方に、自探題之内書同狀を副候、それより御遣候て、御請文をとり給へく候、

一山本殿之御申候間之事、是又不可有子細候、適救仁郷參河介當參にて候つる、今度在所之事承候て、可有其沙汰候、万事出羽守方より可申候由申合候了、

一大隅之國之事、如此探題之分國に定候、此上者國中人々に能々申談候へと被申候、御内書隅州坂下に先立遣申候、別而御近付之人々者、此段可有御存知被申候、殊御方深重之御事にて候ほとに、か様申候、恐々謹言、

（『永和二年カ』）十月八日　（今川兵部大輔）滿範（花押）

祢寢（久湛）殿

御返事

359

『御領日州大田原村新助家蔵』

氏久對治事、御教書被成下之處、面々不奉、無勿躰云々、池尻最初在陣候ニ、御一所ニ御堪忍云々、殊ニ目出候、弓矢のため、又天下のためにて候、ありかたく候、恩賞の事、可申行候、

『永和二年カ』十月廿七日　『今川伊与守貞世入道』了俊判

『土持(栄勝)』大塚左近將監殿

360

『正文種子島氏蔵』

肝付城事、以御合力蹈靜候云々、殊ニ目出候、大忠之第一候、眞実御志あらハれ候、目出候、就其者其堺事ハ、御方遠所候間、これより合力申候ハてハ不可叶候間、思定候、來月中御待候へく候、尚々今度御忠申盡かたく候〳〵、細々可申候、恐々謹言、

『永和二年ならん』十一月十九日　『今川伊与守』了俊(花押)

多祢嶋(時充)殿

361

『北郷讃岐守義久譜中』

永和二丙辰冬、或作應安五壬子冬、相良某・肥後八代・葦北・求麻三郡主、與伊東某合心、侵守護領土、丁時三州中御家人谷山南方・市來・澁谷・菱刈・牛屎・眞幸・肝付・禰寝・櫛島(間)・飫肥・伊東・土持等逆守護命者六十三人屬彼旗下、既至眞幸・北郷・野之三谷爲相良有、以本原都城大手、爲本營、其大將新野某京都ヨリ下向セシ人ト云、也、求要害之地結陣柵、逼都城、義久稱讃岐守、音久稱美濃守、平田新左衞門重親入道玄心・工藤藏人三將ハ前以ヨリ為加勢在城中、以下勇士七十餘騎在城、防禦堅固也、爲救於其急難　氏久公自將發志布志陣天ヶ峯、梅北西成寺ノ上、于時屬守護將者、加治木氏・肝付氏・二男財部氏耳、『大隅守』伊集院・『久氏入道』伊作・魔島・大隅・『肥後石井』下大隅・『志々目』大姶良等士卒招、元久公雖有御出陣、依氏久公命帰于志布志、

362

『山田聖榮自記』

一家北郷・椛山兄弟本領格護として、庄内南郷之内都之城を取、正安二年之比候哉、其世之時ハ眞幸・北郷・野々三谷ノ城迄、求麻ゟ相良持候、又三ヶ國御家人一族するニ依而、相良方なり同意ニ成而、肥後八代・葦北勢迄馳下、一族之衆都合六十三人也、守護方ニ者加治木・肝付・同次男財部方三人ゟ外ハなし、去ニ依都之城本原を惣陣ニ取、大將ニ新野殿として、京都ゟ下向与云々、都之城内ニハ、北郷讃岐守・椛山美濃守其外宗徒之人々籠、『永和二年ノ冬ナルベシ』一族衆年内ゟ陣を取候間、氏久志布志ゟ後巻として、先南

郷之内西城寺之上天下峰ニ上而陣取、一族之中ゟ財部方守護方ニ内儀有ニ依而、明る正月の比ゟ一家ノ内談調け（『永和三年也』）れは、御神水有而一筋ニ御合戰を定早、御方ニ者伊集院（『大隅守』）・伊作（『久氏入道』）・鹿児嶋・大隅・下大隅・大姶良計なり、總州ゟハ和泉四ヶ所、四ヶ所与者高城・東郷・入來・邪答院（『分註トミユ』）なり、山北ニ被隔候間不及力、總州与者師久方御兄方、其比兩守護一比ニ有、依而無合力、一族ニ（『裏カ』）者谷山ゟ南方、市來・澁谷・菱刈・牛山・求麻・眞幸・伊東・土持、坂ゟ上ニは、祢寢・肝付・飫肥・櫛間なり、二月中旬（『永和三年』）ノ比ゟ本陣天下峰ニ打寄、財部取合、日限三月一日ニ被定、其時氏久（『元久公』）又三郎殿へ被仰出候者、急如志布志歸候得と被仰、御返事ニ、縱餘所ニ居候共ヶ様之時者可參候、此間御傍へ候て、既合戰ニ定ぬるニ歸候へハ、於以後も口惜名を取候する事如何ニ候、一家御内面〻ノ心中も難計子細と御申候得共、氏久夫ハ常ノ侍之嗜、大將ハ一人ニ成共、身を全して本意を遂こそ肝要与ハ聞、其御方より外男子不持候、縱有と云共元久ニこそ國を知セ度候得、夫ハともはからひと被仰候而、氏久か悪而候けるとて、其後ハ御詞なく、暫有而御意候時ハ、可有歸と御申ニ依、御親子ノ御心中上下奉察、鎧之袖をそ濡しける、取分本田重親ハ氏久御守の事ニ而、一入今を限りとや被思けん、甥之氏親を近付、必〳〵重親ハ可打死、御分ハ生而又三郎殿之御用ニ可立、如何様名將ニ而可有御座、重親は此言葉ニ依而終ニ打死す、氏親は七ヶ所手負と云共生ると云〻、

363

「氏久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋家臣喜入衆志々目正兵衛義辰」

大隅國大祢寢院郡本村内大姶良次郎秀義跡田地壹町薗壹丁所事

右、依爲闕所、由緒之間、爲料所〻宛行也、早任先例、可致沙汰之狀如件、

天授二年十二月廿九日　　氏久（花押）

大祢寢伊勢介殿

364

『肝屬河内守兼氏譜中』

三年丁巳、（南朝天授三年、）正月、　公及世子（恕翁公時年十五稱又三郎君、）發志布志屯于天峯、（今屬都城梅北、）謀救都城、且遣人説財部氏令屬　公師、二月（中旬、）　公會肝屬權三郎久兼（聖榮自記載肝付次男、按系圖當此久兼、）及加治木・財部・伊集院・伊作・麑島・大隅・下大隅・大姶良等師於天峯、戒師期而命　世子歸戍志布志、　世子曰、譬

在遠方聞戒宜至、今先期還世謂吾何、　公曰、汝爲將種、豈與卒士同其操乎、　世子乃還、二十八日、　公帥兵八百陣于平長谷、分爲三隊、命新納越後守實久（肝付女壻）、帥其左師、謂之月一揆、（同姓騎歩属之）　命本田信濃守重親帥右師、謂之杉一揆、（庶姓士卒属之）　公親將二百、謂小一揆、進向蓑原、大將滿範（聖榮自記作新野殿）　等亦三分其師、三月朔日、與城主義久等戰、斬北郷弥次郎基忠・北郷七郎忠宜等、義久等傷退、時　公進師援義久、蓋兼氏乃從滿範與　公援師戰于蓑原、我兵相良兵庫允氏頼（前頼之弟）、伊東六郎左衛門尉祐基（系圖作信濃守）、池尻五郎・東郷右馬助重、等死之、三隊敗走、滿範退保三俣、二日、　公師乘勝追之、大將滿範等薄暮返戰、斬本田重親等、三日、土持榮勝・伊東祐基等、聞大將収散兵、猶陣三俣、趣爲之殿、祐基死之、時兼氏使將士戍和田城、榮勝等來攻甚急、故委而回、（日向記）又継班師、

○九月、本田氏親襲姫木城及清水城皆取之、　公使氏親等戍二城、土持榮勝從大將滿範入眞幸院、

365　「國史　齢岳公久哲公」

三年丁巳、（南朝天授三年）、春、　齢岳公自志布志引兵救都城、屯天ヶ峰、二月二十八日、進軍平長谷分軍爲三、曰月一揆、曰杉一揆、曰小一揆、新納實久將月一揆、本田重親將杉一揆、　公將小一揆、騎歩合八百餘人、北郷誼久聞　公之至也、告於衆曰、豈可以勁敵遺君父耶、吾先擊之、三月朔日、誼久率其二弟彌次郎基忠・七郎忠宜及平田新左衛門尉親宗・工藤藏人等七十餘人、而出酣戰還、誼久被創、基忠・忠宜陣歿、　公渡平長谷向蓑原、旗將北原彦七郎請令、本田重親令曰、直貫敵陣而出其後、彦七郎揚幟而呼曰、唯此所向是視、三軍進擊今川滿範於蓑原、　公躬擐甲執兵策馬直前、麾衆而進、人殊死戰大破之、斬伊東六郎左衛門尉・池尻五郎・澁谷右馬助等、（據齢岳公舊譜、島津支流系圖、山田聖榮自記、平田氏與帖佐氏俱出於内大臣宗盛、平田監物系圖文書、鎌田右大宜顕其後嗣以慰寃魂、頼朝以後多變異、論者以為平族怨氣所致、鎌倉將時、佐氏、帖佐氏、帖佐次左衛門系圖、同獨帖佐郷、能從之、求其子孫、得宗盛次子刑部太輔能宗於薩州牛尿院、賜帖佐伊右衛宗生信宗、子孫為平田氏・帖佐氏、則信宗非能宗子也、山田聖榮自記止稱北原、舊譜門系圖云、高望王弟曰大納言高棟、高棟七世孫曰肥後房良西、良西子曰信宗、子孫稱帖佐氏、北原彦七郎蓋有據、今從之、北原氏出自肝付氏、梶原氏族亦有稱北云、伊東六郎左衛門尉不詳、或曰伊東氏系圖、大和守祐重父信濃守祐原者、初稱六郎左衛門尉、然據系圖、祐持以貞和四年七月七日死於京師、天ヶ峰在都城領主島津筑後別館南相去則非此人也、池尻氏出於伊東氏、平長谷在西南一里二十八町許、蓑原在西二十五町許、）　初伊集院久氏以其女許嫁澁谷右馬助、右馬助將與其黨俱如莊内求見久氏、久氏弗見曰、余亦將從我君於莊内、而卿乃黨於市來・禰寢等胡可見也、必也其戰場乎、右馬助死於蓑原、久氏不肯以其女嫁人、女亦不欲嫁、削髪爲尼、居伊集院圓通庵、日夜念經、以

終其身、（據齡岳公舊譜、山田聖榮自記、觀今川了俊前年與伊集院久氏書、則久氏似與渋谷重頼等俱應了俊、然今川満範之寇我北郡也、市來・渋谷・菱刈・牛屎・肝屬・禰寝・土持皆應之、而久氏不與焉、觀其對渋谷右馬助語、則是事公無貳者也、豈初未嘗與了俊應者乎、抑始應之而後絶之者乎、臣正誼、臣正懿、臣貞良謂、伊集院久氏不嫁其女、女亦不欲嫁、皆過於厚、其説見室直清壻死女不嫁議、今録於此、其議曰、昏義有夫死不嫁之文、君子有寡婦不可取之言、自三代之衰、人情日趨於凉、於是有以寡婦更嫁者、嗚呼可謂亂禮害義之大者、此其嫁者與取者皆有罪、但有昏議既定未嫁壻死、世之守禮者、概以禮經之言斷之、以為不可嫁、又罪其取者、直清竊議以為此當嫁也、其取之亦於義無害、蓋先王制礼貴於得中揆之天理考之人情、必得輕重之倫、必得名實之當、然後可通而行之於天下、今詳禮經與君子之言、所謂夫死不嫁者謂既嫁者也、寡婦不可取者謂既為婦者也、今實未嫁之女以既嫁之禮、壓匪婦之人、以寡婦之義、必使其不嫁以終身、此乃非禮之禮、非義之義、大人所弗為也、揆之天理不合、考之人情不從、其於輕重之倫與名實之當、皆失之矣、難者曰、君子行禮寧失之於厚、不猶愈於薄乎、曰不然、禮不可過厚、又不可過薄、中而已矣、苟不知義、以處中、而惟厚之務、則其所以為厚者、不過矯激之為爾、吾恐往往過中、離道日遠、何足以言禮哉、大抵婦之於夫、與臣之於君同道、故臣不事二君、婦不更二夫、臣為君斬衰三年、婦為夫亦如之、若夫臣去君而不絶者、為君服斉衰三月、至於婦人則無去夫而不絶者、其約昏而未嫁者、為夫服斉衰、既葬而除之、由是觀之、去国而不絶者、主亡可以事他君、約昏而未嫁者、夫死可以適他人、此二者義同、故服同也、聖人於是斟酌其宜而處之、亦已精矣、今議定、女約昏未嫁壻死者、女家主昏之人、當俟三月之後以事祭告宗廟、又告亡人之靈、及壻氏之黨然後嫁、庶幾於禮為當、此雖經無明文以義起焉、亦可以無疑矣、）　三日、満範復軍褒原、我師擊之不利、肥後某兄弟死、満範亦不復攻都城、引兵如下財部、有石井某者、病創臥、聞肥後某之死也、蹙然而起曰、吾豈可獨生耶、抉創而死、蓋與肥後某結生死之約云、　公有所愛馬、名須美太良伊黒、是戰也、借山田右京亮（後改出羽守）久興乘之、方事之殷、久興下馬搏戰、已而索馬不得、申旦、礲人牽馬而來曰、昨日軍敗棄馬而逃、夜半馬追及於下財部、不敢不告、久興以復於　公異之、以賜久興、（同上、久興、忠經之子也、據島津支流系圖、）　久哲公聞都城之被圍也、亦欲救之、爲和泉四所凶徒所遏、乃止、（據齡岳公舊譜、山田聖榮自記、舊譜以此為定山公父子事誤矣、蓋由於以満範攻都城為應安六年事耳、）　六月二十九日、南朝一品親王命左少將胤房賜島津音久令旨、賞軍功也、（據島津支流系圖、軍功蓋指音久與北郷誼久共守都城事、）　晦日、　久哲公使本田左近藏人兼久領山門院西方田園、其舊邑也、兼久、久兼之孫也、（據久哲公舊譜、本田信次郎系圖、本田久兼見第五巻建武二年、法名兼阿、）　冬十一月七日、　齡岳公以田園爲救仁郷比志田村毘沙門堂社領、（據齡岳公舊譜、田園地闕、）　薩摩大隅日向肥後地頭御家人六十一人、上連名盟書於幕府、十二月十三日、兼房以書勸禰寝氏、令應地頭御家人、（據小松氏文書、兼房脚色不詳、似是今川満範麾下軍吏、）

366

「北郷讃岐守義久譜中」

永和二年、三ヶ國御家人企一揆、從谷山・南方・市來・渋谷・菱刈・牛屎・眞幸・伊東・土持・肝屬・禰寝・飫肥・櫛間令一致、肥後國相良氏依同意、同國八代・葦北兵來加、新野氏（從京都下向）爲大將陣本之原、圍義久所楯籠都城日久矣、樺山美濃守音久・平田新左衞門入道玄心・工藤九郎等爲合力、入于義久之城内守禦之、　太守氏久公不忍聞義久之危急、同三年二月、率師旅發志布志、構陣南郷

西生寺上天箇峯、被集兵、伊集院・鹿児島・大隅・下大隅・大姶良参向御方、財部元雖與一揆内通御陣、依茲氏久公同三月一日、渡平波瀬向敵陣、欲遂一戰、義久聞之云、今日　太守公爲援助之期日也、而待　太守公之後援、而可挑戰城主之玷辱也、豈免後嘲乎、不如先以城中之小勢爲一戰、於此混甲（ヒタカブト）七十餘約必死而出城、與大軍相接、東擊西突左旋右轉雖苦戰、衆寡不偶、義久數ヶ處被傷、弟彌次郎基忠・同七郎忠宜雙甲闘死、此時平田玄心・工藤九郎折庭前櫻花差腰合戰、　氏久公從軍雖不足千騎、終破敵陣、敵將相良氏頼・伊東六郎左衞門尉・同池尻五郎・澁谷右馬助等授首、其外死者不知數、残黨盡敗北如下財部退、即時被得大利、義久開佳運全城畢、

367

『北郷讃岐守義久譜中』

「右ハ従前義久ノ譜中ヲ載セタリ、今御文庫御蔵本ト文異同アリ、参照アルヘシ」

【永和三年丁巳ナルベシ、応安六年ニ作ル多シト云共誤ナラン】

應安六年癸丑二月廿八日、去天ケ峯陣平長谷、同三月朔日、財部騎歩雖馳加、都合一千ニ不足八百有餘也、月一揆大將新納越後守實久、杉一揆大將本田信濃守重親、又稱小一揆二百計從　公馬廻、重親可駈通旗（旗役北原彦七郎、イニ梶原）於敵後、駈渡平長谷、義久卒甲兵七十餘人突入于大敵中、雖然不利、義久被疵數ヶ所、弟基忠（称弥二郎）、忠宜（七郎）、並甲戰死、平田・工藤勇戰超衆、（両士折庭上桜花挟腰、勇士等梶原花軍真似ト戯、二人不劣梶原戦）、　公從於二百計騎歩、兩揆ヲ（月杉）左右ニ進セ、充滿蓑原突入大敵中、各不顧死挑戰、　公指揮兵卒切通大軍中、扣馬於本原、歩卒不得遁去溺死于池（篠池ト云）、水多、城中勇士今朝戰ニ負深手者、出門加　公軍、衆携入手負於城中、敵兵雖爲大勢被駈立於小卒、味方右往左往ニ散乱、所討取敵首　公實検、相良氏弟氏頼・伊東六郎左衞門・同池尻五郎・一揆張本澁谷右馬助等也、此外諸卒不遑記、敵陣ハ宗徒者過半討レ引色ニ成、手負ヲ三俣等ヘ扶ケ除、同三日、又簑原ニ打出ル、味方勝ニ乗打テカ、リシカ、戰負テ本田重親・北原彦七・肥後兄弟・大姶良・志々目藤三等數輩戰死ス、重テノ合戰敵忽敗北シ、下財部・野之三谷・三俣ヲ心サシ蜘ノ子ヲ散如迯去ル、石井朔日戰深手負、三日ニ肥後戰死ヲ聞、疵口ヲ掻破死ス、本田氏親被疵七ヶ所、加治木氏幸ニシテ免死、山田右京亮久與被疵三ヶ所、外手負死人多シ、

368

『山田聖榮自記』

同二月下旬、廿八日、天下峰をおろし末吉之ことくニ、平波瀬ニ篠立有而、三月一日ニ財部ニ取合、御一家御内勢千ニ不足、以上八百計也、月一揆之大將者新納殿一家同心也、杉一揆大將ニ者本田重親御内一統ニ此手ニ属、爰ニ小一揆と而、二百計氏久御馬廻なり、是ハ兩手自然おくれん所之横入と儀する所也、去程ニ御旗之役北原進出、今日之御注ハ如何と申けれハ、重親答て敵之後ニぬけ候へと下知す、北原馬引寄打乗而、御旗差上、今日ノ御合戦ハ御しるしを守り給へと而、先前ニ平波瀬ノ渡駈渡さんとす、北郷讃岐守殿ハ、兼而相圖之日也、既ニ我故ニ氏久一家御内、不残今日之合戦ニ極給處也、万一勝れん事難有、於以後きかむゟハ、先城衆ノ役たりと而、甲七十計ニ而切而出、大勢と云、待勢之中と云、多勢なれハ切負而、讃岐守數ヶ所手負、舎弟弥二郎殿・七郎殿兄弟甲をならへ而討死ス、平田新右衞門宗親并工藤藏人ハ、三月一日ノ事なれは、庭なる櫻之枝を折、腰ニ指太刀打す、切合さんして後、梶原源太か花戦をまねたる事之おかしいなとゝ狂言ニ笑、藏人源太か心にをとる侍有へきと而、友は鏡そと語打つれたり、中古迄ハ如此こそなしミ深けれは、合戦もそろひ高名も有候なり、まなふへし〳〵、御大將氏久は黒糸おとしの御鎧ニ袖ニつまとりたるニ、同毛ノ甲ニ鍬形打たるニ三尺餘之御はかせはき、黒栗毛の御馬の尺にはつれたるニ、御乗主も達者、御馬も逸物成ニ手綱かひたくり、御馬廻二百計、月一揆杉兩手を左右ニならへ、御しるし先前ニ差掛させ、さはかり廣ミの原ニ扣へたる大勢の中ニ切入、太刀打ニなる、氏久是有り、敵ニ隔たるな、只せき候へと而面を崩せは、大勢を二ッニわりて切通る、本の原のめんニ敵も味方も共ニせきかゝり、夫雑馬引なとは池にせき入、城ゟも朝軍ニ薄手負なとハ出合、後巻衆ニ取合、軈而手負共城江入も有、前ニ太刀始之所ニての手負ハ、財部のことくニかくも有、馬ニ乗も有、腰の立ハ手を引つれて退、敵も足をみたし死骸を尋る者も有、更ニ敵味方出家なと迄入乱、次に大將氏久の御前ニ敵の頸共御實見有り、宗との頸ニハ他國之相良氏頼・伊東六郎左衞門・同池尻五郎、薩州一揆ノ大將ニハ澁谷典厩頸共、さのミ郎等侍共之事ハ付るニ不及候、三月二日、敵方引色に見得而、手負共ハ前ニ三俣其外寄ゝにのけ、蓑原ニ打出るを見而、御方人ゝ勝ニ乗而合戦する、暮かけて切負、肥後兄弟其外御方も討る、敵ハ下財部のことくニ散ゝニ退、其時氏久の御馬

を山田右京亮ニ御預候處、此合戰ニ乘、三月一日ノ合戰ニ手負候と云共、三日も人數に太刀打仕、二三ヶ所手負候而馬を尋候へハ行方不知成候、負軍なれは敵に被取候与心得候處、明ル朝此馬を引來而申様ハ、夕ノ合戰ニ御負候、更ニ夜中ニ及主を失候物共逃候程ニ、我等も共ニ財部江退候、軍場ニ馬を捨候、遙ニ夜ふけ候而我等か居候所を跡を不違來候、是を面ニ引而參候と、驚而御近習ニ付申上、氏久聞召、名馬とハ心をこそほめ候得と而、今度之高名と云、佳例目出度候と御意候而御馬を被給候、すミたらひ黒と申ハ是也、奥州へい馬也、此合戰ニ御方ニハ北郷弥二郎殿・七郎殿兄弟、宗徒之御内之人ニハ杉一揆大將本田重親、肥後兄弟并石井、御旗役人北原・大姶良・獅子目藤藏其外加治木殿ハ物具なとも剝ル、頸ハ戀〳〵ニなりける也、取懸捨置て候を見付、様〻いたわり候而、生而一期之程ハ氏久ニ奉公被申、此時人〻何も忠節此事ニ候、爰ニ手〻ノ若黨侍共打死なとの事ハ聞書ニも不及候、

『仝』

369

一澁谷典厩ハ伊集院隅州之聟ニ而未約束計ニ而、使者を以見參申、出陣有度由被申、國一揆たるニ任せ、坂ゟ上庄内御越之由音信候、隅州返事ニハ、我も氏久江御共申庄内罷立候、おなしくハ互ニ頸ニ而見參と被申、恥入たる返事哉と而典厩出陣有、典厩の頸實見之時此うわさ有り、敵なからもいたハしき事なりと今時人口ニ有り、其後約束ノ姫を尼ニなし、伊集院ニ圓通庵と申比丘尼寺是也、

370

「末吉宮里氏文書　本書ナク写アリト云」

古開山無傳そいにまかせていちこ分ゆつりあたうる祖超御房所、さつまのくにくハんしれうてんのうち、こくふしりやうの内、ミやさとのちやうせい五反お、さをいなくちきやうあるへき狀如件、

「永和三年也」
天授三年二月九日　　子督（花押）

371

永和三年丁巳

三月朔日、北郷彌二郎基忠資忠の三男なり、是より先き探題今川了俊謀て、齡岳公と小弐冬資をハ肥後の水島に会して、冬資を酒席に殺せしことを公も心得玉ハず、遽に回らせ給ひけれは、了俊悪んて今川満範を将として、相良・伊東・渋谷等の兵を徴発し、北郷義久か都城を伐を齡岳公救ハせ給ひ、大に饗原に戦て、相良兵庫允氏頼・池尻五郎・東郷右馬助等を討取給ふ時き、此日基忠と其弟忠宜等戦て死す、但此軍は應安六年或は康暦元年の事とも説あり、北郷七郎忠宜資忠四男

なり、上注の如し、三日、本田信濃守重親亦同しき戦にて、此日討死なり、杉一揆の大将たり、下の人々同日なり、北原彦七郎御旗役人とあり、肥後大和守盛久・肥後彦太郎種顯・肥後彦次郎種久種顯弟なり、石井某・大姶良某・志々目藤藏或ハ藤三とかく加治木某、

372

『入來院氏藏』

去月十八日御注進狀委細承候了、抑菊池肥前守(武朝)以下凶徒、於蜷打(肥前)悉加對治候了、就其肥後對治事、不可有幾候、其堺事、今河兵部大輔(満範)相共、被致忠節候者、可目出候、然者本當知行事不可有相違候、毎事期後信候、恐々謹言、

『永和三年』三月廿一日　了俊(花押)

澁谷虎五郎(重範)殿

373

『仝』

時分可然候上者、不日今河兵部(満範)太輔相共可致忠節候者、本當知行等不可有相違候、急々可有現形候也、恐々謹言、

『永和三年』三月廿一日　了俊(花押)

澁谷清色虎五郎(重範)殿

374

「正文在樺山源三郎久清」

抽軍忠之由被聞召早、尤神妙者、一品親王令旨如此、悉之、以狀、

天授三年六月廿九日　左少將(花押)

嶋津美濃守館

「此書、樺山家二代音久譜中ニ在リ」

375

『都城本田某藏』「入來本田傳藏也」

下　本田左近藏人兼久分

右、山門院西方之内、祖父兼阿之跡村々同散在田薗等事、有注文別紙、早任先例、可知行之狀如件、

天授三年六月卅日　伊久(花押)

「此御書、伊久公御譜中ニ在リ」

376

『御領日州大田原村新助藏本』

土持左近將監榮勝申軍忠之事

『永和二年』一去々年都城御陳致宿直之處、『永和三年、日向記康暦元己未ニ作ル』去年三月朔日、嶋津越後『氏久公、正月発志布志トアリ』入道後巻仕御合戰之時、(今川満範)大將御供仕致散々合戰、其日者三組引退、爰大將未御陣御蹈之由、依有其聞、同三日、諸軍勢同心致後巻、無子細御陳御開候、

【永和三年】【隅州長尾城、本田氏親仕落、氏久御代姫木清水両、是も氏親仕落候】
一去年九月之比、姫木城没落之時分、嶋津蜂起之間、彼
【文明二年聖栄目安ニアリ】
城爲合力大將眞幸院御出之時、御供仕致忠節候、
【永和三年】
一自去春之頃、飫肥・櫛間致在陳、大將庄内ニ御出御供
仕、至于今致忠節候、
右、軍忠之段、大將御見知之上者、無其隠者也、然者
早御判下給、爲備後代亀鏡、恐惶言上如件、

377

『入來院氏蔵』

不日可令參陣云々、然者本領知行分等事、如元不可有相
違狀、依仰執達如件、

永和三年九月十五日　　沙弥（花押）（今川了俊）

澁谷虎五郎殿（重頼）

378

『入來院氏文書』

（本文書ハ三七七号文書ト同文ニツキ省略ス）

379

「氏久公御譜中」

税所某合體于求麻、引入相良於曽於郡、對于守護合戰更
無止時、雖然正八幡宮之社人等者、屬于守護、依無他事、
正宮上地構咲（ヱミノ）隈於本營、在陣者三年於茲、而後攻落於姫
木城、使本田親治・氏親父子守彼城、其後忍落於清水城、
兩所已入手裏、又其後於湯之峯有合戰、於茲屠殺於税所
之嫡子、御方亦瀬戸口十郎遂戰死畢、此時負深手者多而
其疵未愈、求麻・和泉・山北之軍衆相加于税所之軍、寄
來于姫木城石原口、此事兼不謀知、故御方僅不足于四十
冑、本田氏親亦去湯之峯合戰負深手未愈、只本田重親父
子、碇山金吾（三郎左衛門尉久安）、伊集院長門守・小田・北村・上井
・篠原・小島一族而已也、既爲太刀打、所以向于先陣之
寄手切負、和泉之軍中上村・求麻之軍中友田所斬獲也、
爰碇山金吾隔於大石、揚大太刀盡筋力以挑戰、其軍功不
可勝言、且以大太刀之餘切崩岩石其跡太矣、見者莫不飜
舌、是以稱其石號金吾石、迄于後世謳歌之云云、
兄上總介師久薩摩郡中居碇山城、（天辰村之内也）、而串木野・羽
島・荒川・隈城・宮里・高江・山門院共以領知、而對澁
谷經年月之後、入來院彈正少弼重門催太軍來攻高江峯城、
重門雖戰死、而城亦次陷矣、由是師久減數多之勇士、故
碇山居城亦軍勢劣弱、丁此之時山北四ヶ所及兩院（菱刈・牛屎）、
球麻各同意、率大軍來而圍碇山城、告其急於氏久、則發
於志布志、速經海陸、先留於伊集院招南方近邊之士卒、
而後越于薩摩山、相陣營地屯于此、待諸所後兵來格之際、

悪逆無道之市來某不計忽變意志塞山路、軍旅之進退無何之如也、師久聞之、自城裏使一价通達曰、如此絶通路則當家滅亡之秋也、凶悪之市來何無私欲乎、一旦應彼之意、可被除通路之障矣、氏久亦同之、卽教使者達曰、開塞路令軍旅往還自由者可應汝之望云云、市來報曰、因貴命述臆念、今也吾無欲城郭土地之慮、唯所願者有欲娶貴女於陋室、子孫貴顯之得芳名、若容此言、則匪啻開塞路快往還、宜屈旗下抽無二之忠功、氏久聞此之言艴然不悅曰、死生有命會此急難亦天也、豈不知天命、而專謀逃死可爲當家之瑕瑾乎、於茲乎一族他家老輩爲群議、而後謂吾曰、行女子之人也、或嫁高家、或嫁卑下、未嘗一順、以嫁市來氏何爲當家之瑕乎、速應渠之求開塞路、則可救師久主之急、敢勿辭不止也、不得已而應市來之請、市來遂素意欣然開塞路、且候旗下矣、由是此間所滯于伊集院之師旅馳以參陳、故爲群議明日晩天向敵陳得勝利、退散累年之憤、各欲爭先進向矣、澁谷氏預慮知不可勝乎、不待其夜之將白、徒以散陣者也、以故氏久往碇山謁師久主、進盃酒祝万歲、兄弟佳會不可勝言也、其後市來某娶吾女産三子矣、（如此則可抽忠功、動與澁谷之邪謀背守護之令命、是以迄立久之代所以凡誅也、）澁谷氏守護領之有山北四ヶ所（東郷・高城・入來・祁答院、）者、盡以押領、剩九州探題今川殿致直參爲奉公、是又非守護之催促、而緩怠之至也、去程上澁谷・鶴田某歸意於氏久、是以發向于彼堺、出野臥放矢石矣、近邊菱刈・牛屎兩院之凶徒等攻寄于氏久之陣、已及難儀、故將開陣矣、于時澁谷出大野臥急速懸付、氏久自身迄打太刀急、於其傍式部彦七・本田彌七踏留、而遂戰死、其間山之此方逾越也、雖然凶徒等乘勝慕來者甚急也、以立返合戰散火、此時澁谷大村某討取者也、依之合戰止、敵軍引退畢、是氏久之稱山引合戰云尓、

薩隅日三州之凶徒悉以往々既蜂起、雖爲亂逆、大夫判官師久・三郎左衞門尉氏久兄弟不亂天倫、如水魚而成兩守護之職、漸々以退治於逆徒、故三州共歸泰平之安者也、奥三ヶ國（日向大隅薩摩之號也、）者、爲西海之偏地、故上代亦天下之政道法度敢不能隨用、是以　右大將源頼朝卿往昔當家之高祖　忠久所下賜之御教書曰、三ヶ國之地頭御家人者可爲忠久之家人、唯鮫島可被相除云云、

右之鮫島所以被除置者、其故如何、　頼朝卿之伯父鎭西八郎爲朝者、十三歲而爲九州配流之身、十五歲而薩摩國阿多平四郎忠景之男、爲三郎忠國之壻、押領於九州、而後十八歲而爲歸京、十九歲而發向於保元合戰云

云、件忠景者、桓武天皇五代、鎮守府將軍村岡五郎良文朝臣七代之後胤、平次大夫良通之四男也、又異説有之曰、鮫島四郎宗房者、　右大將頼朝卿擧義兵之時、屬旗下抽忠功云云、其子四郎宗家者在小侍所之結番、候近習令奉公云云、異説未詳是否、

氏久嗜御馬技術、因茲撰十八ヶ條馬書、是則當家秘傳之書也、

380

『御領日州大田原村新助蔵本』

土持左近將監此春、飫肥・志布志・都城以下所々、十二月二日にいたるまで、諸方同心申之間、難有御忠にて候間、其子細探題(今川了俊)方注進可申候、尚々被致忠節候者、公私可然候、恐惶謹言、

「永和三カ」十二月二日　　「今川兵部太輔満範欠」兵部卿

土持左近(栄勝)將監殿

381

「氏久公御譜中」

「正文在志布志大慈寺」

日向國救仁郷比志田村内毗沙門堂敷地免田畠事

右、爲祈禱所奉寄進也、任先例、可被知行之狀如件、

永和三年十一月七日　　氏久(花押)

毗沙門堂持住玄祐庵主禪師

382

「重富船津村百姓蔵」

於守護代一所御忠節之段、喜入候、委細ハ以面可申承候、返々悦通候、恐々謹言、

「永和三年欠」十二月十一日　　氏久御判

姫木十郎殿

383

「濱田氏文書」

天授三年田畠取帳□

□(十)月廿九日濱田村十万十一作柒町三段卅ヨ

元一町四反内定不五反卅　　坂本作五反卩ヨ卅卩

一反廿内

卅六郎太夫乍卅ヨ卩　　同坪卅　　五反同□(乍カ)

後藤四郎乍廿卩有留乍□

元一丁内不卩

姫木作四反ヨ一反五反地頭用□

元六反

上原田作　　御佃引□

元一丁五段内定不五反河成一反廿

下原田作六反卅卩ヨ一反廿有□

元一丁内定不一反　佛山作七反ヨリ一反廿　地□

元一丁内定不卩ヒヨリ一反　窪田作六反卅ヨリ卅卩　弁□

元二反廿内定不廿　永田作一反卅ヨリ十卩　有□

元七反内　息田作一反卅ヨリ十卩

五反新加用引　同坪二反

有冨乍ヨリ十卩

一反卅

元二反卅河成卅當不十　櫛毛作一反廿ヨリ十　介二□

元卅　蒜守作卅ヨリ卩　有□

元一町内　四坪作四反ヨリ卅　弁用□

東七反　酋三反

有冨乍二反卅ヨリ卅　同人乍一反十ヨリ十

元二反廿　脇田作二反ヨリ廿　有□

元五反内河成一反定不廿　竹下作一反廿ヨリ十卩　弁□

元一丁二反河成四反定不五反水ヨリ卅　後迫作三反ヨリ卅　弁□

元一丁二反内　馬渡作四反卅ヨリ一反廿地頭用弁□

元二反内定不十　田上作一反廿ヨリ卩　四郎□

元二反内ヒヨリ十　石迫作一反廿ヨリ十卩　四郎二郎□

世津ゝ七弁六合一町九段卅卩

元二反卅内卅井析　大迫作一反卅ヨリ十卩　矢ト□

内卅日所ゝ新開作八段ヨリ一反十

元在名四反　元十卩　樋口元卅

孫八乍三反十ヨリ卅　孫イ卩ゝ　平内五郎乍卅ヨリ

元卅　元廿　脇田元二反

右衛門三郎乍廿卩　井析　有冨乍一反卅ヨリ

右迫元卅乍廿

有冨

元卅東光寺

東光寺

河窪元卅内河成十　藤元卅三郎乍廿卩

合太郎平内二郎乍廿卩　上大迫元卅三

大夫太郎乍卅ヨリ卩

同日　新開作一町四段卅ヨリ二反卅卩　河ハヘ

米〻崎　井尻元一反卅内不口　元二反内河□

元廿　藤三郎乍一反十ヨ十　介二郎□

六郎太夫乍廿

元三反十口内不二反廿口　同坪卅十郎三郎乍　卅ヨ口元一反廿有冨乍一□

元卅　小永田　同坪二反□

有冨乍廿ヨ口　元五反廿内一反十五郎太夫乍　一反ヨ十　有冨乍□

同坪二反十内ヒヨ十

五郎二郎乍一反卅ヨ十　元卅　大王井□

元卅　諏訪田元卅　元卅

孫太郎乍廿口　有冨乍卅ヨ口　松乍廿

元卅　元一反久玉御節供佃　元卅五郎太郎乍□

平五郎乍卅ヨ口

元卅内　元十口不六郎三郎乍乍　鈒崎元卅五郎太郎乍廿□

有冨乍廿口ヨ口

杉木田元二反卅内年不廿　小櫛毛元一反十　下原田元一反卅

太夫太郎乍二反ヨ十　太夫五郎乍一反ヨ口孫四郎□

元卅若宮田

野稲畠作二段卅　元二反權現御節供佃

十一月一日大始良村作六町七段廿　拾壹町二段

元五段内ヒヨ二反廿　寺前作一反十口ヨ十〻〻地□

元二反廿八幡神田　柳田

元二反廿河成廿ヒヨ十　樋口作一反廿ヨ十口　成□

元三反内河成一反ヒヨ十　薗田作一反廿ヨ口　介九□

元一反皆不　水副

元一町内河成二反　平田作四反卅ヨ口　ヨ一反　成冨□

同坪　諏訪　同坪一反　同坪六反

一反　諏訪神田　介三郎入道乍卅成冨乍四反卅ヨ□

元一反卅口内山成十口ヒヨ十　山下作一反〻〻

刑部太郎入道乍一反ヨ口歳元卅内山成廿ヒヨ十　元一反十山成十ヒヨ十

万在六郎四郎乍十　万歳乍卅ヨ口

元一反内ヒヨ十　元一反廿内山成廿　元一反内水ヨ十

万歳乍卅ヨリ　同人乍卅ヨリヒヨリ十　同人乍廿ヨリヒヨリ十

元一反廿内山成廿水ヨリ十ヒヨリ十元一反廿内水廿ヒヨリ元一反廿ヨリ内河成ヒヨリ□

左馬四郎入道乍廿ヨリ右馬入道乍卅ヨリ万歳乍卅ヒ十□

万歳

歳廿定不廿

元六反ヒヨリ十ヨリ城東作二反ヨリヨリ廿　弁□

元一町内四反内　左薗河成廿ヨリ不一反　弁□

一反卅内ヒヨリ十河成ヨリ　同坪一丁二反廿ヨリ一反

孫八乍廿ヨリヨリ　成冨乍四反卅

元一町内河成卅當不卅年不卅ヒヨリ一反　平岡作五段卅ヨリ一反十　成□

元廿内水ヨリヒヨリ　躍橋作十ヨリヨリ　介□

西迫

元廿内河成ヨリヒヨリ　元廿内河成十　元廿内河成ヨリ□

介九郎乍□　井析　介六乍十ヨリ□

元卅内河成ヨリ　元一反十内河成十ヒヨリ　元一反十内水ヨリヒヨリ□

介六乍中ヨリ　同人乍卅ヨリヨリ　同人乍皆ヨリ□

元二切二反廿内

介九郎乍一反卅ヨリヒヨリ十　元一反ヒヨリ十　元二切二反内ヒヨリ十

介六乍卅ヨリ　成冨乍一反廿ヨリ□

元二切二反内ヒヨリ十　元二反内ヒヨリ十　元一反ヨリ

成冨乍一反廿ヨリヨリ十ヨリ　成冨作一反廿ヨリ廿　同人乍卅ヨリヨリ十□

元一反十内水ヨリヒヨリ　元一反十内水ヨリヒヨリ十　元一反十内水ヨリヒヨリ

成冨乍卅ヨリヨリ十ヨリ　同人乍卅ヨリヨリ　同人卅ヨリ十

元二切三反内河成定不十ヒヨリ廿　元一反内ヒヨリ元二反内ヒヨリ十□

成冨乍一反卅ヨリ十ヨリ　右馬太入道乍卅ヨリヨリ同人乍一反□

同日□　所々新開

元二反卅内河成廿　元二反廿河成一反　元卅河成卅

成冨乍二反ヨリ廿　同人乍一反十ヨリ十　同々人乍十

得久元四反内水ヨリ卅ヒヨリ□

元十　成冨乍□

介九郎乍十才卩　元八段内河成一反ヒ才廿

四郎三郎入道乍五反十才卩冊

元小丸一反廿内ヒ才十卩　元二反　元冊不

成冨乍冊才卩十　同人乍一反冊才十　同人在乍

元一反内□ヒ才卩才卩　元廿不介太郎左乍　二切元一反冊

右馬太夫入道乍冊　成冨乍一反廿才十

元冊岩荒　南丸元四反

成冨乍三反十才冊　元一反廿河成廿□

同人乍冊才十

元冊

成冨乍冊才卩

新開

元廿　元廿　元廿

神田　井新　成冨乍廿才卩

海老子丸元二反廿河成廿才廿才卩　元廿　元一反

成冨乍一反冊　馬太夫乍廿才卩　成冨乍冊才卩

元一反内山成十才十卩　岩傳四元廿成冨乍廿才卩元廿内山成卩

右乍冊　元冊四郎五郎入道　四郎三郎入道乍十

384

「氏久公御譜中」

「正文在帖佐衆富山清右衛門義清」

多年無二忠節所存内也、隨而大姶良村内當知行地頭得分事、先度爲給分相計了、雖然於當方無他事、此段有相續者、成本領之思、知行不可有相違之狀如件、

永和二年二月十一日　氏久(花押)

大姶良左近將監殿

385

『入來家臣武光氏文書』

讓与　新兵衛尉兼我所

薩摩國高城郡本万得名惣領職加弁済使幾定、

同國宮里郷床並田地薗惣領職今者号武光名、元権次郎名、

同國薩摩郡別苻前田地四段

此外當國他國不知行所領在之、依世上動乱也、鎭西落居之時、可申給也、心賢之(武光兼氏)讓得、可任心呈(重兼)狀也、

右、所領所職等、重代相傳地也、然間相副次第本證文御

下文御下知、讓与新兵衛尉兼我者也、限永代可令知行、兼又弥乙丸女子等後家田地薗讓与候旱、女子後家一期之後者、惣領可令知行、弥乙丸無子孫者、同前、御公事支配之外、不可有違乱、仍讓狀如件、

永和四年二月十九日　　沙弥心賢（花押）

【右ノ裏書】「任此讓狀之旨、知行所不可有相違也、

永和四年二月廿二日　　伊久（花押）」

386

「國史　久哲公　齡岳公」

四年戊午、南朝天授四年、春、今川滿範召　齡岳公、弗往、將伐我、二月二十二日、滿範遣禰寢氏書、使發兵、（據小松氏文書）二十八日、　齡岳公使大禰寢雅義嗣大禰寢院總辨濟使職、領郡本村田園、如其父道日讓狀、（據齡岳公舊譜、志志目正兵衛系圖、雅義父六郎左衛門尉通義法名道日、）三月十八日、今川了俊與　久哲公書、使督薩摩國地頭御家人會師、（據久哲公舊譜、久哲公復與了俊連和、）初　久哲公因今川了俊求豊後井田郷、其舊邑也、（事見上應安七年、）了俊言諸幕府、既許之矣、而未施行、秋八月二十八日、了俊遣豊後國主大友式部丞親世書、使授　久哲公井田郷、（同上、）是歳今川了俊菊池武朝戰於肥後託摩原、（據大日本史菊池氏傳、）久哲公遣其弟碇山三郎左衛門尉久安及新納左近將監助了俊、二人戰殁、（據久哲公舊譜、按久哲公應永二年遣大友修理大夫親世書曰、往年弟三郎左衛門尉及新納左近將監從今川了俊、死於託摩原之戰、而大日本史菊池氏傳、武朝與今川了俊戰於託摩原在是年、故書於此、）新納左近將監、實久之弟也、（據島津支流系圖、碇山久安亦稱碇山金吾、齡岳公舊譜・山田聖榮自記云、齡岳公使本田氏親守姫木城、税所介引球麻和泉之兵襲之、城中見兵僅四十人、氏親與碇山金吾及小田・北村・上井・篠原等禦之、碇山金吾揮刀斬人、鋒端中大石角、截作両段、後人呼為金吾石、此事無年、故附於此、島津支流系圖、將監代恕翁公之肥後、死於白河、與久哲公舊譜不合、疑以傳疑、亦附此、）

387

「正文在文庫」「伊久公御譜中ニ在リ」

讓与　伊作女房分

薩摩郡内羽嶋、永吉光冨名内あかさうつのかりや薗、同門付水田、同郡内中津町壹町、延時名内薗壹所、山門院内青木原村事、

右、田薗等ハ、一期之間所讓与也、聊無他妨可令知行也、仍讓狀如件、

永和四年二月廿八日　　伊久（花押）

388

「伊久公御譜中」

「寫在二三之巻」

薩摩國地頭御家人等遲參輩事、不日可馳參之由、可被相觸之狀如件、

永和四年三月十八日　　（今川了俊カ）沙弥在判

389

嶋津上總介(伊久)殿

「二之巻統目裏判」(今川了俊)「三之巻統目裏判」(渋川満頼)

(花押)　(花押)

「正文在文庫」「伊久公御譜中ニ有リ」

嶋津上總介伊久申豊後國井田郷事、爲本領之間、先渡被仰之處、不事行云々、太不可然、所詮、不日沙汰付下地於伊久代、可被執進請取之狀、依仰執達如件、

永和四年八月廿八日　沙弥(今川了俊カ)在判

大友式部丞(親世)殿

390

「氏久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋家臣喜入衆志々目正兵衛義辰」

大隅國大祢寢院惣弁濟使職并郡本村田畠以下事、任親父道日讓狀之旨、不可有領掌相違之狀如件、

永和四年二月廿八日　氏久(花押)

惣弁濟使伊勢介殿

391

「見于日本史後亀山天皇紀」

一天授四年(北朝永和四年也)戊午九月、征西將軍懐良親王、菊池武朝・左近將監・清原親善與今川貞世戰于託磨原、破之、

(肥後成道寺所蔵、菊池武朝申狀、清原親善申狀)

392

「見新納久吉傳」

一爲元久主之名代發向肥後州、屬將軍方、於白川遂戰死矣、

393

「見于南山巡狩録　巳下伊地知季安考」

一永和四年九月、了俊と菊池武朝と肥後國詫間ヶ原に迎へ戰ふ、宮方利あらず、(菊池武朝申狀、冨蘆記)此事にて考れハ、久安も久吉も詫間ヶ原ノ合戰に討死せられしハ、此永和四年戊午九月の事ならん欤、さあれハ久吉傳に　元久公の名代とかきしハ誤也、　氏久公の御名代なれとも、久安ハ伊久公の御名代ならん、左ありて永和四年より文政十年丁亥迄四百五十年、弘化四年迄ハ四百七十年ニ當る欤、

394

「應永記」「伊久公ヨリ大友殿江被遣候御案文ニ見ユ」

一肥州託麻原ノ御合戰之時ハ、舎弟三郎左衛門尉・新納ノ左近將監御目之前ニ而討死仕候、　ヶ様之忠節云々トアリ、

395

「聖榮自記」

一其後御舍弟上總介殿御名代として碇山金吾、元久より新納將監、此兩人ハ、肥後白川合戰ニ將軍方ニ而討死有云々、

396

永和四年戊午 北朝の天授四年なり、

九月十日、碇山三郎左衞門尉久安 久哲公よりハ久安、鮯岳公よりハ久吉を肥後に遣ハされ、今川了俊に屬きて菊池武朝と託間原に戰ひ死之、日本史 新又ハ南山巡狩録に武朝申狀等を引き、皆此月なり、參照すへし、

納左近將監久吉 實久の弟なり、譜に恕翁公より遣ハされ、肥後の白河に戰死とあれとも、託麻原の誤にて、時も鮯岳公の時に當れり、

永和中、本田彌七 鮯岳公に從ひ、渋谷と戰て死す、永和中、山引合戰とあれは、姑く此に置くなり、

田式部彦七忠繁 亦山引合戰の時戰死とあり、

397

『池端氏文書』

讓与　別當丸

大隅國祢寢院南俣内田薗事

池緣薗壹ヶ所、馬門田并樋渡畠田河原小薗壹ヶ所、

右、於田薗等者、道種相傳私領也、然相副関東御下文六波羅御施行鎭西御下知手継以下之次第證文等、限永代、別當丸所讓与也、仍爲後證狀如件、

永和四年十月廿九日　　沙弥道種（花押）

398

「比志島氏家蔵」

滿家院内比志嶋名地頭職事、入道殿御免之上者、雖無異儀候、觀了一筆之事、被望候之間、重爲給分可有知行之狀如件、

永和四年戊午十一月十九日　　沙弥觀了（伊集院久氏）（花押）

比志嶋河内權守殿

399

「國分宮内澤氏蔵」

正宮公文所

補任　惣四至内検断具官職事 『康俊之時』

田所検校兼御供所検校永穩

右、以彼人、所令補任當職也、早抽參直之忠勤、可被致公平之沙汰也、所補任之狀如件、

永和四年十二月十三日

留守沙弥判アリ

400

「大口高城氏蔵」

ゆつりあたふ釈迦王所

薩摩國高城のこほり大河村一曲・河宿一曲・富滿一曲・船津田壹町子兼ほんきう・吉枝前田五段・網津内井尻壹町・ハしさき一丁・圓海房屋敷小三郎本給・中郷内五郎か屋敷一宇、

右、しよりやうハ、眞宗ちうたいさうてんの所なり、しかるにゐいたいをかきて、ゆつりあたふところなり、そうりやうのめいをそむかすして、御くうしハせんれいニまかすへし、もし男子なくハ、きやうたいともの中ニ心さしあらんニゆつるへし、よてゆつりしやうくたんのことし、

永和二年十二月十九日　　眞宗(花押)

401

「引カヘシニ」「法名真佛」

ゆつりあたふ重眺所

薩摩國たきのこほり、温田水方尻無三郎丸曲一、國分万徳一曲、新開壹町草道名内在、馬場西屋敷一宇、同國東郷之鋒(芥)淵村内六田五段ゐしの前三反、同しやうの屋敷一宇、筑前國合屋目尾内山田壹町、同竹内屋敷一宇、相模國おち合の郷内野邊入道か屋敷一宇、

右、所領ハ、眞宗ちうたいさうてんのところなり、しかるにゐいたいをかきて、ゆつりあたふ所也、そうりやうのめいをそむかすして、御くうしハせんれいニまかすへし、もし男子なくハ、きやうたいともの中ニ心さしあらんニゆつるへし、よて讓狀如件、

永和二年十二月十九日　　眞宗(花押)

402

「國史　久哲公」

康暦元年己未、是年三月改元康暦、自二月以前猶是永和五年、南朝天授五年、春、今川了俊與久哲公筑前須江荘半分、三月十三日、使中野入道・那知入道授地、據久哲公舊譜、二十二日改元、據和事始、冬十一月十一日、禰寢久清攻西俣及大姶良城、據小松氏文書、齡岳公取西俣・大姶良見上巻康安元年、

403

「載伊地知氏譜　藤野文書四十三通ノ内」

筑前國須江庄半分事、任預狀旨、沙汰付嶋津上總(伊久)介代、可取進請取狀之狀如件、

永和五年三月廿三日　　沙弥(今川了俊)(花押)

中野入道殿

那知入道殿

「此文書、伊久公御譜中ニ在リ」「正文在文庫」

404

康暦元年己未 三月改元、

鹿屋周防介兼永 永和の頃宮方に属き、三俣高城にて戦死とあり、日向記に此年肝付か守れる三俣和田城を陥すとも見ゆれは、其時の戦死歟、

「右殖國名蔵中」

405

「越前島津氏九代範忠譜中」

嶋津五郎左衛門尉代帯刀左衛門尉景忠申軍忠事

右、度〻自紀州御發向以來、至南都并江州粟津御陣、属當御手致忠節旱、然早預御證判、爲備後證、言上如件、

康暦元年卯月　日

承了（花押）

406

『御領日州大田原村新助蔵本』

日向國都之城之合戰之時、致忠節候条、尤以神妙、可注進之此旨狀之如件、

康暦元年十月七日　　兵部大輔判（今川満範）

土持大塚左近將監（栄勝）殿

407

『野田感應寺文書』

相模州東勝寺住持職事、早任先例、可令執務給之由、被仰下所也、仍而執達如件、

康暦二年三月朔日　　細川武蔵守頼之判

祖向西堂

408

「國史　久哲公」

二年庚申、南朝天授六年、秋七月十四日、今川了俊使禰寝久清領本邑如故、據小松氏文書、本邑謂禰寝院・鹿屋院・下大隅等地、復使久清權領大隅始良荘、同上、久哲公與今川了俊絶、據小松氏文書、今川了俊康暦二年七月十四日、報禰寝氏書、冬十月二日、禰寝久清抜鷹栖城、據小松氏文書、今川滿範屯荘内北郷城ヶ崎、將復攻都城、十六日、遺禰寝久清書戒師期、且褒美鷹栖城之捷也、同上、都城郷川東村有地名城ヶ崎、

409

「大口高城氏蔵」

ゆつりあたふ

しやかわうとのゝ所

一所、ちくせんの國ほなミのしやうくわんのをミやうのうち、あての木のした田一丁事、

みきのところは、よりしけよりさうてんする所也、よて後日のためニせうもんあひそへてゆつりあたうるしようくたんのことし、

かうりやく二ねん十二月五日

しやうをう（花押）

410

『調所氏譜中貞恒傳』

康暦三年辛酉、先是　齡岳公使本田氏親攻取姫木城及清水城等、正八幡神官等亦悉服之、至是二月十三日、　公賜主神司書、日下蝕滅、僅余藤字、莫知為誰、然據其使氏親為之坪付、應必公也、書竢考爾、以國衙料田捐薦于守公神、乃使氏親爲坪付、以授之、凡貳町八段、賜書所謂主神司殿、推時蓋貞恒也、

411

『全文書』

寄進

依有敬神爲國□令知行、守公神□御油御供田等□所奉寄進之狀□

康暦三季二月十三日　藤原□

主神司殿（貞恒）

（花押）（統目）

412

大隅國ゝ衙析田、且寄進坪付□

五段（小河院功徳丸内号槻木田）　一所四段二□（御油薗）

三段（曽野郡得丸名内八坪）　一所三段同

五段（松長有）　武安名内青毛田　三段一（王丸名内反越田）

五段（姫木有）　桑東郷内祇薗田

右者、重寄進田薗等坪付之狀如件、

康暦三年二月十三日　氏親□

413

「國史　齡岳公」

永徳元年辛酉、是年二月改元永徳、正月猶是康暦三年、南朝弘和元年、　春二月二十四日改元、據和事始、夏五月二十日、　齡岳公賜弟子丸若徳大隅嚼吵郡智尾名、　據齡岳公舊譜、弟子丸氏莫詳其所自出、建久中田所検校建部宗房領大隅嚼吵郡弟子丸五町、若徳豈宗房之後世乎、郡村高辻帳、嚼吵郡清水郷有弟子丸村、智尾名不詳、弟子丸村今有乳尾権現社、在地頭館南八町許、讀曰知乃遠、乳智和讀並曰知、六月朔日、禰寢久清抜佐多城、據島津支流系圖、小松氏文書、按是時佐多領主曰豊後守氏義、氏義、左馬助忠直之子也、忠直見延文四年、佐多氏領佐多、見観應二年並係上巻、七日、今川了俊與久清書、褒美佐多城之功也、據小松、氏文書、二十六日、慈冬侵宮古城、焼村落刈早稲、同上、宮古城即都城、秋七月四日、今川滿範取末吉城置兵戍之、而與岩河城相應、以絶志布志・宮古城之道、七日取池平、使土持氏衆守之、十七日、進向都城復刈早稲、十八日還軍、北郷誼久出輕卒追擊之不克、是日相良前頼與税所介祐義合兵、下於奴止利（ヲノトリ）城、同上、岩河

某守手取城、見上巻延文四年、此云岩河城豈謂手取城乎、池平在荘内中郷、末吉郷多故城墟、満範所取不詳的為何城、於奴止利城在大隅界、時係本田氏所領、遺墟不詳、按山田聖榮自記云、税所介與相良氏俱據曽於郡、齡岳公屯國分笑限對墨三年、其後公攻姫木城拔之、使本田氏親守之、又攻清水城拔之、與税所介戦於湯之峰、此事無年、今因税所介事、而附録之、笑限遺墟在國分郷八幡宮東、清水城遺墟在清水郷地頭館東南三町、湯之峯不詳所在、舊跡見分帳、姫木城北、與日當山對岸處、稱為伊乃武禰、亦為伊乃武禮、疑是湯之峯之訛、九月三日、今川了俊與禰寢久清禰寢北俣四村、同上、村地闕、四是歳齡岳公附北朝、據小松氏家蔵永徳元年十月十一日管領斯波左衛門佐義将遺薩摩日向大隅地頭御家人書、

二年壬戌、南朝弘和二年、夏四月、

後圓融天皇傳位於

後小松天皇、據日本王代一覧、

三年癸亥、南朝弘和三年、事缺不書、

414

「弟子丸氏文書」

若徳丸

大隅國曽於郡内智尾名事、就為由緒之地、先日雖宛行、其狀紛失云々、然者重所相計也、仍任先例、可致沙汰之狀如件、

康暦三年五月廿日　　玄久(氏久)(花押)

弟子丸若徳殿

「此文書、氏久公御譜中、正文在吉田衆弟子丸右京」

415

「佐多豊後守氏義譜中」

永徳元年六月一日、禰寢氏掠取佐多城、

416

『入來院氏文書』

薩摩國河邊庄地頭職事、雖預置谷山・鮫島等、為恩賞地、守護人代々安堵之上者、任御下文旨、澁谷車内相共令遵行伊久代(島津)、可執進請取、至谷山・鮫島等者、以替地可申行上者、先可去退之由、可被仰也、仍事書一通遣之狀如件、

永徳二年五月卅日　　沙弥(今川了俊)(花押)

澁谷清敷(重頼)殿

「包紙」澁谷清敷殿　　了俊

417

『肝属河内守兼氏譜』

永徳二年壬戌、南朝弘和二年、六月七日、公使大寺彈正忠保音入道幸阿等、命北原主計入道、為姶良荘末次田中寺寺務職、

418

『藤野氏蔵本』

大隅國姶良庄末次内田中寺々務職事、所有御計也、任先例、可被致沙汰之狀如件、

永徳二年六月七日　　慶安(花押)
「大寺彈正忠保晉入道幸阿コトカ」
幸阿(花押)

北原主計入道殿

「此文書、氏久公御譜中ニ在リ」

419

ゆつりあたふつねみのほんミやうのうちはんふんの事

一つほつけ以下別紙にこれあり、

右、件のミやう田ハ、康俊かまこほくい丸にゆつりあたふるところなり、しかるに永代りやうしゆの文なとをのすへしといへとも、本家の御りやうたるうゑハ、そのきなし、あに四らうかしよめいにしたかひて、をんふんとして彼地をちきやうせしめ、四らうにほうこうをいたすへし、若ふちうはらくろのきあらん時ハ、一期のゝちたりといふとも、彼所をめしはなち、四らうかはからひたるへきなり、但康俊か一期の後ハ、御ねんく其外のなし物以下、せんれいにまかせて、其さたをいたし、下地においてハ、ちきやうすへきなり、若此しやうをそむかんともからあらは、康俊か子孫のきあるへからす、仍爲後日一期のゆつり状如件、

永徳三年五月三日　　康俊(花押)

420

「皇徳寺文書」

榎田のきしんしやうまいらせ候、比丘尼心知末代まて、とふらハれ申候ハんために、この田きしん申候、ねんころに御おきふミ送りて、末代まて御わすれなく、御とふらい候へく候、

永徳三年十一月十五日　　比丘尼心知(花押)

皇徳寺
まいる申候

421

「仝」

皇徳寺寄進本縁

禪定比丘戒心知使者逆修志趣之事

夫以眞如廣不變也、生滅無邊常住也「末略」「本書ノマヽ」

永徳三年癸亥十一月十五日

大檀那薩摩守忠信(花押)

永林菴大願主禪定比丘心知(花押)

422

『入來院氏蔵文書』

任御親(重名)父之讓旨、御知行之事存知仕候了、若於此内違乱妨之時者、□不甲斐候、可加扶持申候、仍状如件、

永徳三年十二月廿四日　　重頼（花押）

（渋谷道賢）
向弥太郎入道殿

（表紙）

元久公
伊久公　自至德元年
氏久公　至應永元年

前編　舊記雜錄　巻三十

自至德元年至應永元年

恕翁公御治世

永德三　至德三　嘉慶二　康應一　明德四　應永三十四

423

「國史　久哲公　齡岳公」

至德元年甲子、是年二月改元至德、正月猶是永德四年、南朝元中元年、春二月二十七日改元、據和事始、今川了俊遣宮内大輔三雄屯肥後二見、秋八月、澁谷五郎虎五郎改稱五郎、重賴如二見、據入來院主馬文書、至德二年二月四日重賴言上狀云、去年八月以來戍二見、則如二見、在是年八月明矣、閏九月、久哲公遣其子守久如二見、據定山公舊譜、閏九月十二日昌和上島津殿書、昌和書無年、然書中云、前日賢息至軍、且言託齋藤六郎左衛門殿姻親昌清侍者致此、齋藤六郎左衛門尉者、今川了俊執事人、從了俊在筑紫、見上永和元年、則昌和上島津殿書、蓋了俊為筑紫探題時事也、了俊以應安四年如筑紫、應永初還京師、其居筑紫二十餘年矣、而據明時館長曆法、自貞治至嘉吉八十年之間、置閏九月者三、一在貞治四年、一在至德元年、一在嘉吉元年、而貞治在應安之前、嘉吉在應永之後、則昌和閏九月十二日書、在是歲至德元年明矣、且定山公既薨於永和二年矣、齡岳公方與了俊絶矣、然則昌和書上島津殿、蓋久哲公賢息則守久也、先史載諸定山公譜、考欠精審、冬十二月九日、左衛門佐與薩摩地頭御家人書曰、相國寺領三俣院事、宜屬守護盡忠節、又與大隅地頭御家人書亦如之、據恕翁公舊譜、將軍家是時斯波義將為管領、管領斯波左衛門佐義將遣薩摩大隅日向地頭御家人書、見上永德元年注、此云左衛門佐蓋義將、下文倣此、二書並云至德元年十二月九日、則是齡岳公在位之中也、舊譜置諸恕翁公譜謬、

424

「元久公御譜中」

志布志者雖爲亡父　氏久以降之所居、欲去是移麑島、然則東福寺城雖曰佳例、宅地隘狹、又城脇築地之宅亦偏地、是以更占宅地於清水、且限實方之川、爲土石勞築城郭、則東南有川流有嶮涯、西北亦深谷也、何地如之乎、一族老臣等共以議定矣、既終土木之功、則攜妻子自志布志移麑島矣、貴賤上下祝萬々歲、庶民歌市抃野無如于此時也、

425

「近世略御系圖」

至德年間、去志布志移鹿児島本城、本城、大興寺後山、又云清水城、

426

「阿多氏系圖抄」

町田氏五郎忠良弟

久清

號阿多　五郎　飛彈守

十三　十三　十三　十一　十二
殿　十二定

十　十　十二　十三　十
平田新右衛門尉　五定

十一　十二　十　十
伊地知彦六　三定

十二　十二　十二　十二　十
又三郎殿　七定

十　十二　十一　十　十二　十
嶋津修理亮殿　五定

十一　十　十一　十　十
上井神五郎　二定

十一　十　十　十
肥後法師丸　一定

検見

嶋津九郎左衛門入道殿

427

「正文在志布志之士阿多飛彈守忠縣」

大隅國大祢寢院郡本永吉内田薗（注文別紙有之、）事、爲給分所相計也、任先例、可致沙汰之狀如件、

永徳二年七月十日　　孝久（元久）（花押）

町田五郎（久清）殿

428

奉寄進　薩摩國谷山郡山田村皇徳寺田地事

右田地者、桑迫井上薗一ヶ所、同前田一町二段、岩瀬戸二反十、河原田卅、合一町五段者、永代可爲寺領之旨実也、仍寄進狀如件、

至徳元年十月　日　　薩摩守忠信（花押）

429

「載山田忠經傳」

▒▒十▒▒十▒▒

犬追物手組　至徳元十一十六

430

相國寺領日向國三俣院事、早属守護（元久）手、可致忠節之狀、依仰執達如件、

至徳元年十二月九日　　左衛門佐（義將也）（花押）

薩摩國地頭御家人中

「元久公御譜中、正文有之トアリ」「此正文在文庫」

431

「仝案ニテ宛」

大隅國地頭御家人中

「元久公御譜中同断」「正文在文庫」

432

『頂峯院文書』

『張紙ニテ』「氏久御夢想御書物ニ付御判在」

權現領　　坪就

島津修理亮氏久至徳元年依夢想、正應元年薄紙半枚書付申、于社頭納、後日之不審ノタメニ付置ナリ、

至徳元年十二月　日　　榮永在判

433

「島津國史　久哲公　齡岳公」

二年乙丑、南朝元中二年、春正月、相良前頼叛探題、卽八代、而與　齡岳公　久哲公連和、　二公遣代官助前頼、將攻宮内大輔三雄、十日、三雄退保肥後佐敷、據小松氏文書、是時菊池武朝奉征西將軍宮、據肥後八代、十六日、澁谷重頼如佐敷、三雄使重頼救水俣城、據入來院主馬文書、晦日、幕府賜　久哲公書、使討鎭西凶徒、據久哲公舊譜、二月七日、今川了俊與澁谷重頼書、褒嘉水俣之軍功也、據入來院主馬文書、冬十月十七日、左衞門佐遺今川了俊書、使　齡岳公　久哲公擊八代、據小松氏文書、十二月十五日、　齡岳公　久哲公講犬追物、射者十二人、第一位　島津殿、當是久哲公、第二位陸奥守殿、即齡岳公也、第三位市來殿、蓋筑前守忠家、第四位伊集院助三郎、第五位市來千代犬丸、市來次左衞門系圖、筑前守忠家子備後守家親、小字千代犬丸、第六位伊集院左近將監、島津支流系圖、伊集院忠□庶長子曰伊鹿倉忠貞、忠貞子久矩稱左近將監、　第七位日置肥前守、島津支流系圖、伊集院族有日置氏、而日置肥前守不載、　第八位伊集院七郎、第九位鹿屋周防介、鹿屋出自肝付氏、第十位市來右京亮、第十一位伊集院式部少輔、第十二位伊集院次郎、檢見島津上野守殿、　島津殿射中十四、射音石、陸奥守殿二十一匹、市來殿九匹、伊集院助三郎十二匹、市來千代犬丸十匹、伊集院左近將監二匹、日置肥前守三匹、伊集院七郎四匹、鹿屋周防介八匹、市來右京亮二匹、伊集院式部少輔九匹、伊集院次郎八匹、　據齡岳公舊譜、先史市來源右衞門曰市來殿、即吾家筑前守忠家也、以齡岳公之壻故處第三隅、其以市來殿為忠家、則是以為齡岳公之壻、則妄其弁、已見上應安五年、島津支流系圖、大夫判官頼久子親久稱上野守、親久子家□亦稱上野守、此云島津上野守蓋親久若家□、犬追物班列、第一位為第一隅、第二位為第二隅、第三位為第三隅、第四位為第四隅、而第一隅與第二隅相對、第三隅與第四隅相對、第五位第九位第十位第六位、凡四位相比、在第一隅第二隅之間、第七位第十一位第十二位第八位、凡四位相比、在第三隅第四隅之間、而第五位與第七位、第九位與第十一位、第十位與第十二位、第六位與第八位、亦各相對、按得佛公以來、蓋世講犬追物矣、而班列始見於此、故備書之、是後直言其公講犬追物而已、

434

『入來院氏文書』

自二見陣（肥後）於佐敷、令堪忍被致忠節候、爲公私感入存候、則京都ニ注進申候間、定可有御感候欤、大將軍弥御扶持候者、悦入候〳〵、依嶋津人々振舞、追可申談候、毎事連々可承候、於今度一向うちたのみ申候上者、無是非候、恐々謹言、

『至徳二年』正月廿八日　　了俊（花押）

澁谷五郎（重頼）殿

「包紙」澁谷五郎殿　　了俊

435

「正文在文庫」

（義満）
（花押）

鎭西凶徒退治等事、弥致忠節者、可被感思食之狀如件、

至德二年正月晦日

嶋津上總介（伊久）殿

「伊久公御譜中ニ在リ」

436

『入來院氏文書』

澁谷五郎平重賴謹言上

右、自去年八月、馳參二見之御陣、致忠節之處、給身一人之暇歸國仕、親類若黨等不殘令在陣、致警固、今年正月十日夜、佐敷仁御退之間、彼等御共仕了、重賴不遷時日、同十六日馳參佐敷、致宿直之處、和泉・水俣依難儀、爲手宛可罷向之由、被仰下之間、馳越彼在所、致合力、相殘親類若黨等勵忠勤、同晦夜御馳佐敷御陣、天草仁御渡海、難儀至極時分、彼親類若黨等、或者御共仕、或者留跡勢、楯籠佐敷之城、成粉骨之思、抽軍功之條、御見知之上者、下賜御證判、爲備末代、粗言上如件、

至德二年二月四日

承了（花押）

437

『頂峯院文書』

奉加　冠嶽山社壇

馬一疋

右、爲彼御寶殿造營、奉加如件、

至德二年十月十一日

『姓氏未考』
能登守基久（花押）

438

『冠嶽文書』

奉加　冠嶽山社壇

馬一疋

右、爲彼御寶殿造營、奉加如件、

至德二年十月十一日

『元久公初ノ御名』
藤原孝久（花押）

「此書、樺山氏四代孝久譜中ニアリ、元久公初御名孝久ニテ此御判多シ、然レハ樺山氏ハ誤カ」

439

『入來院氏文書』

筑前國比（比伊郷）郷内本知行分事、如元令遵行之狀如件、

至德三年正月六日

『了俊』
沙弥（花押）

澁谷一族中

440

『入來院氏文書』

水俣城合力之由、大將令注進之間、所感悅也、向後堅被致合力者、弥可爲忠節上者、且所令執申京都也、定可有御感欤、重尚依注進、可被仰之狀如件、

至徳二年二月七日　　沙弥（花押）『今川了俊』

澁谷五郎（重頼）殿

441

「阿多氏系圖五郎久清譜中」

「正文在志布志之士阿多飛彈忠縣」

讓与　薩摩國阿多郡多布施内五大院河縁、五反

右、件院田者、久光爲重代相傳之所領之間、限テ一期仁、所讓与婦ニテ候者也、一期ノ後者、可被讓孫仁テ候米壽仁也、但於社家年貢等仁、任本證文之旨、無懈怠面〻仁令勤仕、無他妨可知行也、仍爲後日讓狀如件、

至徳二年乙丑六月一日

嶋津恒吉　藤原久光（花押）

442

『加治木鹿屋仁右衛門文書』

犬追物手組事　至徳二年十二月十五日

嶋津殿　十疋　　市來殿　九疋

市來千代犬丸　十疋　　日置肥前守　三疋

鹿屋周防介　八疋　　伊集院式部少輔　九疋

市來右京亮　二疋　　伊集院次郎　八疋

伊集院左近將監　二疋　　伊集院七郎　四疋

陸奥守殿　廿一疋　　伊集院助三郎　十二疋

検見

嶋津上野守殿

「此手組、氏久公御譜中ニハ、在加治木衆市來太郎左衛門及高山衆市來主膳トアリ」

443

「國史　齡岳公」

三年丙寅、南朝元中三年、夏四月十四日、　齡岳公使禰寢熊夜叉丸、嗣父職領大禰寢院總辨濟使職及郡本村、熊夜叉丸、雅義之子也、據齡岳公舊譜、五月十三日、今川了俊使澁谷薩摩守、領伊集院久氏舊邑三分之一、二十二日、宮内大輔守政使澁谷左馬助、領伊集院久氏舊邑三分之一、　據入來院主馬文書、按渋谷實重八世孫、曰薩摩守重信、而明徳三年七月二十五日、東郷諏方社下宮御戸再興棟札、有渋谷薩摩前司入道重佛・渋谷左馬助重光、重佛即重信法名、此云渋谷薩摩守蓋重信、上有宮内大輔三雄、此有宮内大輔守政、二人花押相類、似是一人、豈三雄更名守政者乎、俟考、　冬十月二十九日、今川了俊與澁谷左馬助書、使權領薩摩宮里地頭職、同上、□月十日、　齡岳公以富山土佐□、爲大隅大

禰寝郡本領家職、（據齡岳公舊譜、志志目正兵衛系圖、大禰寝伊勢介雅義弟曰富山土佐介義勝、此云富山土佐□疑即義勝、）十二月五日、　齡岳公使波見筑後介領波見村如故、
又賜肝付郡野崎村津曲名之田、（同上、肝付典膳文書、肝付氏族有新左衛門尉兼任者、嘗為波見村弁濟使、筑後介疑即兼任之後、野崎村有地名津曲、在高山地頭館東北一里許、）

444

「氏久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋家臣喜入衆志々目正兵衛義辰」

大隅國大祢寝郡本領家職事、依由緒、爲給分所相計也、
任先例、可致沙汰之狀如件、
至徳三年□月十日　　沙弥（氏久）（花押）
富山土佐□殿

445

「全御譜中」

「正文全上」

大隅國大祢寝院惣弁濟使職并郡本村田畠以下事、任親父
雅義譲狀之旨、不可有領掌相違之狀如件、
至徳三年卯月十四日　　玄久（氏久）（花押）
惣弁濟使熊夜叉丸

446

『入來院氏文書』

伊集院入道（久氏）跡三分一事、爲恩賞、可令知行之狀如件、
至徳三年五月十三日　　沙弥（今川了俊）（花押）
澁谷薩摩（重信）守殿

447

『入來院氏文書』

伊集院入道（久氏）跡事、面々御申候間、爲恩賞申行候、目
出候、
一當陣事、赤山城と河尻をとりきり候ハヽ、二三日中ニ
可退治候間、其用意仕候最中ニて候、かたきうきあふ
へきよし申候間、いかにもして此時、武朝（菊池）以下をうち
とりたく候間、もらし候ハぬやうに方便仕候也、合戰
候ハヽ、必定九州の落居たるへく候間、可御心安候、
其間其方の事、一向御一家中をたのミ申候、ともかく
も御方便候て、名和事可有御扶持候、たのミ存候外無
他事、合戰者一兩日たるへく候間、やかて〳〵左右を
申へく候、又種々の物共給候、返々御志之至悦入候、
いつれも〳〵大切候、恐々謹言、
（至徳三年）五月十三日　　了俊（花押）
澁谷薩摩（重信）守殿　御返事

448 『入來院氏文書』

薩摩國嶋津伊集院大隅(久氏)入道跡參部壹(當知行)事、爲闕所上者、知行不可有相違之狀、依仰執達如件、

至德三年五月廿二日　宮内大輔守政(花押)

澁谷左馬佐(重光)殿

449 『入來院氏文書』

薩摩國宮里郷地頭職事、依大忠所預置也、於御下文者、可申行上者、可令知行之狀如件、

至德三年十月廿九日　沙弥(『今川了俊』)(花押)

澁谷左馬助(重光)殿

『上包』澁谷左馬助殿　了俊

450 「氏久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋」

大隅國肝付郡野崎村内津曲名以下田地(注文有別紙)事、爲給分所相計也、次波見村事、爲由緒地知行事、令存知旱、任先例、可致沙汰之狀如件、

至德三年十二月五日　玄久(氏久)(花押)

波見筑後介殿

451 「財部日光神社由緒帳之内」

讓与　下主(「けさ」)太郎ニ　上財部の日光神の正祝職之事

右、於此處者、鴨守長可爲重代相傳所職之間、則子下主太郎ニ讓与處実也、早守此旨、任先例、可致公方御祈禱精誠之狀如件、

至德三年丙寅十二月十三日　鴨守長判

452 『谷山皇德寺文書』

奉寄進　薩摩國谷山郡之内中村水田壹町、砂町母義祖友爲後世菩提所、彼田地於永代限、當郡皇德寺奉寄狀如件、

至德二年丁卯二月十八日　薩摩守平朝臣忠信(花押)

453 『仝』

皇德寺領在所山田内

在判(「好久」)

桑迫井上薗一ヶ所　同前田一町二段　岩瀬戸二反　河原田卅　榎田八段　門前三段新寄進

中村内

砂町一町　合三町二段

山野さかい

東ハ岩瀬戸の田のしもなわてより西田のうしろの山のほりのとをり、南ハ門のほりのミそとをり、西ハおゝちのうとのほり、くらゝのゝ尾たてのとをり、北ハ巻田のうとの山のお峯のとをり、岩瀬戸田の下なわてまてなり、

此内ハ寺山也、　　御判（黒久）

454

「延時文書」

薩摩國薩摩郡内延時名地頭職并庶子山野、本若松名、串木野、若松、橋間、寄田、火同丸、同成岡名地頭職、成枝等事、知行不可有相違之狀如件、

至徳四年壬五月四日　　宮内大輔（今川三雄）（花押）

延時筑前守殿

455

氏久公嘉慶元年丁卯閏五月四日卒、年六十、法名齡岳、號玄久卽心院殿、

「御譜ニハ法名玄久號齡岳云々トアリ」

456

「國史　齡岳公怨翁公」

嘉慶元年丁卯、是年八月改元嘉慶、自七月以前猶是至徳四年、南朝元中四年、夏閏五月四日、齡岳公薨於鹿児島、年六十、葬於大姶良龍翔寺、據島津系圖、廟堂要覽、公便馬著其法十八條、以傳子孫、據齡岳公舊譜、公所著騎法十八條傳至大中公、名曰在響集、詳見貫明公跋、名物六帖便馬、讀曰武末仁與久乃留、引小名録云、張敬児年少便馬、子男二人、長爲怨翁公、少爲義天公、怨翁公以貞治二年生於大姶良、母伊集院氏長門守忠□入道道忍之女、是歳年二十五襲封、據島津系圖、初齡岳公居鹿児島、後徙大姶良、又徙志布志、復居鹿児島、並見前以東福寺城狹隘、欲廣而大之、會薨、及怨翁公遷鹿児島、別築一城而居之、名爲鹿児島本城、亦稱清水城、據山田聖榮自記、怨翁公自志布志徙鹿児島不詳其年、今因齡岳公事而及之、島津系圖云、至徳年間怨翁公自志布志遷鹿児島本城、據聖榮自記、怨翁公築鹿児島本城、在齡岳公既薨之後、而至徳猶係齡岳公在位之年、島津系圖以為怨翁公已遷鹿児島本城、豈別有所據乎、俟考、秋八月二十三日改元、據和事始、九月五日、左衛門佐遺禰寢久清書曰、宜屬今川宮内大輔擊凶徒盡忠節、據小松氏文書、原書今川宮内大輔名闕、按入來院主馬家蔵文書、此年十一月二十八日、宮内大輔和元名渋谷次郎曰元重、渋谷三郎曰和重、而下巻嘉慶二年、有今川宮内大輔和元、蓋此人也、此巻又有宮内大輔三雄、見至徳元年、又有宮内大輔守政、見至徳三年、疑皆與此一人異名、

457

「巻之七補注」

至徳二年注、伊集院忠□當作□國、以下書忠□者依此、

458

「氏久公御譜中」

嘉慶元年丁卯閏五月四日卒、享年六十、法名玄久、號齡

岳卽心院殿、
東福剛中和尚有所祭齡岳文、其序曰、維時嘉慶改元歲次丁卯閏五月初四日、故島津奧州太守齡岳久公大禪定門、示寂於薩州鹿児島云云、其文曰、嗚呼惟靈九州藩屏三國幹楨薰天富大蓋代功成云云、開卽心軒衆善奉行六十一歲俄隔幽明云云、依之觀焉、則有一歲之不足、蓋祭文之誤也乎、再可考之、

459

「仝上」

「正文在志布志大慈寺」

日州龍興山大慈禪寺第二世剛中柔禪師豊之後州人也、幼師事玉山和尚、「柔ニテ」「信州井上源流的裔也」雉髮染衣、參禪遊方、凡居龍山者四十餘年、「薩カ」先仁禮賴仲・畠山直顯崇敬之、後島津氏久歸依之、泛海入太宋求藏經歷三祀而歸、龍山内開二院、曰卽心、曰大樹、龍山之禮樂、至此悉備矣、因茲日隅薩之道俗、歡呼如佛出世、已年垂六十有五歲、而退於龍山、到洛陽奉左相府命住普門、尋住東福、説法如偃跛脚之雲雨、多智似遠錄公之波瀾、四衆服從以手加額、老病相逼、卜終焉之地於成就宮前、「在東福」扁曰卽宗、居此而化、壽七十一矣、以此書考之、則卽宗庵嘗所以齡岳之非菩提所明矣、

460

—氏久
—光久　四郎左衞門尉　法名壽山爲公　子孫無之、
「太平記三十三卷有之」宮方大將、屬　征西將軍宮、延文五年秋、於筑前州對　將軍方軍衆、致粉骨爲合戰者也、
—氏忠　但馬守　子孫記于別紙、
—女子　祖鑒房
—女子　京子
—女子　禰々

461

「西藩野史」

元久公

氏久公の長子、母は伊集院忠國長門守ト称ス、入道道忍女、貞治二年癸卯、隅州大姶良城に生る、又三郎と稱す、後陸奥守と改む、　氏久公に從て日州志布志に移り、又鹿児島東福寺城に移る、城地狹少なるを以、清水城を築き

大興寺後山也、是居す、至徳中也、是ヲ本城ト云、貴久公に至テ猶是ニ居ス、猶廣地ならざるを以、官に有るの士は橋ノ口城吉野実方也、或云此清水城、主殿十二間雑掌所馬屋あり、に居らしむ、

嘉慶元年丁卯

「明徳四年、初氏久公之寝疾也、命本田信濃守忠親、為世子元久結昏於山北殿、而曰元久若与山北有隙、汝宜成之、既而遂迎山北姫、於是公族乃国衆為是譲大追物為賀」

壬五月、氏久公に継て立つ、是ヲ第七世ノ太守トス、

明徳四年癸酉嘉慶三年二月九日、康暦と改元、二年二月十六日、明徳ト改元、

先是師久公薨して後、世子上總介伊久初大夫判官ト称ス、貞和三年二月朔日生ル、後ニ除髪して久哲ト称ス、薩州數ヶ所を領し、自薩州河邊城に居し、長子太夫判官後播磨守、守久は木牟禮城、出水、次子山城守忠朝は碇山城に平佐、居らしむ、守久性凶暴にして父に逆ふ、終に師を帥ひて父を攻むるに至る、元久公人を遣して説しめて曰、父子相暴は逆の大なる者也、天神以て其責免るへからす、守久悔悟し、父子和睦して歸る、伊久大に悦ひ、己か藏むる處の忠久公の甲冑按に、数百年に至テ其形ヲ損ス、故に享保中継豊公工ニ命テ、更ニ似セ作ラシム、共ニ存ス、小十文字太刀源家世々傳ル処ノ膝丸也、忠久公ノ傳ニ詳ナリ、伊久公ノ太宗家タルヲ以テ、是傳フ、今ニ至テ相傳テ家珍トス、を以元久公に獻せんとす、伊久曰、守久か不肖なる、他日の存亡いまた知へからす、不幸にして他人の有とならは、百世の遺憾なるへし、於是、公止事を得す、山田右京亮一族ト云ヲ以ス、伊地知民部少輔家臣ト云ヲ以ス、を河邊に遣て是を受しむ、伊久にも又阿蘇谷一族と云ヲ以ス、阿蘇谷氏其先忠時公ノ六男大炊助久時ニ出ツ、公之譲ヲ受テ伊賀国長田庄ヲ領ス、子孫薩州羽月ニ住ス、石塚大和守ト称ス、家臣ヲ以ス、をして授く、相議して曰、重器の授受民屋は輕忽也、佛寺ハ凶場也、田中に若しと遂に授受して、松尾・内城ノ間、歸る、

※1 應永元年甲戌、明徳五年七月九日應永ト改元、僧石屋石屋ハ伊十院長門守忠國第十一之子也、貞和元年乙酉七月十七日生ル、観應元年、六歳にして伊集院廣濟寺（泰定山廣濟寺、京師南禅寺ノ末寺也、本朝甲刹ノ一也、開山南中ハ石屋ノ兄也）ニ入テ学フ、延文四年洛陽ニ至リ、南禅寺蒙ノ山（南中ノ師也、勧請シテ廣濟寺の開山トス）ヲ拝シテ師トス、同五年、十六歳ニシテ僧トナル、永徳三年癸未、三十九歳ニシテ能登國総持寺ニ至リ、通幻（豊後ノ人）ニ見テ法ヲ受ク、至徳二年乙丑、四十一歳ニシテ國ニ帰リ妙通寺ヲ建ツ、同三年深固院ヲ薩州吉利に建ツ、（文明三年、福昌寺東嶺ニ移ス）真林寺ヲ伊十院ニ建ツ、嘉慶元年妙圓寺ヲ建ツ、應永元年福昌寺ヲ建ツ、又惠燈院ヲ建ツ、同三十年五月十一日丹波國永沢寺ニ卒ス、年七十九、○按ニ、通幻ハ道元弟子五哲之一也、道元姓ハ源氏、洛陽ノ人、始建仁寺ニ入テ明庵ニ謁ス、庵以法器トス、商船ニ乗リ宋ニ入リ、天童如浄禅師ニ見ゆ、明庵宗洞宗ノ旨ヲ傳て帰ル、城南深山ニ於テ法ヲ説ク、北条時頼召セトモ適カス、越前國ニ永平寺（按ニ、永平寺ハ初僧行基開基ス、総持寺・永平寺を以テ曹洞宗ノ両本寺トス）ヲ建テ居ス、建長五年八月寂ス、

年五十四、京師及ひ北州に遊ひ禪を学て歸る、元久公に説く、公是を悦ひ、府下長谷場六郎久純か居を請ひ、寺を建て玉龍山福昌寺と號し、石屋を是に居らしめ、田許多頂を封ス、同三年十二月鹿児島坂下池上ヲ封ス、北原氏按に、肝付氏同六年二月廿九日谷山宇宿邑ヲ封ス、ノ祖兼俊ノ弟右京亮初テ北原氏ヲ冒ス、艸部氏ニ代テ世々真幸院ヲ領ス、艸部氏ノ傳ハ、貞久公延文四年ノ傳ニ在リ、眞幸院を領し、伊東・相良に與シ日州を乱ス事年あり、事ハ延文四年應安三年ニ在リ相良近江守前續実長カ子、是と謀て日州野々美谷を取る、是を保つ、於是元久公、庄内梶山に軍し是を攻んとす、今川播磨守貞兼今川了俊カ族ニシテ伊東・相良ニ與スル者歟、來て野々美谷を援ふ、

高木長門守（梶山ノ主）、和田土佐守（日州高城ノ主）、貞兼と戰て利あらす、高城に走る、貞兼勝に乘して梶山を襲ふ、兵勢甚疾し、北郷又次郎・北郷藤次郎・伊地知又七戰死す、　元久公の軍短兵急に接シテ是ヲ破ル、貞兼大に狼狽し僅に身を以免れ山東に走る、二月十七日、七月、　元久公軍を進て野ゝ美谷を襲ひ、夜に乘して陷る、千田牟田（相良氏有名ノ士）以下許多戰死ス、於是野ゝ美谷を樺山美濃守音久（樺山氏二世）に給ふ、（按に、音久・教宗・教久・満久・長久・廣久・善久七世大永元年ニ至テ傳領ス、其間百三十年、私云、天文十二年北郷忠相伊東・北原二氏カ嘗テ掠取ル処ノ地ヲ復ス、其中野ゝ美谷あり、大永ノ後又二氏是ヲ掠取歟、）

二年乙亥

※2 初北原周防守範兼（世ゝ日州真幸院ヲ領ス、貴久公ノ傳に詳なり、）相良・伊東に與す、故に相良近江守前續（相良実長カ子、肥後國求磨ノ主、）兵を眞幸院に遣して北原氏を助く、今年範兼相良祐賴（或賴照ニ作ル、前続カ弟、）を徳満城（加久藤ナリ、）に宴す、事を論して合わす、怒て相刺し、共に死す、於是、二氏交を断つ、左馬頭久兼（範兼カ子、）元久公に降る、公是を容れ軍を發し、相良か軍の眞幸にあるを追ひ、眞幸院をして全く久兼に賜ふ、

三年丙子

※3 正月、初　元久公澁谷氏を征んか爲、薩州高牧に軍す、去年十二月、進て清色城（樋脇城也、樋脇・入來ヲ清色ト云、入來院氏ヲ拠ル、）を圍む、正月十一日、入來院彈正少弼重賴援を相良前續に請ふ、援兵いまた至らさるに城陷る、重賴前田に走る、　公北るを追ふて是を破る、十三日、又市比野（樋脇ノ内、）を取る、於是相良か援兵至る、公軍を進て花北に戰ひ、大に破り主將吉田氏を斬る、勝に乘し數百人を殺す、　公の軍も又勞る、故に軍を班す、重賴歸て清色城を復す、（傳云、高城トウ花山牛屎ニ戰フ、其事詳ナラス、）

四年丁丑

※4 元久公復大兵（五千人）を揚て清色を攻む、上總介入道伊久入道久哲（河辺城主、）播摩守守久（久哲ノ長子、木牟礼城主、）伊作大隅守久義（伊作家四世、）新納越後守實久（新納氏二世、志布志城主、）本田信濃守忠親（隅州清水城主、）軍を率來て　公を助く、於是四軍に分つ、　元久公ハ野頸に有り、久哲・守久・久義ハ木場原黒瀬に、實久ハ壽福寺の峯に、忠親ハ滿手野に攻擊事甚急也、入來院重賴勢盡て降る、（應永十八年又叛ス、）先是谷山郡司佛心入道（世ゝ谷山之主タリ、傳貞久公之傳ニ出ツ、）國命を奉せさる事久し、氏久日州を征するの時、虚に乘して鹿児嶋を襲ん事を恐る、人をして佛心に説しめて曰、予師を帥て遠く日州を擊つ、賊等虚に乘せん事を畏る、汝予か爲に來て鹿児嶋を守んや、佛心任侠を好て志氣あり、　公の爲に東福寺城を守る、　公軍を班すに及て、見すして谷山に歸る、此故に　氏久公世を終るまて谷山

を伐す、元久公に至て猶從はす、故に師を帥て是を征す、佛心軍敗て逃亡す、（按ニ、谷山氏其先兵衛尉忠光、忠久公之時ニ當テ、初テ谷山ヲ領シテより今ニ至テ二百余年、始テ除セラル、谷山氏ノ傳、貞久公ノ傳、世揖宿氏是ヲ領曆應二年ニ在リ、子孫次郎右衛門是也、給黎・指宿ス、其先伊作平次郎太夫良道カ第三子讃岐三郎忠長カ族也、世々傳領シ、爰に至て除セラル、於是奈良氏ヲ揖宿ニ封ス、奈良氏カ事久豊公傳ニ在リ、）風を臨て降る、本田信濃守忠親、開國より以來世々國老の職に任す、此時故有て日州に走りて叛く、（「六年四月ノコトカ」）又三郎久照（伊久入道久哲第三子北殿ト称ス、初元久公ニ養レテ子タリ、後変ス、）を立て主とし、軍を發し志布（「七年八年三月ノコトカ」）志を侵す、新納越後守實久（志布志之主、）犬馬場に出て川を隔て戰ふ、實久先渡り、勢に乘して忠親を破ル、忠親遁て隅州に走る、實久か軍熊田原氏兄弟あり、（野邊薩摩九郎カ臣也、）共に弱冠に滿す、（兄ハ十九、弟ハ十六、）平素義を嗜む、又容色あり、今日衆に先て戰死す、郷里是を悲ミ、二人を刻ミ寶滿寺（秘山密教院ト号ス、律宗南都西大寺の末寺也、花園帝正和五年立テ勅願寺トス、）の門に立つ、今ノ宝滿寺二王是なり、忠親隅州に歸て故舊を誘ふ、廻伊豆守（隅州廻之主、）是に應す、相共に横川を侵す、横川氏（按ニ、横川氏其先平清盛之子安藝守基盛ノ子左馬守行盛ノ子肥後守信基第三子藤内左衛門信行ニ出ツ、其子藤内兵衛尉時信と称ス、承久中初テ隅州横川ヲ領シ、因テ氏トス、九世ノ孫河内守種氏ニ至テ其後ヲ詳カニセス、後北原氏横川ヲ領ス、）奮戰し、伊豆守及ひ忠親か族數人を殺す、二氏の軍大に潰ゆ、忠親身を僅に免れて他邦に走る、（「七年ノコトカ」）（按ニ、忠親除髪シテ安了ト称ス、元久公京師ニ至ルノ時、安了京師ノ邸ニ來リ、阿多・平田之二氏ニ因テ罪ヲ謝ス、公召テ見ル、又去テ其後ヲ知ス、）元久公忠親か児（後信濃守元親ト称ス、老中ニ任ス、）及ひ其族臣を召て曰、忠親か罪至て重しといへとも、既に亡命して去る、本田氏の勤勞ある、重親（忠親カ父、）難に死する（氏久公ノ傳ニ出、）又忘へからす、故に児を清水に封ス、族臣等恩を謝し児を奉して清水に歸る、十二月、伊作大隅守久義師を帥ひて、どうめき川を渡り、（門瀬川是ナリ、）鵜塚（加世田益山村、）に軍し、別府氏（加世田之主、）を擊つ、別府逆擊て是を破る、久義援ヲ二階堂氏（「山城守行貞」其先文永中相州ヨリ來テ、阿多北方ニ宰タリ、世々是ヲ領シテ渡唐船ノ事ヲ司ル、北方ハ即チ田布施ナリ、二階堂氏傳應永十三ニ出ツ、）に求む、聽かす、（按ニ、二階堂山城守行貞ハ久義姉ノ夫ナリ、又別府カ妻ハ二階堂カ女ナリ、故ニ別府ヲ擊コトヲ肯セス、）久義又元久に求む、公人をして久義を諭して曰、軍を解て伊作に歸り吳日を待へし、聽すんハ重て援へからす、久義止む事を得すして軍を班す、是より久義又二階堂と快からす、後ニ久義兵ヲ元久公ニ請ヒ、二階堂ヲ擊事ハ應永十二年ニ在リ、※5

※1

應永元年、是年　伊久使本田忠親告元久曰、澁谷氏叛我爲寇十七回、恨孰大焉、願乞師旅高城入来間、則必發兵拒之、時夾而滅之、元久對曰、今將治和田高木、而後趣命、

※2

應永元年甲戌七月、　公師于坂上（山西）、自岩河潛兵、取野呑谷城、本田氏（忠親）從軍、乃使樺山久戍之時、○北郷久戍都城堅守、○高木氏委梶山城徙於花木、

二年乙亥八月十日、　総州如高城陣于横峯、伐入來取秋租、　公使新納

実久・和泉、、往説総州曰、高城距日隅遠、而其間隔以山河、若進入山田陳高牧、明年發向樋脇・前田・市比野則小堡不能支、時從吉田・蒲生援之、入來其何有遂定其謀云、二十二日、大友親世使護阿弥贈伊久書、乃十六日所發也、二十三日伊久復書　公亦同此、○伊久及市來忠家遂陳于高牧、於是躐年、

※3

正月　公等亦軍于高牧、十一日苅山作径夜陥樋脇城、十三日取前田城、十九日取市比野城、我軍入三城、四月十九日、渋河右兵衛佐満頼為探題至于博多、因　幕府賜大友修理亮親世・大宰少貳・島津上総介伊久・同又三郎元久及九州地頭御家人等御教書云、宜急上津戮力満頼云々、

※4

春、伊久使次子山城守忠朝為名代、　公使其弟次郎三郎久豊為名代如博多、市來人中村、伊集院人野田、別府人村原属忠朝、吉田人花牟礼、平山人西郷、肝付人渡邊、飫肥人南郷属久豊、又老名伊地知彦六・酒勾次郎一族・伊集院蔵人・樺山六郎・佐多弥三郎等従久豊出船于阿久根着寺江、肥前国忠朝・久豊謁満頼於新山、亦肥前地、忠朝・久豊舎於田手寺、因四月二十日満頼來訪客舎謝之、乃久豊持燭迎之門外、忠朝迎之庭上、満頼揖坐右坐隅、忠朝趨席跪低頭、又出庭上迎板倉氏、板蔵厚謝久豊、而忠朝登榎、則久豊・板蔵亦登榎、乃満頼使近習進両人、忠朝於是礼久豊、板蔵殿就満頼下席、而久豊亦礼板蔵殿就其次席、而板蔵應召就席、忠朝酌、而奉之満頼、亦酌賜忠朝・久豊觴、竣満頼還新山、十月賜告、

四月下旬、伊久親将及　元久公囲清色城、守久及姶良三郎左衛門尉忠安・阿蘇谷出羽守興久及子四郎助久・伊作加賀守・下野宗十郎・信濃左近太夫・酒勾伊豆守伊景・本田次郎守親・天辰肥前小次郎守經・中条因幡守政春・御家人國分左衛門尉・羽島豊後守・執印豊前守・永利長門守・宮里若狭守・石塚對馬守、南方悉属山北軍、都合二千余騎、

月一揆又新納越後守実久・北郷讃岐守・樺山安藝守・佐多和泉守・河上、御杉一揆大将本田信濃守内ニ酒勾・阿多・平田・肥後・石井・伊地知・上井・鹿屋・猿渡・田代・長野・千代・向田・北原等属鹿児島軍、又伊東・土持・宮崎・跡江・木脇・清武・曽井・佐々・宇津・岡富・縣・盛長・八代・財部・飯田・石塚・岩千野・白糸・綾・池尻・穆佐・加江田・飫肥・櫛間・和田・高木・真幸・菱刈・馬越・平良・曽木・栗野・税所・加治木・平山・平松・平瀬・中津野・餅田・吉田・蒲生、都合五千余騎皆會西将軍、伊久・元久・頼久陣于野頸、本田忠親将杉一揆兵陳于満手野、播摩守守久・伊作大隅守久義陣于木場原黒瀬、新納実久将月一揆兵陣于寿昌寺峯、偕囲攻之、清色城乞和降、十月諸軍皆還、十二月伊作久義伐別府氏、

※5

五年戊寅正月十二日、伊久次串木野、請市來忠家・吉田清正謂別府事、清正朝于串木野賀新年也、十四日久哲贈　公書賀新正旦、勧　公使実久説伊作解兵、十六日　公復酒勾伊景書應之也、既而新納実久聞伊作事、乃使本田次郎左衛門尉如伊作説久義、罷別府軍久義乃還、久哲大悦還山北、

六年己卯、初本田忠親奉遺命勧元久公、乞伊久三子黒殿為嗣子、元服号又三郎久照、為之造屋形於鹿児島、使久照居之、式部山田・酒勾又次郎・上井神五郎・山田弥次郎等給事之、威望尤甚、四月国中多不服者、本田忠親專奉久照、遂以叛公、乃與久照伐肥後氏・石井氏・伊地

知氏於下大隅、
七年康辰、三州弥乱、夫人去帰山北、久照亦出亡鹿児島、本田忠親致
老名職奔于他州、

（本文中ノ（　）内ハ、底本ニハ割書ナリ）

462

「元久公御譜中」

以禪法鳴于世石屋大和尚（伊集院長門守忠國法師無等末子、）遍參既成、下向
當國矣、嘉慶元年丁卯、建立梵宇於伊集院城外、稱妙圓
寺、使石屋爲開山矣、

463

「小松氏文書」

嶋津以下凶徒退治事、属今河宮内大輔手、可致忠節之狀、
依仰執達如件、
嘉慶元年九月五日　「斯波左衛門佐義将事也」左衛門佐（花押）
祢寢殿　「右馬助久清ノ事也」

464

『入來院氏臣岡元氏文書』

澁谷三郎　和重
嘉慶元年十一月廿八日　宮内大輔（今川）和元在判

澁谷三郎殿　宮内大輔和元
「包紙」澁谷三郎殿

465

「比志嶋氏文書」

ちやくし河内守（久範）ゆつりわたすひしゝま名の内すこしつゝはいふんの事
一をきのくほ二反卅、おなしくつゝミの丸・ゆのきの丸・ミねさきかれこれ七反廿、いしたゝミのうへしたその一所、ひらかくら北村よりのけいやくの薗一所、これハ二郎ゆつりわたすところ也、くほう御くうしをハ、ふんけんにまかせてきんしすへきよし申をくなり、
一いしり三反ハ河田女しやうにおもひあつるところ也、これハいちこゆつりたるによて、しよくうしをとゝむるなり、たゝし大事の御くうしたんへつなんとの時ハ、たうさく人ニあてゝきんすへきよし申ところなり、
一かきの木山一かしら一反卅ハ、ひくにゝおもひあて候ところ也、ひくにの事ハ、いかにもふちをくわへ、あんのまねをもち候やうに、はからわるへし、
今度物まいりいかやうなる事も候とて、かきをくところ也、仍爲後日狀如件、

「嘉慶元年也」
元中二年ひのと　十二月　日　立阿（比志島範平）（花押）

466

「澤氏文書」

そのつねみならひしんかうの事、もとより景本にゆつりたるところにて、當知行相違なしといへとも、すてに死去の上ハ、其子ふくら丸ニ永代ゆつりあたふるところなり、但康俊らうもうによて、しよの子孫等にゆつるといふとも、此狀を本として、たのさまたけなくちきやうすへきなり、よて讓狀如件、

嘉慶二年二月十一日　康俊判

467

『正文在宮内社司澤氏』

夫正八幡大菩薩者、阿弥陀仙變作也、和光同塵之結緣、衆生濟度悲願、本地垂跡惟同、爰曩祖累代爲當國守護人、至于今相續已年久、然則神慮御加護有何疑哉、就中属世上無爲達多年本望、以知行分所領内、最前所可奉致敬神沙汰也、且爲敵方退治、國中安全、且爲息災延命、子孫繁昌、願文如斯、

嘉慶二年卯月十一日　藤原孝久敬白（元久）（花押）

468

「國史」

恕翁公（名元久、齡岳公之子也、稱又三郎、任陸奥守、法名恕翁玄忠、福昌寺殿、）

久哲公下

嘉慶二年戊辰、（南朝元中五年、）夏四月二十六日、左衛門佐遺澁谷重頼書曰、應幕府盡忠節儘好、今宜屬今河宮内大輔和元部下、彌立戰功、（據入來院主馬文書、）秋八月二十二日、恕翁公使鹿屋周防介領三俣院北方辨分長田名如故、（據恕翁公舊譜、今諸県郡高城郷石山村有地名長田、郡村高辻帳、三俣院有石山村、）

469

『入來院氏文書』

爲御方致忠節之条、尤神妙、於宮内（今川）太輔和元一所、弥可抽戰功之狀、依仰執達如件、

嘉慶二年四月廿六日　左衛門佐（斯波義将）（花押）

澁谷清敷（重頼）殿

470

『鹿屋氏文書』

日向國三俣院北方弁分内長田名事、爲本領之間、任先例、可知行之狀如件、

嘉慶二年八月廿二日　陸奥守（元久）（花押）

鹿屋周防介殿

「元久公御譜中、正文在志布志鹿屋権左衛門トアリ」

471

『水引執印文書』

一宮八幡新田宮御寄進事、薩摩國阿多郡南方鮫嶋跡水田壹町字亀喜御寄進云々、殊可奉致御祈禱之丁寧候、仍所請申如件、

嘉慶二年九月　日

沙弥願眞（執印友弟）

472

『安養院文書』

讓与　日向國救仁郷益丸名内水田四町并薗四ヶ所者、爲當所諏訪座主分、同居所望明印自然之（也）、彼者依爲最初弟子、毘沙門堂坊主讓与事実也、尤専公方之御祈禱、各無懈怠可被致勤行、御祭禮之事、任先例、致其沙汰可被知行也、就中、於彼所、立愚僧之先祖屆（マヽ）永時（マヽ）陀羅、其一通可有結縁者欤、仍爲後日、讓狀如件、

嘉慶三己巳年正月十七日

權少僧都明印（花押）

473

「國史　恕翁公」

康應元年己巳、是年二月改元康應、正月猶是嘉慶三年、南朝元中六年、春二月九日改元、據和事始、冬十月、恕翁公使富山土佐介領知覧院水田五町、據恕翁公舊譜、上巻至德三年注有富山土佐介義勝、明德元年庚午、是年三月改元明德、自二月以前猶是康應二年、南朝元中七年、春三月二十六日改元、據和事始、秋七月十八日、左衛門佐遺禰寢久清書曰、幕府令君與島津上總介絶歸順盡節、遺澁谷重頼書曰、幕府令君與島津又三郎絶歸順盡節、據小松氏・入來院主馬文書、又三郎恕翁公、上総介久哲公、是時左衛門佐令久清・重頼與二公絶、不知何故、冬十一月十四日、今川了俊使澁谷清色氏、重頼下同、色或作敷、領伊集院久氏舊領之地頭職、據入來院主馬文書、

474

「樺山氏四代孝久譜中」

「正文在姶良衆大圓房」

姶良庄得丸名内修理田壹町窪田五反、鍋弐段、河窪三段、事、所相計也、任先例、可有其沙汰之狀如件、

嘉慶三年六月十九日　孝久（元久）（花押）

得丸但馬入道殿

475

「元久公御譜中」

「此孝久モ元久公ノ御判トミヘタリ、考ヲ俟ツ」

「正文在肝付半兵衛兼屋家臣喜入志々目正兵衛義辰」

薩摩國知覧院内水田五町事（坪付在別紙）、

右、爲給恩所宛行也、任先例、可令領知之狀如件、

嘉慶三年十月　日　　陸奥守元久（花押）

富山（義勝）土佐介殿

476

「正文出水米津友田氏蔵」

薩摩國知覧院内□田（「友ノヰト云伝フ」）三町事（坪付在別紙）、

右、爲給恩所宛行也、任先例、可令領知之狀如件、

嘉慶三年十月　日　　陸奥守元久御判

市來崎入道殿

477

「御文庫三番箱中」

薩摩國山門院之事、上市來崎三町・下市來崎參町、此内一所も不残、爲本領所相計也、仍任先例、可被知行之狀如件、

嘉慶三年十月　日　　陸奥守元久（花押）

市來崎入道殿

478

『入來院氏文書』

肥前國三根西郷内東津・泉空閑兩村事、任先度安堵之旨、重可被沙汰付下地於澁谷岡本（尚重）攝津守之狀如件、

康應元年十二月十七日　　散位（花押）

中田民部大夫入道殿

齋藤左衛門大夫殿

479

『入來院氏文書』

澁谷攝津守申、肥前國佐賀下庄之内本領安堵事、歎申候、任理非預御成敗候者、畏入候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

卯月廿九日　　貞継（花押）

中田殿

480

『正文國分宮内社司澤氏蔵』

敬白

正八幡大菩薩御寶前立願事

右、元久當病令平癒者、急速御假殿事、所可奉致造營之沙汰也、仍立願如件、

康應二年卯月十一日　　奥陸守（マヽ）元久（花押）

481 『正文在國分宮内社司澤氏』
「引返シニ」
「薩摩谷山福本五反御供田ニ寄進状正文願主 本田忠親」

奉寄進

右、薩州谷山福本村内登尾水田五段、爲毎年一度御供米所奉寄進也、仍状如件、

康應二年六月一日　　信濃守藤原忠親（本田）（花押）

正宮御前法橋御房

482 『入來院氏文書』

嶋津上總介伊久事、雖爲當時不忠之仁、依前忠所被召出也、此間別而致忠節上者、自今以後不可隨伊久成敗、弥爲天下可抽忠功之狀、依仰執達如件、

明德元年七月十八日　　左衛門佐（斯波義將）（花押）

渋谷（重頼）清色殿

483 『入來院氏文書』

伊集入道（院説）跡地（久氏）頭職事、任先立預置旨、可令知行之狀如件、

明德元年十一月十四日　　『了俊』沙弥（花押）

484 「正文見于伊地知縫殿重治」

渋谷（重頼）清色とのへ

鹿児嶋郡内　給分

田上村内陸町　此内一丁十河成　残見作四丁九反册

「今ノ所務ノ類ナル（シ）」得分定米錢拾貫、此外聊無得分候、若此條僞申候者、日本國中大小神祇（冥道カ）具堂御罰可罷蒙候、

明德二年三月二日　　「山田氏式部常陸介友久事」友久（花押）

485 「山田氏系圖」

友久

亀三郎丸　式部　孫三郎　掃部助　常陸守

486 「國史　恕翁公　久哲公」

二年辛未、（南朝元中八年）夏四月十三日、今川了俊使澁谷清敷氏權領伊集院久氏舊領地頭領家各半分、（據入來院主馬文書）秋九月八日、管領細川右京大夫頼元遣　久哲公書曰、幕府令君與島津又三郎偕入朝、因諭、（據久哲公舊譜、細川頼元、常久之養子、是年代斯波義將為管領、見將軍家譜、常久、武蔵守頼之法名）冬十月二十八日、今川了俊令澁谷清色氏食薩摩國知行分國衙及領家米、（據入來院主馬文書、國衙領

家米蓋指國司領家所食租税、親此則鎌倉幕府以來守護重、而國司輕、地頭重、而領家輕者、亦可以見其一端矣、貞永式目諺解、國衙謂國之府、即國司之所居、康熙字典、衙音牙、廣韻、衙府、類篇、古者軍行有衙、尊者所在、後人因以所治為衙、

是歳朝山師綱・重綱來、

（據飯野一宮神職黒木式部家蔵日記、師綱・重綱來、其事不詳、然朝山殿事見下應永元年注、師綱・重綱事又見十一年注、故書之於此、以備参考、）

高木長門守久家矯稱半濟、侵奪相國寺領穆佐院・三俣院、雑掌訟於管領、

（據恕翁公舊譜、半濟依當時語、其義不詳、入來家臣高木傳右衛門系圖、中納言藤原隆家曽孫曰肥前守文貞、始稱高木氏、文貞第四子曰實遠、久家、實遠十二世孫也、相國寺領日向國三俣院事、見上巻、左衛門佐至德元年十二月九日與薩摩大隅地頭御家人書、又據右京大夫遺恕翁公書、穆佐院亦係相國寺領、故此言侵奪二院、右京大夫見明年、書）

三年壬申、（南朝元中九年、）秋九月十七日、右京大夫遺　恕翁公書、令禁久家侵掠、還穆佐院・三俣院地於相國寺、（據恕翁公舊譜、）

冬閏十月五日、

後小松天皇受三種神器於

後亀山天皇、自延元元年

後醍醐天皇南巡、傳三世至

後亀山天皇、（後村上天皇・長慶天皇・後亀山天皇、）改年號者七、（興國・正平・建德・文中・天授・弘和・元中、）凡五十七年南北分統、至是　皇統合而爲一、世世相承、寶祚無疆、

（據大日本史、大日本史後小松天皇本紀贊曰、皇統之判為南北、猶元魏之分為東西乎、曰非也、孝武・孝静皆出於孝文、无所輕重、唯視名分所在、為正耳、孝武為高歡所逐、而孝静為其所立、則正統之在西、皇統之出於後嵯峨、无所輕重、唯視神器所在、為正耳、光厳・光明皆為叛臣所立、非无神器、而所傳非真、則猶無也、然神器之輕重係人心之向背、人心帰則神器重、人心離則神器輕、天人惟一、道器不二、固非閏孽乱賊之所得、而覬覦也、則皇統所属、不待辨而明矣、明德中、帝受神器于後亀山帝、於是乎皇統合而為一、聖緒傳於悠久、彼宇文普六茹、亦有所謂傳國受命之璽、而異姓吞噬、父子狀賊、豈可與吾邦皇統綿邈、萬世不易者、同日而語哉、然則神器之為靈物、自有所歸矣、嗚呼盛矣哉、三種神器曰劔、曰璽、曰鏡、其説詳於水府儒臣栗山愚所著保建大紀、今録於左、保元元年、崇德上皇與後白河帝構難、愿曰、院雖兄、去位久矣、帝雖弟、當今天子、馭寓踰年、未有失德、院之構兵、其何名耶、當是時、宜以躬擁三器為正、古昔三器通謂之璽、皇祖授璽、持寶鏡曰、吾児視此、當猶視吾、又曰莫思爾祖、吾在鏡中、又曰、如八坂瓊之妙、如白銅鏡之明、且提神劔、平天下、神武建都橿原、奉安三物、親祭匪懈、以為祖先之神、又以為天位之信、又以為修己之具、奉安三物、又以為馭天下之器、至崇神、別模鏡劔為護身璽、世世相承、而莫之改也、如天德・長久之火神鏡、壽永之失寶劔、世變既太甚矣、遂至於元曆無璽而即位、則其變不可勝言也、當時藤原兼實恐開禍端、計從苟且、而其裔良基乃有以臣為神璽、尊氏為寶劔之説焉、雖然、萬世公議、終使偽主不得亂真、閏位不得蔑正、則三璽之尊自若矣、故以躬擁三器為真主者、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人、而不惑者也、而世之議論者、往往以為三器猶秦漢傳國璽、殊不知傳國璽即印也、與周禮璽節之璽、左氏璽書之璽同、但至於秦、獨天子稱璽、臣下不得稱、漢因是耳、豈可與吾邦百王授受護身鎮宇之器、同年而語也哉、栗山愚之論如此、而三宅緝明非之、以為在德不在器、其説見保建大紀序、

487

『入來院氏文書』

嶋津伊集院入道（久氏）跡事、地頭同領家各半分事、所預置也、守先例、可知行狀如件、

明德二年四月十三日　　沙弥（花押）【今川了俊】

澁谷清敷（重頼）殿

『包紙』

清色虎五郎殿　　了俊

488

相國寺雑掌申、日向國穆佐院・三俣院等事、退押領人等、沙汰付寺家雑掌、可被令知行、更不可有緩怠之狀、依仰

執達如件、

明徳二年八月七日　　右京太夫(細川頼元)御判

嶋津又三郎(元久)殿

(本文書樺山文書中ニアリ)

489

「正文在文庫」

嶋津(元久)又三郎令同道、可參洛事、尤所令然也、不日、可有上洛之狀、依仰執達如件、

明徳二年九月八日　　右京大夫(細川頼元)(花押)

嶋津上總介(伊久)殿

「伊久公御譜中ニ在リ」

490

『入來院氏文書』

薩摩國知行分内國衙并領家米事、爲兵粮析所、可知行之狀如件、

明徳二年十月廿八日　　『今川了俊』沙弥(花押)

澁谷清色(重頼)殿

『包紙』清色殿　　了俊

491

「正文在文庫」

相國寺雜掌申、日向國穆佐院・三俣院等事、号半濟高木押妨云々、太不可然、早止彼妨、可被沙汰付一円下地於寺家雜掌之狀、依仰執達如件、

明徳三年九月十七日　　『細川持之』右京大夫(細川頼元)(花押)

嶋津又三郎(元久)殿

「元久公御譜中ニ在リ」

492

「皇徳寺文書」

薩摩國谷山郡内山田村

皇徳寺寺領田園等事注文在別紙

右、所奉寄進也、任先例、可被執務之狀如件、

明徳三年十月七日　　凞久(花押)

元久(花押)

久豊(花押)

好久(花押)

「元久公御譜中ニ在リ」

493

『入來本田氏文書』

ゆつりあたふちやくしかなとう丸か所

薩摩國山門院内一所はリハらのミやうてん

一所　ミなりかはのミやうてん
一所　よこミねのむら同たかハらまちひさ木田
一所　うちのゝむら
一所　同國しらをかわのむらはんふん
一所　ちくせんのくにこたへのかうの内

右、件の所領ハ、兼久ちうたいさうてんのしりやうなり、しかるあひた、かなとう丸ちやくしたるあひた、一しよものこさす、やうたいをかきてゆつりわたすところなり、たゝししやていきくとう丸・いぬとう丸ニハ、このうちをおもひあてかいふちすへきなり、仍爲後日ゆつり狀如件、

明徳三年壬申十二月十三日　　兼久(花押)

494

『入來院氏文書』

「案文」「此二字こゝの裏にあり」

嶋津上總介(伊久)并又三郎(氏久)事、依〇凶徒、為別して　將軍家(義満)を守申へき故ニ、任探題(今川了俊)方御教書旨、守護人ニ同心の儀を止了、雖然、自去年八代御退治以後、兩嶋津參御方云々、但、於兩國ふるまひ、猶以宮方(後醍醐親王)のともから相良(前頼)以下爲一躰欤、然者　將軍家の御ため、又ハ公方を仰申ともからのため、始終可有其煩欤、所詮、面々の力を一にして、身をまたくして、　公方を可守申也、若嶋津方以私之儀、可及乱之儀者、一同ニ　公方になけき申さんかためニ、一味せらるへき哉、

一此間嶋津方ニ同道の人々事、これ又定て　將軍家を守申さるゝ欤、然者守護人不儀の時ハ、おの〳〵　公方をまほり申さるへき条勿論欤、若又守護人無爲を存て、諸事　公方の御成敗をまほり申さハ、かれといひこれと云、乱之儀あるへからさる上ハ、あなかち此の一揆の人々も又不儀を存へからす、たゝおの〳〵理をうしなハす忠をうしなハすして、子々孫々ニいたるまて、軍役をまたくし知行分をまたくせんかため、又ハあひたかひニ其理非を　公方ニまかせたてまつるへきほと、身をまたくせんかためニ、一揆をむすふ所也、若國のため、又　將軍家の御ためニ、不忠不儀のために此一味を存事あらハ、此契約の旨を可破也、しかしなから、以此旨ハ定者也兩嶋津方、或ハ至(致)無理、或ハ事を左右ニよせて、ミたりのさたあらハ、身をたすけて、公方を(の)御成敗待申へきため也、しかる間、兩國の人□(も)今例(かゝ)して如此同心あるへき乎、

若、此条々存偽者、　日本國中諸神、、、

明徳三年、、、

495

『上原氏文書』

（本文書ハ五二九号文書ト同文ニツキ省略ス、編年ヲ誤レルナラン）

『入來院氏文書案文、嶋津上総介并又三郎事、依為凶徒、別して将軍家を守申へき存候、任探題方御教書旨、守護人同心の儀を止了、雖然、去年八代御退治以後、両嶋津参御方云々、下ニ明徳三年とあれハ、此条々も明徳三年探題今川伊与守貞世入道了俊より所遣ノ条書也』

496

「國史　恕翁公　久哲公」

四年癸酉夏四月二十八日、　恕翁公與禰寢久清書曰、近奉教書、將擊高木久家、卿其將兵會都城、（據小松氏文書）　六月十一日、　恕翁公上幕府書曰、前被入朝之命、已趣治行、尋承相國寺領事、頗勞措置、遂愆行期、請俟此事収局、然後趣造幕下、先遣酒勾新左衞門入道、口説陳謝、因獻虎皮三枚・豹皮二枚・梅畫四幅・料足一萬匹、（據恕翁公舊譜、古者謂錢為料足、而毎十錢、輙参以駒引錢一文、因謂百錢為十匹、千錢為百匹、一萬匹則十萬錢也、制度通、元明天皇時、武蔵國秩父郡献和銅、由是改元、為和銅元年、和銅者熟銅也、是歳始鋳和銅開珎、萬寶全書、和銅開珎背文、有駒引様、合而観之、則駒引錢即和銅開珎也、至於今世、亦間有之、其文作一人牽馬之様、駒引猶云引駒、）　是月　恕翁公歛國中田段錢、下令曰、段五十錢、寺社一百錢、期盡今年十月、若有愆期、科如向背、復徵段錢曰、段出三十錢、寺社五十錢、期盡今年十一月、若有愆期、宜照逋缺没入其田、（同上、此令首有恕翁公花押、所謂御袖判者是也、科如向背、謂以向背法論之、向背出貞永式目諺解、向則從之、背則違之、段錢蓋謂計段出錢、上井覚兼日史、天正十一年三月十六日、徵段錢、段二十可以覩焉、本朝田制、方五尺為歩、是曰一坪、長三十歩廣十二歩為段、是曰三百六十坪、十段為町、是曰三千六百坪、詳見制度通、按寺社家不耕而食、不織而衣、無官於朝、無役於國者也、故使出段錢、多於士民、由是観之、當時亦有具眼者矣、）　初　久哲公自碇山城遷河邊、使其子播磨守守久居碇山城、守久不子、是歳引兵圍河邊城、　恕翁公讓守久、令罷兵、守久乃引去、而伊集院氏又取坊津・泊津、河邊無援、由是　久哲公復居碇山城、使守久居山門院、而以河邊與　恕翁公、（據恕翁公舊譜、山田聖榮自記、河邊城遺墟、在川邊地頭館北四町餘、係平山村、土人呼為平山城、郡村高辻帳、坊津村・泊村属加世田郷、寛永中、寺山又右衞門、久貞為坊津地頭、東郷肥前重方為泊津地頭、見地頭帳、蓋當時建為一郷、其後明暦元年合為一郷、）　恕翁公使高城領主和田氏・花木領主高木氏守日向梶山城、（據恕翁公舊譜、島津支流系圖北郷氏譜、三俣院高城、見第五巻建武三年、郡村高辻帳、三俣院有花木村、山之口郷今有花之木村、梶山城遺墟、在都城領主島津筑後別館東北三里有餘、係石寺村、）

497

『祢寝氏文書』

去年九月十七日任御教書旨、爲高木久永退治、所發向也、來月十五日以前、可被打寄都城之狀、依仰執達如件、

明徳二年卯月廿八日　　藤原元久（花押）

祢寝右馬助殿（久清）

祢寝右馬助殿（口裏）　　藤原元久

498

「國分澤氏文書」

ようゑうあるによて、本錢かへしのしちけんニ入をく、たいらの大川分八たんかうち、ひかしの四たんか事、

合　八貫六百文者

右、件水田ハ、やうおん重代相傳のところなり、しかるをしろのようとう八貫六百文ニさためて、しゆとくのかたに、かのすいてん四たんを、たうさくよりほんセにかへしのしちけんニ入をく事実也、もしこのたにいらんワつらひあらん時ハ、もとのようとうをさたすへき也、但三年すきハ、かはりのいてきしたいに、もとのようとうをもて、うけかへすへきしやうくたんのことし、

明徳四年みつのと　六月八日のとり　　やうおん（花押）

499

「寫在山田七郎右衛門尉久通」「此文書元久公御譜中ニ在リ」

追令啓候、

雖乏少之至極候、虎皮五枚、虎皮三枚、豹皮二枚、梅繪四幅・料足一万疋令進覧候、重恐惶謹言、

參洛事被仰候、畏入候、致其用意候之處、去年相國寺領三俣院事、御教書被成下候、仍未道行子細出來候之間、延引仕候、此事落居候者、早々可令上洛候、其子細爲申入、酒勾新左衛門入道令進候、委細使者可申入候、恐惶謹言、

明徳二年六月十一日　　藤原元久

進上　人々御中

500

「元久公御譜中」「此文書同案、山田出羽守久興入道玄威譜中ニ在リ」

「正文在田代縫殿清長」

「元久公御花押」（花押）

定

段錢事　三十文　寺社五十文

右、來十一月可調進、三ヶ度可加催促、尚以有無沙汰輩者、所詮、八幡大菩薩御照覧候、未進分際田數可取放也、仍所定如件、

明徳二年六月　日

「朱カキ」「大始良」「如此上書ニ有之」

501

「田代刑部少輔清久譜」

明徳四年癸酉六月、　恕翁公令於封内定段錢、法限十月三次輸之、凡段別五十文、如寺社百文、清久拜　命、

502

「此文書元久公御譜中ニ在リ」

（元久）
（花押）

段錢事　五十宛　寺社百宛

右、來十月中可調進、三ヶ度可加催促、猶以有無沙汰輩者、所詮、可向背也、仍所定如件、

若此条偽申者、

正八幡大菩薩　天滿大自在天神　諏訪上下大明神御罰於可罷蒙候、

明徳二年六月　日

503

「元久公御譜中」

「正文在向島士藤崎正兵衛」

（花押）

宛行

向嶋西方内藤野村名頭職事

刑部九郎所

右以人、補任彼職者、云佛神事以下修理興行、云御年貢并御公事等、任先例、可令致其沙汰也、聊承知之無令違失、仍執達如件、

明徳三年六月廿六日　　慶本奉

504

野々三谷城去六日打落了、爲御不審申候、就其者、敵方今時分いつ方にても候へ可遣之由、其聞得候、左様之時者、早々可申候、時を不移被打寄候者、悦入候、恐々謹言、

（応永元年カ）
七月八日　　元久（花押）

祢寢（久清）右馬助殿

505

「正文在桃山氏」

契約

右、意趣者、心底依憑存候、進一筆候、所詮、御大事之時者、雖不甲斐〳〵候、仰　公方、以其下可立御用候、若此條偽申候者、

伊勢天照大神宮　正八幡三所大菩薩　諏方上下大明神之御罰於可罷蒙候、仍契狀如件、

明徳二年七月廿九日　　信濃守忠親（本田）（花押）

桃山殿

506 「指宿家文書」

薩摩國指宿郡内山河鳴河事、任相傳旨、不可有知行相違之狀如件、

明徳四年十月十一日　　沙弥御判

指宿殿（「能登守忠勝」）

507

（花押）

永代おかきてうりわたすミろくしりやうの内かきの木その一所六段之事

四至　限東中道　限西中垣
限南見性庵垣　限北堂薗

右、件のそのハ、道辰重代相傳の地なり、しかるをその謂あるによて、はまの四郎太郎けんけうの方ニ、代のようとう三十貫文ニ定うりわたすところ実也、仍後代のために、祖父故ミろくしの執當道慶、去文和四年十二月七日のゆつり狀并道辰親父自久僧のゆつりあたへらるゝしやうのあん、同所ゝりやうのしやうを申そへ候うへハ、永代相違あるへからす候、如此さためおき候間、道辰か子孫等、いさゝかもゐらんわつらいをいたし候ハ、、子孫のきあるへからす候、仍永代のしやうくたんのことし、

明徳四年癸酉十月廿八日

息長道辰（花押）

508 「伊作家文書中」「久義譜中案文在巻本トアリ」

へふはんふんの事

一たうはう（唐坊）のうち　　一たけた（さかりまつこミなと）（こひちをさかふ）

一上　　一いて

一つぬき（津貫）　　一のまかたハう

一おうらはんふん　　一上下ふん

一やまたはんふん

一ちとう所いちをくわへたる定

一ミやてらのこらす

一田の〳〵　　一あきめ

ほんをハ御うちにまいらせ候時、うつし候て、これをハとゝめおき候、

明徳二年癸酉十一月廿七日

509 「國史　恕翁公」

應永元年甲戌、是年七月改元應永、自六月以前猶是明徳五年、春二月、今川播磨守貞兼攻之、都城領主北郷誼久遣其子藤次郎久秀・又次郎忠通等、救梶山城、　恕翁公引兵如莊内、屯梶山村、以爲

之援、十七日、北郷忠通戰死、三月七日、北郷久秀及伊地知又七郎戰死、和田・高木棄城走、各保其邑、（據恕翁公舊譜、島津支流系圖、山田聖榮自記、應永記、今川播磨守貞兼族屬不詳、諸家大系圖、貞世入道了俊第四子曰右京亮貞兼、豈此人也、舊譜以為範氏第二子、不知何據、）夏四月七日、　恕翁公使樺山音久領高同名吉富、又許以宮丸名曰、俟其地為闕所、然後授之、（據島津支流系圖、高同名吉富名地名、蓋當時在北郷界、其處不詳、都城川東村有高藤門、宮丸名在都城、郡村高辻帳、屬莊内中郷、頭書云、在北郷非中郷也、）　秋七月五日改元、（據和事始、）　恕翁公遣兵、夜襲野野美谷城、拔之、斬相良氏麾下勇士千町・牟田氏等數人、復使樺山音久居野野美谷城、今川貞兼罷師而去、（據恕翁公舊譜、島津支流系圖北郷氏譜、山田聖榮自記、應永記、是年七月下旬、恕翁公下野野美谷城、見應永記、舊譜從之、島津支流系圖北郷氏譜、則以野野美谷城陷、為是年三月七日夜事、又小松氏文書、恕翁公七月八日遣禰寢右馬助書云、去六日陷野野美谷城、據此則野野美谷城陷在七月六日矣、然恕翁公書無年、不知果為是年七月八日、疑以傳疑、因載於此、野野美谷城遺墟、在都城領主島津筑後別館北二里、其地係野野美谷村、按恕翁公舊譜・山田聖榮自記、皆言今川播磨守伐我、屯曾井、恕翁公使新納越後守禦之、連日接戰、會將軍遣朝山殿諭播州、令罷兵、播州聽命、於是朝山殿至志布志見公、此事無年、因是年今川貞兼伐我事、而附錄之、）　八月十五日、　恕翁公復使樺山音久領北郷後交村水田五町、（據島津支流系圖、後交村不詳所在、都城有後校村、疑是後交村、據恕翁公狀、後交村在北郷、而後校村、郡村高辻帳、在莊内南郷、則與後交村異其處矣、俟考、）十六日、左衞門佐遣今川了俊書使擊我、且移書薩摩大隅地頭御家人曰、宜屬今川伊豫入道麾下立軍功、（據小松氏文書、左衞門佐即斯波義將、將軍家譜、明德四年、義將代細川頼元往、明年又使恕翁公討高木久家、因言此事收局、然後入朝、又竟不往、再為管領、按明德二年、細川頼元遣久哲公書、使與恕翁公入朝、二公不幕府乃使管領擊我、而管領命了俊及地頭御家人如此、）　冬十二月十五日、　恕翁公使富山土佐介領大禰寢院郡本辨濟職如故、（據恕翁公舊譜、）幕府讓征夷大將軍於長子足利義持、（據將軍家譜、）　恕翁公求長谷場之地於長谷場久純、久純獻之、別以宅地五区償之、是歲創建福昌寺於長谷場、以為菩提所、以僧眞梁為寺主、（據恕翁公舊譜、長谷場氏世居長谷場、事見第五巻建武四年注、長谷場源助系圖、恕翁公賜長谷場六郎諱字、更名久純、按長谷場氏藏六郎久純建武四年卯月二十九日軍忠狀、系圖恐誤、福昌寺在府城北半里許、）眞梁俗姓伊集院氏、（據島津支流系圖、）

「元久公御譜中」

一上總介伊久與嫡子播磨守守久父子不快、且為胡越之隔、守久不顧天倫、欲攻於伊久之所居川邊城、而引率軍衆、對陣於平山、雖經數日、未嘗有勝負、元久敢不合力、且曰、父子鬪亂無是非之可言、速可有退陣焉、故守久重命屈理、徒開陣而退去于薩摩郡也、其後伊久使一价達元久曰、高祖　忠久以來代々所相傳之小十文字太刀同鎧在吾家、可附與于元久也、元久報曰、伊久數輩之有實子、何以代々重器與于予乎、伊久又曰、辭退如此、則當家寶器後來必可為佗家之用、然則於末世可口惜、早令領納、可成國泰民安之計者是幸也云云、因茲元久曰、今也無所固辭、互定於授受之役矣、自伊久者阿蘇谷周防介・石塚大和守、自元久者山田右京亮・伊地知

民部少輔也、太刀者阿蘇谷、鎧者石塚爲使役、而於川邊兩城之田間授之、太刀者山田、鎧者伊地知受之矣、所以授受于田間者、可無其故乎、雖有寺院、非慶賀之席、士卒庶民之陋室何用之哉、以之故如此也、其後元久寶器領納之報禮至重、不可勝言也、爰播磨守守久者、雖伊久之爲嫡子、重代之寶器不讓與于彼、而讓于元久、依之時人有兩樣之謳歌、一則曰、觀元久之威儀、則宜執三州之權柄、納子房於胸臆、施武略於佗邦、豫慮知之而如斯乎、伊久之遠慮神妙也、一則曰、累代之重器雖爲一族、與人空已可謂愚也、未知孰是、

511

「元久公譜中」

一伊久味方漸減、而川邊亦爲孤弱、雖然、有兩津（坊津、泊津、）之未變爲助、故使士卒爲警衛、爰伊集院某襲至、而警固勇士悉以屠殺、於茲乎不得在宅而去川邊於元久、所以伊久退薩摩郡也、

512

「仝」

一上總介伊久居住薩摩郡碇山城之際、有令本田信濃守忠親通密事爲相談曰、亡父師久法師道貞、自在碇山之時至于今、澁谷一族背當家爲讎敵者、於薩隅日諸所十有七ヶ度也、由是請下大將者、亦數度也、其憤無所欲止、高城・入來兩城之際撰要害地、設陣柵犯侮、則渠之一族馳以援來、暨此之時、可決勝於一戰云云、元久報曰、忠親所傳之命委曲所以承知也、未報澁谷之憤何敢可不遂乎、今也今川播磨守貞兼（範氏二男）、爲大將逼我國、因是所叛守護之凶徒屬渠之旗下、在莊内樺山城、爲寇者太急也、吾率軍衆往山西、可增軍勢於和田・高木、終其事還麑島、則馳候其地、可遂對談也、爰有聞當家興隆之佳瑞曰、探題今川伊豫入道了俊、不得在津于博多、將向歸京云云、如此則山西靜謐謂何可經數月乎、明德五年甲戌、（改元爲應永元年、）之春率大軍向莊内、已構陣營、二月十七日、於梶山有合戰、北郷又二郎忠通（二代讃岐守義久之四男、）遂戰死矣、又三月七日相挑之際、不意和田土佐守之軍敗味方及難儀、北郷藤二郎久秀（讃岐守義久之三男又二郎之兄也、）伊地知又七郎共戰死矣、北郷兄弟和田土佐守之孫子也、兩月之際各見戰死、則不堪哀傷引入高城、高木亦不得守梶山城引退花木矣、同年七月下旬、密謀陷野々三谷城、相良之勇士數輩斬獲、元久自岩川到其地使樺山美濃守音久爲城主、都城素北郷讃岐守義久所守之者堅矣、丁此之

時、大將今川播磨守貞兼不得在陣莊内、向山東退去也、

513 「伊久公御譜中」

伊久入道久哲與嫡子播磨守守久父子不快、且爲胡越之隔、守久不顧天倫、欲攻於父之居城川邊、而引率軍衆構陣於川邊平山、雖經數日未嘗有勝負、　太守元久公敢不合力、且曰、父子鬪亂無是非之可言、速可有退陣云云、守久重命屈理、徒令開陣退去薩摩郡畢、其後伊久讓代代之重器於　元久主畢、

514 「元久公譜中」

（本文ハ五一〇号ト同文ニツキ省略ス）

515 「元久公譜中」

（本文ハ五一一号ト同文ニツキ省略ス）

516 「仝」

（本文ハ五一二号ト同文ニツキ省略ス）

「以上御譜中ハ重復、可除也」

517 「應永記」「上文略ス」

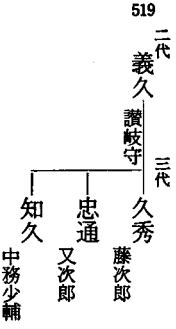
一遙代下道鑑御次男越後守氏久山北成一諾思給、然共氏久御心地不例之時、本田ノ忠親ニ有被仰旨、子息元久依中言（タチ）、山北殿可有不快之叉、御分心得可有之由被成御遺言、去程ニ陸奥守元久、山北殿ニ御重縁定之間、一家一揆國之人々勇ミ旬ル、馬上歩立、將犬追物構芝居之桟敷、觀樂得時、斯ケル處ニ、上總介伊久以本田忠親、元久ニ有ハ御談合、澁谷一族此多年向當方致不忠事、三ケ國於于所々拾七ケ度也、大將申下叉度々也、先高城・入來之間可然、在所於構取大陣者、彼一族定可馳寄、其時押巻可決安否、被仰元久御返叉、以本田蒙仰子細、先以目出度畏入候、愚身山西・高木ニ可致沙汰事候、急々馳參可申談候之由、被仰遣之處、可開當家之運瑞相出來ル、其故者、今川豫州一類可有上洛上意之由、聞得ケリ、明德五年ニ有改元号、應永元年甲戌「イ同七」閏四月下旬、野呑（イ目）谷之城ヲ忍落シテ、奥州御供本田被申候テ、自岩河打入給、彼城ニ樺山殿被籠置申、都城ハ北郷殿堅ク被持之間、山西弥々苦々敷成行之間、高木梶山之城ヲ開テ、花木ト云處ニ取移ケリ、

518

「北郷氏三代藤次郎久秀譜中」

應永元年春、或書明徳元年癸酉記之、癸酉當明徳四年、應永元年之前年也、今川播摩守貞兼爲大將、國一揆面面多勢襲和田・高木所守梶山城、義久爲援之、遣嫡子藤次郎久秀・次男又次郎忠通、防戰多日、太守元久公發向于梶山被構御陣、雖然、不意和田敗北、御方軍及難儀、同年二月十七日、忠通力戰而死、同年三月七日、久秀遂戰死、其夜陣内相議、夜中義久攻落相良氏所領野之三谷城、討相良兵千町・牟田氏、先是樺山氏爲伊東被奪梶山城、賴北郷氏在都城、此時與野之三谷城爲樺山氏住城、自此今川播州如山東退去、

519



520

「四代 知久譜中」

知久始有出家之志、入或寺而爲喝食、然應永元年、太守元久公被陣于梶山之時、兄久秀・忠通遂戰死、依之、元久公爲御養子、加冠而賜名知久、且拜領號鵜戸丸之寶刀、所以續家者也、

521

明徳五年甲戌

二月十七日、或は二十七日とも、北郷又二郎忠通義久ノ四男なり、今川播磨守貞兼庄内に來て、和田・高木等か梶山城を襲へる時き、力戰して死之、

三月七日、北郷藤二郎久秀また貞兼と梶山の城下に戰て死之、伊地知又七郎庄内に於て戰死とあり、久秀と同時なるへし、

522

「寫在樺山源三郎久清」

日向國北郷宮丸名事、於闕所時者、可有領知者也、但此内除本給人分、又同郷内高同名吉富事、坪付別紙在之、早任先例、可被所務之狀如件、

明徳五年卯月七日　　元久（花押）

桃山（音久）美濃守殿

「此書、桃山氏二代音久譜中ニ在リ」

523

「市來崎氏文書」

薩摩國山門院之内針原之内号高柳、壱町三反、

柚木田五反、市來崎之内薗壹ヶ所等事、可付沙汰市來崎彈正忠之狀如件、

明徳五年卯月九日　　伊与守（花押）

楠橋對馬守殿

設樂駿河守殿

524

『入來院氏文書』

去月五日於山門城、自身太刀打凶徒打取云々、殊感悦之至也、上洛之上者、此趣可注進之狀如件、

明徳五年四月廿五日　　「今川了俊」沙弥（花押）

清色（渋谷重継カ）美濃守殿

525

「正文在樺山源三郎久清」

北郷北方内後交村椎屋跡并野々三谷寺跡兩所水田五町事、爲給分所相計也、任先例、可有知行之狀如件、

明徳五年八月十五日　　元久（花押）

桄山（音久）美濃守殿

「此御書、樺山氏二代音久譜中ニ在リ」

526

『桄山氏文書』

（本文書ハ五二五号文書ト同文ニツキ省略ス）

527

「北郷氏文書」

嶋津上總介（伊久）・同又三郎（元久）事、可被加對治也、仍事書一通遣之、早可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

應永元　八　十六　　左衛門佐（新波義将）御判

今河伊与（了俊）入道殿

528

「同上」

嶋津上總介（伊久）・同又三郎（元久）對治事、所被仰今河伊与（了俊）入道也、早属彼手、可抽忠節之狀、依仰執達如件、

應永元　八　十六　　左衛門佐（新波義将）御判

529

「同上」

京都御事書条々（應永元八十六）

一島津上總介（伊久）・同又三郎（元久）等對治事、不日可被致沙汰矣、

一大隅薩摩兩國事、召出地頭御家人等、可致忠節之由、可被相觸也、若猶令向背之輩者、云名字、云知行分、可被注申候、

一彼輩等、今度馳參以後忠節事、就注進可有用捨矣、

以上　　御判

「御教書事書条　三通」

530

「恕翁公譜中」

一以禪法鳴于世石屋大和尚（伊集院長門守忠國法師無等末子、）遍參既成、下向當國矣、嘉慶元年丁卯、建立梵宇於伊集院城外、稱妙圓寺、使石屋爲開山、頃年元久歸心於曹洞、故請得石屋之示覺佛心之難得、石屋亦欣々然應諾、因茲行有餘力則以扣禪關、但惜無常之道、盡虛空本體之藴奥而已、於茲乎欲造立梵宇於麑島、占寺地於長谷場六郎久純之宅地、即稱返地畀五ヶ所之宅地、使久純移去矣、于時應永元年甲戌已有興作、庶民攻之、不日而終土木之功、唯山門與經倉未成耳、于時定稱號曰、號玉龍山、稱福昌寺、令石屋爲住持、宗敬殊以甚矣、

531

「大口高城氏蔵」

澁谷出雲彦太郎

平　重長

應永元年十一月十五日

532

「仝」

澁谷出雲彦六

平　重友

應永五年十一月十五日

533

「正文在岩元清左衛門家綱」

嶋津庄日向方三俣院雖爲相國領、下地五町事、爲給分所相計也、任先例、可領掌之狀如件、

應永元年十一月廿六日　　元久（花押）

岩元清左衛門尉とのへ

「此文書、元久公御譜中ニ在リ」

534

「元久公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼屋家臣喜入志々目正兵衛義辰」

大隅國大祢寢院郡本弁濟職之事

右、由緒之地云々、安堵不可有相違、任先例、可有領掌之狀如件、

應永元年十二月十五日　　藤原（島津元久）（花押）

富山土佐介殿